

御茶園遺跡

(第4地点第2次)

— 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2016

水戸市教育委員会

お さ えん い せき
御 茶 園 遺 跡

(第4地点第2次)

— 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2016

水戸市教育委員会

ごあいさつ

水戸市は、那珂川の流域に位置し、八溝山系の山並みと、那珂川・千波湖の豊かな自然に囲まれています。私たちの祖先もこの豊かな自然のもと、生活を営んできました。

御茶園遺跡は、千波湖の北、桜川と逆川に挟まれた千波・緑岡台地の上に立地しています。小字名の由来となる茶園は、天保6年に第9代水戸藩主徳川齊昭により開かれたものです。かつては農村でしたが、第2次世界大戦後には、経済成長で急速に都市化が進みました。

このたびの調査は、当該遺跡内において宅地造成工事が計画され、遺跡への影響が予想されたため、文化財保護の観点から十分に協議を重ねましたが、遺跡の現状保存が困難であるとの結論に至り、次善の策として発掘調査を実施し、記録の上での保存措置を講ずることとしたものです。このたびの調査は、当該遺跡内におけるはじめての本発掘調査となりました。

本調査により、縄文時代から古墳時代を中心とする遺構・遺物が確認されました。特に古墳時代においては、竪穴建物跡8軒を中心に集落遺構が検出され、当時の土地利用の一端が明らかになり、当該地域における過去の土地利用の事例についての、新たな知見を得ることが出来ました。

本書が、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、今後広くご活用いただければ幸いです。

終わりに、本調査の実施にあたり、多大なご理解とご協力をいただきました事業主、地域住民の皆様、並びに種々のご指導・ご助言を賜りました皆様方に、心から御礼と感謝を申し上げます。

平成28年3月

水戸市教育委員会

教育長 本多 清峰

例　言

1. 本書は、水戸市に所在する御茶園遺跡（第4地点）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、関東文化財振興会株式会社の調査支援を受け、水戸市教育委員会が実施した。
3. 調査の概要是下記の通りである。

所 在 地 茨城県水戸市千波町字千波山 2591-1, 2592-1, 2593-2, 2594-1, 2594-3 の一部,
2594-4 の一部, 2594-6, 2594-7 の一部, 2595-7 の一部, 2595-10

調 査 面 積 562 m²

調 査 期 間 平成 27 年 3 月 7 日～平成 27 年 4 月 10 日

調 査 指 導 米川暢敬（水戸市教育委員会事務局 教育部 歴史文化財課 埋蔵文化財センター主幹）

調 査 担 当 宮田和男・萩原宏季（関東文化財振興会株式会社）

調査参加者 大越慶子、大橋正子、大山晴美、川又恵美子、郡司ゆき子、佐久間憲子、佐久間弘美、
佐久間順美、高野正行、對馬むつみ、中井川肇、平井百合子、藤倉秋之助、益子光江、
山崎美知子
4. 本書の執筆・編集は、第1章第1節を水戸市教育委員会が、第1章第2節から第4章までを水戸
市教育委員会の指導を受けて宮田和男・林邦雄（関東文化財振興会株式会社）が担当した。
5. 遺物の写真撮影は宮田が行い、遺構・遺物図面のトレイスは對馬むつみ（関東文化財振興会株式会社）
が行った。
6. 調査組織は下記のとおりである。

水戸市教育委員会教育長 本多 清峰
事務局
　　飯村 博史 水戸市埋蔵文化財センター所長（平成 27 年 3 月 31 日まで）
　　長谷川 仁 水戸市埋蔵文化財センター所長（平成 27 年 4 月 1 日から）
　　米川 暢敬 水戸市埋蔵文化財センター主幹
　　山戸 祐子 水戸市埋蔵文化財センター嘱託員
　　太田有里乃 水戸市埋蔵文化財センター埋蔵文化財専門員（平成 27 年 4 月 1 日から主事）
　　丸山優香里 水戸市埋蔵文化財センター埋蔵文化財専門員
　　鈴木 学 水戸市埋蔵文化財センター埋蔵文化財専門員（平成 27 年 3 月 31 日まで）
　　昆 志穂 水戸市埋蔵文化財センター埋蔵文化財専門員
7. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して
深く謝意を表す次第です（五十音順・敬称略）。

阿久津久 後藤一成 カワヒロ産業 古川登記測量事務所 茨城県教育庁文化課
8. 本調査における出土遺物および写真等は、水戸市教育委員会において保管している。

凡 例

1. 本書に記してある座標値は、世界測地系第IX系を用いている。方位は座標北を示す。
2. 本文中の色調表現は、『新版標準土色帖』2008年版（農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所指色票監修）を用いた。
3. 標高は海拔高である。
4. 掲載した図面の基本縮尺は、以下の通りである。
遺構図 調査区全体図 1/300、竪穴住居跡 1/30・1/60・1/80、溝跡 1/60・1/80、土坑 1/30
なお、変則的な縮尺を用いた場合には、スケールによりその縮尺率を表している。
遺物図 土器・石器 1/3 を原則とする。ただし、その種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで示した。
5. 写真図版は、原則として実測図の縮尺に合わせて掲載した。また遺物番号は本文、挿図、写真図版と一致する。
6. 遺構・遺物実測図中のスクリーントーンおよび記号は、以下に示すとおりである。

	火床面・焼土範囲・繊維土器断面
	カマド構築材・粘土・黒色処理・赤色付着物
	赤変範囲・煤範囲
	柱アタリ範囲
	須恵器断面
●	土器
■	石器
---	硬化面範囲
7. 本書中に用いた略記号は以下を示す。
S I : 竪穴建物跡 SD : 溝跡 SK : 土坑 T P : テストピット K : 搾乱
P : 土器
8. 遺物属性一覧に付した () は復元値、() は残存値である。
9. 「主軸」はカマドを持つ竪穴建物跡についてはカマドを通る軸線とし、他の遺構については、長軸（長径）とみなした。また、「主軸（長軸）方向」は、その主軸が座標北から見て、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例 N -10° - W）
10. 計量表における「壺類」「甕類」は、遺物が小片であるため、壺（甕）や高壺（壺）、高台付壺（鉢）などと判断できなかったものを、まとめて計量している。また、判断できた遺物は独立させて項目を作っている。
11. 本遺跡の略号は 201325 - 004 である。遺物の注記もこれに従っている。

目 次

ごあいさつ	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理作業の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3節 御茶園遺跡における既往の調査	7
第3章 調査の方法と成果	8
第1節 調査の方法	8
第2節 基本層序	8
第3節 遺構と遺物	11
1 繩文時代の遺物	11
2 弥生時代の遺物	15
3 古墳時代の遺構と遺物	16
4 中世以降の遺構	52
第4章 考察	65
引用・参考文献	
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 御茶園遺跡の位置	2	第21図 第5号堅穴建物跡出土遺物(2)	32
第2図 御茶園遺跡と周辺の遺跡位置	4	第22図 第5号堅穴建物跡出土遺物(3)	33
第3図 基本層序図	8	第23図 第6号堅穴建物跡	36
第4図 御茶園遺跡と調査地点の位置	9	第24図 第6号堅穴建物跡カマド	37
第5図 調査区全体図	10	第25図 第6号堅穴建物跡出土遺物(1)	37
第6図 繩文時代の遺構外出土遺物	12	第26図 第6号堅穴建物跡出土遺物(2)	38
第7図 弥生時代の遺構外出土遺物	15	第27図 第7号堅穴建物跡	40
第8図 第1号堅穴建物跡	17	第28図 第7号堅穴建物跡カマド	41
第9図 第1号堅穴建物跡出土遺物	17	第29図 第7号堅穴建物跡出土遺物(1)	42
第10図 第2号堅穴建物跡	19	第30図 第7号堅穴建物跡出土遺物(2)	43
第11図 第2号堅穴建物跡出土遺物	19	第31図 第7号堅穴建物跡出土遺物(3)	44
第12図 第3号堅穴建物跡	21	第32図 第7号堅穴建物跡出土遺物(4)	45
第13図 第3号堅穴建物跡炉跡	22	第33図 第8号堅穴建物跡	49
第14図 第3号堅穴建物跡出土遺物	22	第34図 第8号堅穴建物跡出土遺物	49
第15図 第4号堅穴建物跡	24	第35図 古墳時代の遺構外出土遺物(1)	50
第16図 第4号堅穴建物跡カマド	25	第36図 古墳時代の遺構外出土遺物(2)	51
第17図 第4号堅穴建物跡出土遺物	27	第37図 第1号溝跡	53
第18図 第5号堅穴建物跡	29	第38図 第2号溝跡	55
第19図 第5号堅穴建物跡炉跡	31	第39図 第1号から第5号土坑	57
第20図 第5号堅穴建物跡出土遺物(1)	31	第40図 第6号から第8号土坑	59

表目次

第1表 御茶園遺跡と周辺の遺跡一覧	5	第9表 第3号堅穴建物跡内部施設属性一覧	
第2表 御茶園遺跡における既往の調査一覧			21
.....	7	第10表 第3号堅穴建物跡出土土器属性一覧	
第3表 繩文時代出土土器属性一覧	13		23
第4表 繩文時代出土石器属性一覧	15	第11表 第4号堅穴建物跡内部施設属性一覧	
第5表 弥生時代出土土器属性一覧	15		26
第6表 第1号堅穴建物跡内部施設属性一覧		第12表 第4号堅穴建物跡出土土器属性一覧	
.....	16		28
第7表 第1号堅穴建物跡出土土器属性一覧		第13表 第4号堅穴建物跡出土石器属性一覧	
.....	18		28
第8表 第2号堅穴建物跡出土土器属性一覧		第14表 第5号堅穴建物跡内部施設属性一覧	
.....	20		31

第 15 表 第 5 号竪穴建物跡出土土器属性一覧	33	第 21 表 第 7 号竪穴建物跡出土石器属性一覧	47
.....
第 16 表 第 5 号竪穴建物跡出土土製品属性一覧	34	第 22 表 第 8 号竪穴建物跡内部施設属性一覧	48
.....
第 17 表 第 6 号竪穴建物跡内部施設属性一覧	35	第 23 表 第 8 号竪穴建物跡出土遺物属性一覧	50
.....
第 18 表 第 6 号竪穴建物跡出土土器属性一覧	38	第 24 表 古墳時代遺構外出土遺物属性一覧	51
.....
第 19 表 第 7 号竪穴建物跡内部施設属性一覧	39	第 25 表 出土遺物計量表	60
.....
第 20 表 第 7 号竪穴建物跡出土土器属性一覧	46		

写真図版目次

- 図版 1** 調査区完掘全景 北西より、調査区完掘全景（中央部～西部） 南東より、調査区完掘全景（東部） 南西より
- 図版 2** 第 1 号竪穴建物跡完掘状況 南東より、第 1 号竪穴建物跡遺物出土状況 南より、第 2 号竪穴建物跡遺物出土状況 南東より、第 2 号竪穴建物跡遺物出土状況 北東より、第 2・6 号竪穴建物跡完掘状況 東より、第 2 号竪穴建物跡遺物出土状況 東より、第 2 号竪穴建物跡土層 北東より、第 3 号竪穴建物跡完掘状況 北西より
- 図版 3** 第 3 号竪穴建物跡土層 南西より、第 3 号竪穴建物跡炉跡土層 南より、第 4 号竪穴建物跡完掘状況 南東より、第 4 号竪穴建物跡土層 南東より、第 4 号竪穴建物跡カマド完掘状況 南東より、第 4 号竪穴建物跡カマド土層 南東より、第 4 号竪穴建物跡遺物出土状況 南東より、第 4 号竪穴建物跡掘り方完掘状況 南東より
- 図版 4** 第 4 号竪穴建物跡カマド掘り方完掘状況 東より、第 5 号竪穴建物跡完掘状況 南より、第 5 号竪穴建物跡土層 南より、第 5 号竪穴建物跡炉跡完掘状況 南より、第 5 号竪穴建物跡貯蔵穴完掘状況 東より、第 5 号竪穴建物跡貯蔵穴土層 東より、第 5 号竪穴建物跡 2 号ビット土層 南東より、第 5 号竪穴建物跡遺物出土状況 南より
- 図版 5** 第 5 号竪穴建物跡遺物出土状況 東より、第 5 号竪穴建物跡掘り方完掘状況 南より、第 6 号竪穴建物跡カマド完掘状況 南より、第 6 号竪穴建物跡貯蔵穴遺物出土状況 東より、第 6 号竪穴建物跡貯蔵穴土層 東より、第 6 号竪穴建物跡カマド袖部断ち割り状況 南より、第 7 号竪穴建物跡完掘状況 南西より、第 7 号竪穴建物跡土層 南東より
- 図版 6** 第 7 号竪穴建物跡カマド完掘状況 南東より、第 7 号竪穴建物跡カマド土層 西より、第 7 号竪穴建物跡カマド 1 号ビット土層 東より、第 7 号竪穴建物跡遺物出土状況 南より、第 7 号竪穴建物跡遺物出土状況 北より、第 7 号竪穴建物跡遺物出土状況 南より、第 7 号竪穴建物跡遺物出土状況 南西より、第 7 号竪穴建物跡カマド遺物出土状況 南より

- 図版 7 …第 7 号竪穴建物跡カマド遺物出土状況 南より, 第 7 号竪穴建物跡掘り方完掘状況 南より, 第 8 号竪穴建物跡完掘状況 南より, 第 8 号竪穴建物跡土層 南西より, 第 8 号竪穴建物跡掘り方完掘状況 北西より, 第 1 号土坑土層 南東より, 第 2 号土坑土層 南西より, 第 3 号土坑完掘状況 北西より
- 図版 8 …第 4・7 号土坑完掘状況 北東より, 第 5 号土坑完掘状況 南東より, 第 6 号土坑完掘状況 南西より, 第 8 号土坑完掘状況 南東より, 第 1 号溝跡・第 4 号土坑完掘状況 北より, 第 2 号溝跡完掘状況 南東より, 基本層序 北東より
- 図版 9 …第 1 号竪穴建物跡遺物 1・2, 第 2 号竪穴建物跡遺物 1~4, 第 3 号竪穴建物跡遺物 1・2
- 図版 10 第 4 号竪穴建物跡遺物 1~7
- 図版 11 第 4 号竪穴建物跡遺物 8, 第 5 号竪穴建物跡遺物 1~6
- 図版 12 第 5 号竪穴建物跡遺物 7~13・15
- 図版 13 第 5 号竪穴建物跡遺物 14・16, 第 6 号竪穴建物跡遺物 1~4
- 図版 14 第 6 号竪穴建物跡遺物 5, 第 7 号竪穴建物跡遺物 1~7
- 図版 15 第 7 号竪穴建物跡遺物 8~14
- 図版 16 第 7 号竪穴建物跡遺物 15~19
- 図版 17 第 7 号竪穴建物跡遺物 20~25
- 図版 18 第 8 号竪穴建物跡遺物 1~3, 縄文時代の遺構外出土遺物(1)
- 図版 19 縄文時代の遺構外出土遺物(2), 弥生時代の遺構外出土遺物
- 図版 20 古墳時代の遺構外出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成 26 年 12 月 3 日付で、宅地造成工事に伴い、事業者から茨城県教育委員会（以下、県教委）教育長あての文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく届出が、水戸市教育委員会（以下、市教委）に提出された。

開発が計画されている千波町 2591 番 1 ほかは、周知の埋蔵文化財包蔵地「御茶園遺跡」の範囲に該当していた。そのため、市教委は、当該地点における埋蔵文化財の存否を確認するため、平成 26 年 9 月 9 日から 9 月 12 日にかけて、試掘調査を行った。その結果、数多くの埋蔵文化財が発見され、今回の事業計画と照合したところ、開発道路及び雨水浸透貯留構造設置所において、確認された埋蔵文化財への影響は避けられないとの判断に至った。これを受けて市教委は、埋蔵文化財の保存のあり方について事業者との協議を重ねたが、設計変更等による遺構の現状保存が極めて困難であるとの結論に達した。このため市教委は、事業者から提出のあった届出を県教委へと進呈し、県教委から上記部分において、次善の策として記録保存を目的とした本發掘調査を実施すること、調査の結果重要な遺構が確認された場合には、その保存について別途協議を要する旨の指示・勧告があった。

これを受け、事業者は市教委・関東文化財振興会株式会社と発掘調査実施に係る協定書を締結したうえで、関東文化財振興会株式会社と発掘調査業務委託契約を締結し、当該調査を御茶園遺跡第 4 地点第 2 次発掘調査として、平成 27 年 3 月 7 日から発掘調査を実施することとなった。（米川）

第2節 発掘作業の経過

発掘調査は平成 27 年 3 月 7 日から平成 27 年 4 月 10 日までの約 1 ヶ月間にわたって実施した。3 月 7 日より資機材の搬入などを行い、翌日の 8 日より重機を用いて調査区の表土除去と並行してジョレンなどを用いて遺構の確認作業を行った。重機による表土掘削および遺構確認作業は 10 日までに完了し、順次遺構の掘削作業や搅乱土の除去作業を調査区北西部から開始している。遺構は一部、搅乱により壊されていたが、順調に進歩し、4 月 6 日には堅穴建物跡の掘り方を含めた遺構の掘削を完了し、全景写真を撮影した。その後、7 日から 9 日に残務作業および撤収作業と並行して調査区の埋め戻しを行い、10 日に調査区埋め戻し作業を終了し、発掘作業の全日程を完了している。（林）

第3節 整理作業の経過

整理作業は平成 27 年 4 月 11 日より平成 28 年 3 月 18 日までの約 11 ヶ月間にわたって実施した。

4 月から 6 月期は遺物の洗浄・注記・接合作業を中心に行い、5・6 月期は遺構図面の修正および遺物の実測、6 月から 8 月期は遺物写真的撮影・図版作成・原稿執筆・報告書編集作業を行った。9 月 1 日に入稿し、平成 28 年 1 月 18 日に校了、3 月 18 日に発行した。（林）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

御茶園遺跡は、北緯36度21分56秒、東経140度26分52秒（世界測地系）の茨城県水戸市千波町字千波山2591-1ほかに所在する。

茨城県の中央部を大きく蛇行しながら南東に流れる那珂川の両岸には広大な沖積低地と洪積台地が形成されている。水戸市は那珂川の下流部、県中央部東側に位置して、那珂川右岸の沖積低地と洪積台地を中心へ発達しており、市域の地形区は主に那珂川やその支流である桜川支谷により構成される沖積低地、東茨城台地の北東部をなす「水戸台地」と呼ばれる洪積台地、八溝山地の中央部にあたる鶴足山塊の外縁部にあたる丘陵部に分けられ、御茶園遺跡はこのうち、通称「千波・緑岡台地」と呼ばれる洪積台地の北側先端部、標高19.5mから22.3m付近に位置する。遺跡西側には桜川が蛇行しながら流れ、支流である沢渡川と合流し、北側で千波湖に注ぐ。御茶園遺跡が位置する千波町は東に元吉田町、西に見川町、南に笠原町、北に千波湖と接し、梅香一丁目や備前町、常磐町一丁目と隣接している。町内を南北に走る県道50号線は、旧陸前浜街道である。天保年間の検地帳には田畠百七町余、分米七百六石余とあり、第2次世界大戦前までは麦畑や農家が点在する農村風景が広がっていた。しかし、終戦後の経済発展に伴い、急速に都市化が進み、現在では住宅や商店などが立ち並ぶ状況となっている。

（林）



第1図 御茶園遺跡の位置（国土地理院発行1:50,000「水戸」に加筆、修正）

第2節 歴史的環境

御茶園遺跡は、県指定史跡「水戸城跡」の南西3kmに位置する遺跡であり、その範囲は東西170m、南北450mに及ぶ（第2図）。御茶園遺跡が立地する千波・緑岡台地には、旧石器時代から近代に至るまでの多数の集落跡や古墳、中世以降の城館跡等が確認されている（第2図・第1表）。以下では、今回の発掘調査で確認された縄文時代から古墳時代を中心とする周辺遺跡を概観する。

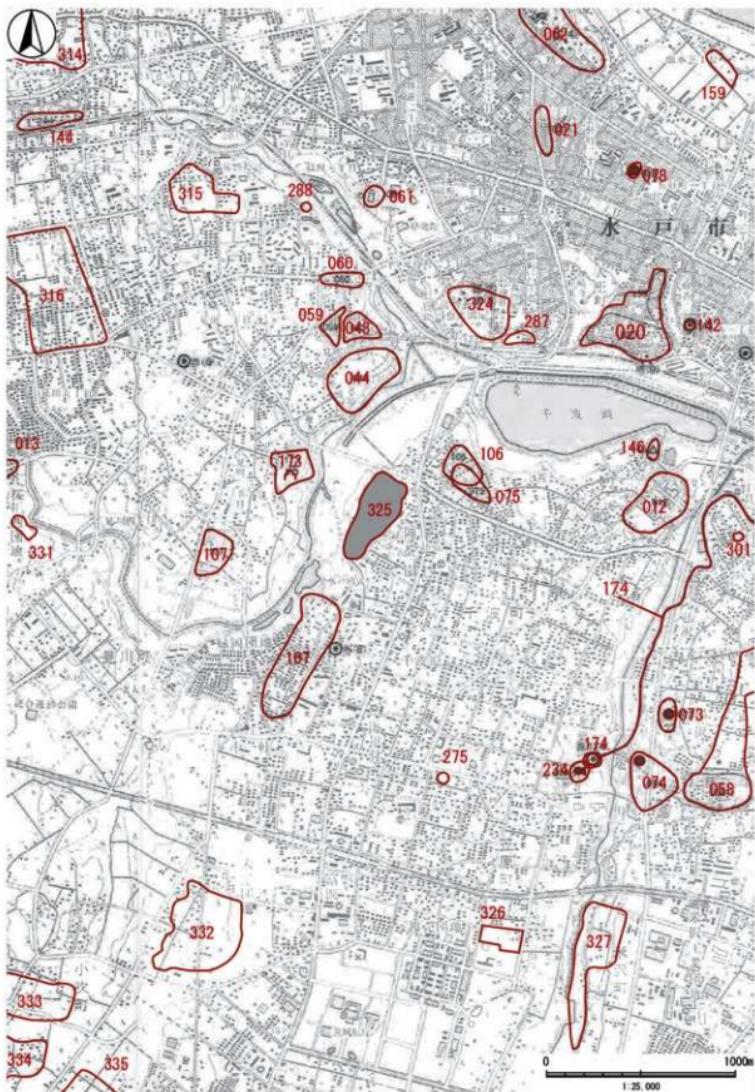
（1）旧石器時代から縄文時代

旧石器時代の遺跡は、御茶園遺跡から桜川の開析谷を挟んだ北側1.0kmほどに位置する植松遺跡（043）のみ報告されているが、その詳細は不明である。

御茶園遺跡周辺の縄文時代の遺跡は数多く確認されているが、大半は踏査による確認である。下本郷遺跡（012）、見和遺跡（013）、釜神町遺跡（020）、並松町遺跡（021）、植松遺跡（043）、見川塚畠遺跡（044）、千波山遺跡（106）、宮西遺跡（144）、柳崎貝塚（146）、根本町遺跡（159）、泉上遺跡（335）などが登録されている。市内では、若林遺跡や蛭遺跡、アラヤ遺跡、軍民坂遺跡、大串貝塚、谷田貝塚、吉田貝塚などが該当する。当該期の水戸市域において、生活の痕跡が確認できる最初の時期は、早期稲荷台式期の燃糸文系土器である。集落跡など、発掘調査が行われた事例は少ないものの、アラヤ遺跡の台地縁辺部分において、早期の堅穴状遺構が7基検出されていることは注目すべきである。前期も概ね早期と集落などの状況に変化はないが、前期前葉の貝塚が確認されている。千波町の柳崎貝塚、谷田町の谷田貝塚、『常陸國風土記』に巨人伝説が記され、古代からその存在が知られていた大串貝塚などがこれにあたる。前2者はいずれも小規模な貝塚である。これらの早期や前期の遺跡の立地をみると、台地縁辺部分に集中して存在する傾向を持つ。中期になると、集落は台地の縁辺部から内部に分布域が拡がり、遺跡数も早・前期に比べ増加傾向にある。本遺跡の近隣では、桜川を挟んだ対岸である見和台地に位置する若林遺跡や蛭遺跡などから、多量の中葉阿玉台式期から後葉加曾利E式期の土器と共に、袋状土坑や堅穴建物跡などが検出され、大規模集落の存在が想定されている。また、那珂川北岸の軍民坂遺跡では縄文時代中期後半加曾利E III式期の堅穴建物跡が調査され、うち1軒は、東北地方においてよく知られ、県内でも類例が少ない石組複式炉を持つことが明らかとなっている。また、元吉田町の吉田貝塚などの貝塚も確認されている。後期では、水戸市域では中葉の加曾利B式期を中心に検出・出土しているが、中期と比べ遺跡数は少なくなる傾向が確認される。アラヤ遺跡においては、初頭の称名寺式期から加曾利B式期までの包含層や堅穴建物跡、土坑などと共に、異形注口土器が検出されている。晩期になると、遺跡数は極端に少くなり、関東一円の傾向と歩を同じくする。水戸市域では、遺跡数の減少傾向は弥生時代後期頃まで続く。

（2）弥生時代

御茶園遺跡周辺における弥生時代の遺跡は植松遺跡（043）、見川塚畠遺跡（044）、米沢町遺跡（058）などが登録されており、その他には堀遺跡や大鋸町遺跡、お下屋敷遺跡、薬王院東遺跡などが該当する。堀遺跡や大鋸町遺跡では、弥生時代後期の堅穴建物跡から、弥生土器と土師器が共伴して出土し、古墳時代への過渡期の遺構・遺物として注目されている。お下屋敷遺跡では4軒、薬王院東遺跡では10軒の弥生時代後期の堅穴建物跡が検出されている。当該期の集落は、吉田台地や上市台地上を中心拡がっているが、その他の地域では少ない状況である。



第2図 御茶園遺跡と周辺の遺跡位置（茨城県遺跡地図 1:25,000「水戸 L・R」に加筆）

第1表 御茶園遺跡と周辺の遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	種類	時代						備考
			田石	縄文	弥生	古墳	秦漢	中世	
012	下本道跡	集落跡	○						
013	見和遺跡	集落跡	○		○				埋蔵
020	釜仲町遺跡	集落跡	○					○	
021	並松町遺跡	集落跡	○						
043	植松遺跡	集落跡	○	○	○	○			
044	見川塚塼遺跡	集落跡	○	○				○	
058	米沢町遺跡	集落跡		○	○	○			
059	横西遺跡	集落跡				○			
060	板上遺跡	集落跡			○				埋蔵
061	東町遺跡	集落跡			○	○			埋蔵
062	灰城畠等学校遺跡	集落跡	○			○			
073	私沢古墳群	古墳群			○				円墳2, 埋蔵
074	福沢古墳群	古墳群			○				円墳4, -記埋蔵
075	千歳山古墳群	古墳群			○				前方後円墳1, 円墳2
078	五軒町古墳群	古墳群			○				円墳2, 埋蔵
103	楓竹瀬遺跡	塩漬跡					○		
106	千波山道跡	集落跡	○						
107	大内田遺跡	集落跡	○		○				
142	鷹匠町遺跡	火葬墓				○			
144	宮西遺跡	集落跡	○		○				埋蔵
146	櫛崎貝塚	貝塚	○						
159	板木町遺跡	集落跡	○						
167	春柳遺跡	集落跡			○				
173	見川塚跡	塩漬跡					○		
174	笠原水道	水道跡					○		県指定史跡
234	笠原古墳群	古墳群			○				前方後円墳1, 円墳1
275	笠原南塚	塚						○	
287	七面製陶所跡	生産遺跡						○	
288	圓薦堂跡	生産遺跡						○	
301	舟付遺跡	包藏地				○			
314	西塙原遺跡	包藏地			○				
315	見和一丁目遺跡	包藏地			○				
316	見和二丁目遺跡	包藏地			○				
324	旧僧楽園	庭園跡					○		
325	御茶園遺跡	包藏地							
326	笠原中畠遺跡	包藏地							
327	米沢中畠遺跡	包藏地				○	○		
331	丹下一ノ牧野馬土手跡	野馬土手						○	
332	丹下樺現遺跡	包藏地				○		○	
333	小吹西原北遺跡	包藏地				○			
334	小吹西原南遺跡	包藏地				○			
335	泉上遺跡	包藏地		○		○			

(3) 古墳時代

御茶園遺跡周辺における古墳時代の遺跡は、見和遺跡、坂上遺跡（060）、植松遺跡、東町遺跡（061）、宮西遺跡、杏掛遺跡（167）などが登録されている。市内では大鋸町遺跡、台渡里官衙遺跡宿屋敷・南前原地区、堀遺跡などが該当する。集落跡は前期から後期にかけて確認されているが、大半は踏査による確認である。当該期が中心となる集落の調査事例は少ない。市内では、大鋸町遺跡より前期から後期に至る31軒の堅穴建物跡が検出され、9点の古式須恵器が出土している。台渡里官衙遺跡群や堀遺跡では、終末期の堅穴建物跡が検出されている。

御茶園遺跡の周辺に営まれている古墳群は、後期から終末期を中心に確認されている。円墳2基の払沢古墳群（073）、円墳4基の福沢古墳群（074）、前方後円墳1基と円墳2基の千波山古墳群（075）、前方後円墳1基と円墳1基の笠原古墳群（234）が登録されている。その他、八角形墳とみられる国指定史跡の第1号墳を含む吉田古墳群が該当する。しかし、大半の古墳は中世以降の土地変更により埋没している。吉田古墳群は4基の古墳が確認されており、そのうち、国指定史跡である第1号墳の横穴式石室玄室奥壁には、武器や武具の線刻画が刻まれ、水戸市教育委員会による近年の調査により、県内でも類例の無い八角形墳と確認されている。造営年代は7世紀半ばと考えられる。その他、台渡里官衙遺跡・南前原地区において、那賀郡衙の前身施設である評衙あるいは豪族の居館と考えられる、一辺75m程の堀で囲まれた区画城が検出されている。この区画城の堀跡から7世紀後半の土器が出土している。なお、当該期には本遺跡周辺だけでなく、水戸市域全城にわたり集落や古墳が造営されている。古墳は台地ごとにある程度のまとまりを見せており、古墳に代表される墓域、台渡里官衙遺跡宿屋敷・南前原地区にみられるような公の施設等、生活区域が分かれていたものと推測される。

(4) 古代以降

御茶園遺跡周辺における奈良・平安時代の遺跡としては、米沢町遺跡、横西遺跡（059）、東町遺跡、鷹匠町遺跡（142）、舟付遺跡（301）、西堀原遺跡（314）、見和一丁目遺跡（315）、見和二丁目遺跡（316）、米沢中組遺跡（327）、丹下権現遺跡（332）、小吹西原北遺跡（333）、小吹西原南遺跡（334）、泉上遺跡など数多くの遺跡が該当する。市内では、那賀郡衙とその郡名寺院と考えられる台渡里廃寺跡を含む国指定史跡の台渡里官衙遺跡群、その周辺遺跡であるアラヤ遺跡や堀遺跡、河内駅家と考えられる田谷遺跡（旧田谷廃寺跡）や白石遺跡などが挙げられる。台渡里官衙遺跡（長者山地区）では、正倉院と考えられる基壇や掘立柱建物跡、2重の区画溝などや大量の瓦などが検出・出土している。台渡里廃寺跡は、水戸市教育委員会による発掘調査により、北側の寺院は7世紀後半ごろに創建され、9世紀後半において火災により廃絶、その後、南側に寺院を再建しようとしたが途中で中止となった可能性が指摘されている。アラヤ遺跡や堀遺跡からは、当該期の堅穴建物跡や掘立柱建物跡とともに、工房跡や粘土探査坑などが検出されている。田谷遺跡からは、多数の瓦が出土し、3箇所の基壇と礎石の存在が確認されるとともに、隣接する白石遺跡からは、長さが桁行約88mにもなる掘立柱建物跡が報告されている。これらは8世紀前半に帰属すると考えられている。

中世には水戸市周辺において20近くの城館が確認されており、戦乱の激しさを物語っている。御茶園遺跡の周辺では、横竹限遺跡（103）、見川城跡（173）が城館跡として、包蔵地として米沢中組遺跡が登録されている。市内では、水戸城跡や河和田城跡、吉田城跡、長者山城跡が該当する。水戸城は平安時代末から鎌倉時代初期に常陸大掾馬場資幹（水戸大掾氏）が築城し、当初は、馬場城と呼称されていた。応永33（1426）年に河和田城主・江戸通房によって占拠されると、天正18（1590）

年の太田城主・佐竹義重・義宣による江戸氏討伐までの165年間、江戸氏によって支配された。その後、佐竹氏が文禄2（1593）年から慶長7（1602）年の秋田転封までの間、積極的に城郭の拡張や地割の変更などを行い、水戸城の基礎が築かれている。横竹隈遺跡は、大掾氏一族の立原氏の築城、吉田城跡は大掾氏一族の吉田氏の居城であったといわれる。見川城跡や長者山城跡は、江戸氏一族の春秋氏の居城であったといわれるが、春秋氏については資料が少なく、はっきりとしたことは分かっていない。中世の水戸市域は戦乱が激しかったものと推測されるが、近世に続く町割りなどの基礎が築かれた時期でもあった。

慶長7（1602）年の佐竹氏秋田転封後、徳川家康の第5子の武田信吉が入封したが、翌年病死したため、第10子頼宜が、水戸城主となる。続いて第11子頼房が入城して水戸徳川家初代藩主となり、水戸藩の基礎を築いていく。御茶園遺跡周辺における近世の遺跡は、釜神町遺跡、見川塚畠遺跡、笠原水道（174）、笠原南塚（275）、七面製陶所跡（287）、團裏窯跡（288）、借楽園（324）、丹下ノ牧野馬土手（331）、丹下権現遺跡などが挙げられる。当該期は、塚や水道跡、窯跡、野馬土手など遺跡の種類が多様であることが特徴である。釜神町遺跡では、平成20（2008）年の水戸市教育委員会における発掘調査で蒔絵の箱物が出土している。笠原水道は寛文3（1663）年に築かれ、その後改修を経て現在までその姿を保っており、昭和13（1938）年に県指定史跡に指定された。七面製陶所跡および團裏窯跡は近世の窯跡であり、七面製陶所跡では徳川斉昭の命により開窯して、天保4（1833）年～明治4（1871）年の約40年と短い期間に「七面焼」と称された陶器や磁器などを焼成している。團裏窯跡は平成18（2006）年に確認された窯跡で、七面製陶所跡と同時期に操業されていたと考えられ、日常的に使用される雑器を中心に焼成されていた。借楽園は徳川斉昭が天保4（1833）年に構想し、天保13（1842）年着工開始、翌年完成した庭園で、明治以降は常磐公園と改称され、大正11（1922）年に国の史跡及び名勝として指定された。

（林）

第3節 御茶園遺跡における既往の調査

御茶園遺跡においては、これまで3地点において発掘調査が行われている（第2表・第4図）。しかし、過去3回の調査において、ごく少量の遺物は出土しているが、遺構は検出されていない。従って、今回の調査が本遺跡における初めての本格的な調査となる。

（米川）

第2表 御茶園遺跡における既往の調査一覧

地点名	調査箇所	調査年度	種別	調査原因	遺構	遺物
第1地点	千波町2501	H24	試掘	個人住宅	—	—
第2地点	千波町2507	H25	試掘	個人住宅	—	—
第3地点	千波町2540-12	H26	試掘	個人住宅	—	—

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区の座標は公共座標を基準に設定した。

調査対象地は、宅地造成工事の道路予定地で、北西から南東に延びる幅7mほどの細長い調査区である。また、3ヶ所に下水用の橋を設置するため、北側や南側に向かい突出する部分がある。調査総面積は562m²を測る。調査区内は、擾乱などが調査区中央部や東側を中心に分布するが、概ね遺構の残存は良好であった。

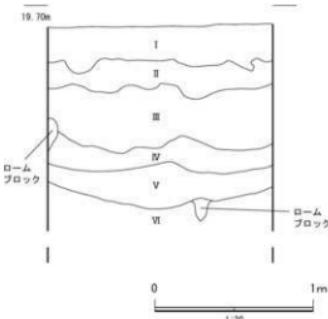
調査にあたっては、重機を用いて表土・盛土層を除去した後に、ジョレンなどを用いて遺構確認を行い、移植ゴテなどを用いて遺構の掘削を行った。また、平面図の作成については、遺構断面は手実測、平面は光波測量機を用いて測量を行っている。なお、出土遺物状況図については、原則として光波測量機を用いて3次元記録を実施した。写真撮影にあたっては35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ(1,600万画素)を併用し、適宜、記録撮影を行った。(林)

第2節 基本層序

調査区の南東隅において、基本層序確認のための第1号テストピットを深く設け、土層観察作業を行った。I層は現・旧表土である。調査区の一部において旧表土と現表土を分けることができる位置と、混在している位置がある。旧表土中から遺物は出土していないため、旧表土層がどの時期にあたるのかは不明である。II層は遺構確認面である明黄褐色の軟質のローム層である。水戸市域で多く確認される今市・七本桜層はこの上面に位置すると思われるが、削平されているため確認されていない。III層は層厚が厚い黄褐色のローム層である。IV層はハードローム層である。上層のローム層と比べ褐色に寄った色調であるため、第2黒色帯を含む層と判断される。また、IV層の下面に鹿沼軽石層が本来存在すべきであるが、地形上の理由なのか確認されていない。V層は濃い褐色のハードローム層で、常総粘土層の漸移層である。VI層は灰白色を呈する常総粘土層となる。基本的な層序は水戸市域の他の場所と変わりはないものの、台地の縁辺部分という本調査地点の立地に拠るためか、鹿沼軽石層は確認されていないことが特徴となる。

(林)

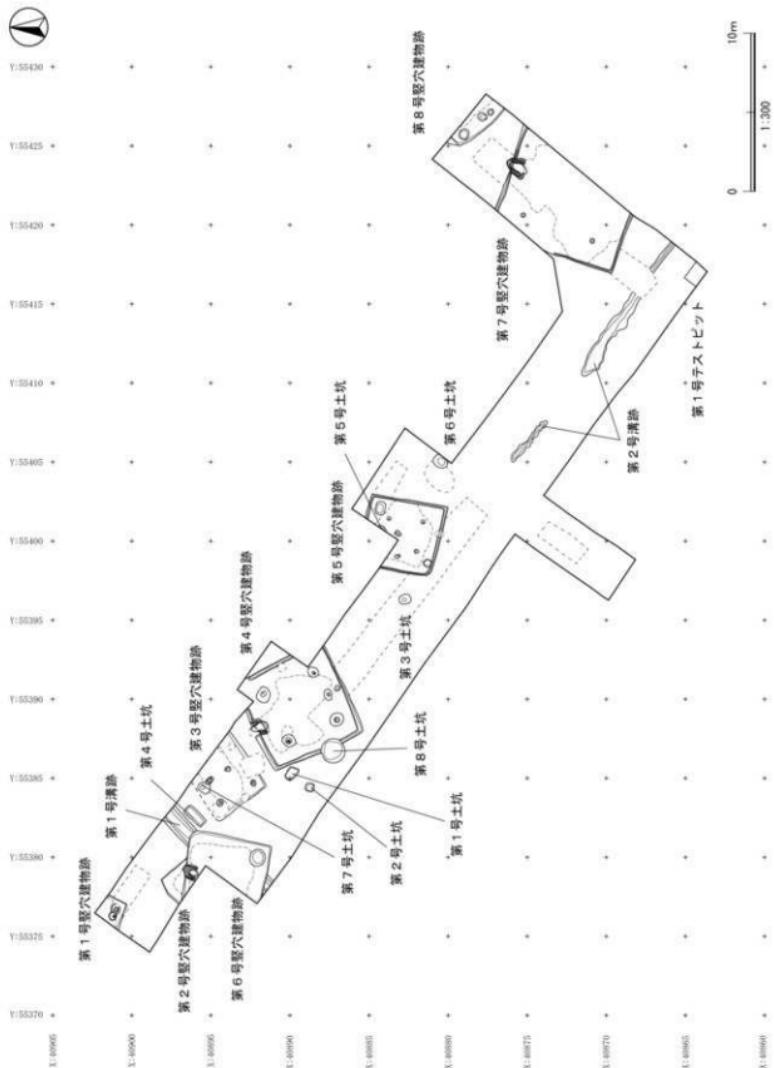
- I層 7.5YR3/3 暗褐色土 現・旧表土層。
- II層 2.5Y6/6 明黄褐色土 軟質ローム層。縦まりに欠ける。
- III層 2.5Y5/4 黄褐色土 ローム層。層厚は厚く、粘性・縮まりともに強い。
- IV層 10YR6/2 灰黄褐色土 ハードローム層。
- V層 10YR6/1 握灰色土 ハードローム層。粘性・縮まりが強い。粘土粒子を少量、赤色粒子を微量含む。
- VI層 2.5Y7/1 灰白色土 常総粘土層。



第3図 基本層序図



第4図 御茶園遺跡と調査地点の位置 (水戸市都市計画区域図1:2,500に加筆)



第5図 調査区全体図

第3節 遺構と遺物

御茶園遺跡第4地点は、千波湖の南側へ800mほど離れた台地縁辺部に位置する。

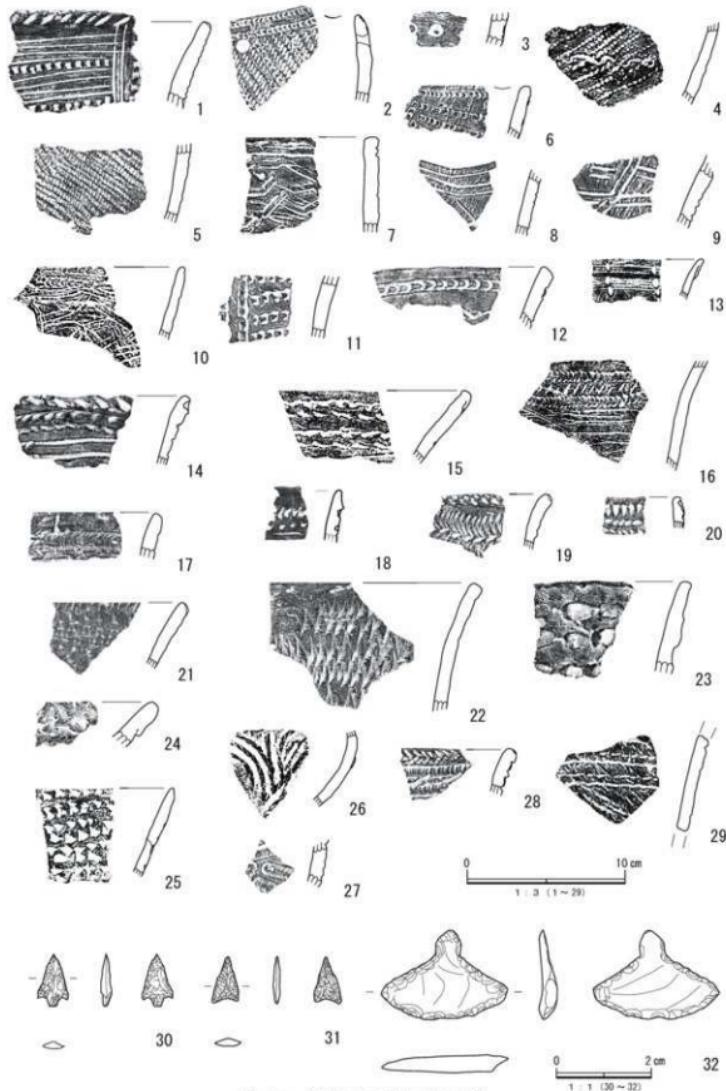
過去の3地点における発掘調査において遺構は確認されていないが、今回の調査地点では、竪穴建物跡が8軒、溝跡が2条、土坑が8基が検出されている。時期は、古墳時代と中世以降である。

遺物は、縄文土器や弥生土器、須恵器、土師器、陶器、磁器、炻器、土製紡錘車、石鐵、石匙、凹石、台石など、計4,117点、83,747.4gが出土している。時期は古墳時代中期を中心とし、縄文時代の遺構は検出されていないが、縄文土器が多量に出土している。近世以降では陶器や磁器、炻器片が3点出土している。

1 縄文時代の遺物

今回の調査地点から、当該期の遺構は検出されていない。しかし、遺物は1,131点と全遺物点数の約27%、重量でも21,392.4gと全遺物重量の25%強を占めている。土器は前期中葉黒浜式期から後葉浮島式期や諸磯式期の遺物が中心で、その他は早期中葉の三戸式や中期中葉阿玉台式期、加曾利E式期がごく少数出土している。また、前期の土器では詳細は不明だが、胎土に纖維が含まれる土器が多量に出土している。石器は石鐵や石匙、凹石、台石など8点、8,102.3g出土している。このうち、図示することができた32点の遺物に対しては本項で説明する。凹石、台石については、第7号竪穴建物跡のカマド芯材として転用されていたため、第7号竪穴建物跡の項目で説明する。

1は縄文時代早期中葉の三戸式土器である。口縁部片で口唇部に刻みが施され、沈線文で区画して内部に刺突文が施される。2から5は、胎土に纖維が含まれる縄文時代前期中葉の黒浜式土器である。2は波状口縁部片で爪形文、3は胴部片で竹管文が施される。4・5は胴部片で結節縄文や単節の縄文を施す。6から13は縄文時代前期後葉の浮島I式土器である。6から9は地文に撚糸文が施される一群である。6は波状口縁部片で爪形文、7から9は沈線文が施される。10・11は沈線文や刺突文が施される一群である。10は口縁部片で刺突文の下位に沈線文が施される。11は胴部片で刺突文で区画されている。12は口縁部片で爪形文の下位に沈線文が施される。13は沈線文で区画して、その沈線文上に小豆状の押捺文が施される。14から17は浮島II式土器である。14は口縁部片で口縁部直下に刺突文、その下位に変形爪形文と横位の平行沈線文を施す。15は口縁部片で波状の沈線文の間に刺突文を施す。16は胴部片で上位はC字状爪形文の間に刺突文を施し、下位は条線文が施されている。17は口縁部片で爪形文が施される。18から25は浮島III式土器である。18は口縁部片で刺突文、19は口縁部片で口唇部に刺突文を施し、口縁部に爪形文と刺突文を施す。20は口縁部片で刺突文と爪形文、21・22は口縁部片で貝殻文が施される。21は口唇部に刻みを施し、下位にアナダラ属の貝殻を用いて波状貝殻文を施す。22はハマグリ類の貝殻を利用している。23・24は口縁部片で輪積痕を強く残している。25は口縁部片で三角文が多段に施される。26から29は諸磯b式土器である。26は刻みをもつ浮線文が貼り付けられた胴部片である。27は胴部片で沈線文の区画内に爪形文が施される。28は口縁部片で口唇部に刻みが施され、縄文を施文後、爪形文や刺突文を施している。29は胴部片で撚糸文を施文後、押引文が施文される。29は破片を砥石として再利用している。30から32は石器である。30・31はチャート製で、30は平基有茎石鐵、31は回基無茎石鐵である。32は頁岩製の横長石匙である。



第6図 縄文時代の遺構外出土遺物

第3表 縄文時代出土土器属性一覧

因版 番号	出土地番 遺構	種類	基準	残存 部位	口径 (cm)	底径 (cm)	壁高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SI - 2 3区2層	縄文 土器	深鉢	口縁部	-	-	(5, 5)	口縁部は平底で作出され、上面に横段の刻み目を施す。口縁部には残存部が焼成後2条の沈繩文と手轍竹管状工鳥による刺突文を施し、その間に同様な施文による模倣の沈繩文4条と刺突文1条を交互に施す。内面には横段のナダを施す。	白色粒子・ 石英粒	良好	10927/6 明黄褐色	三戸式
2	SI - 2	縄文 土器	深鉢	口縁部	-	-	(5, 5)	酒呑口式。口縁部に櫛の扱い無文書を捺ぐ。手の平のD字状の凹文を施す。底下に單頭繩文Rを模倣して施している。内面には模倣のナダを丁寧に施す。補修孔あり。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 白雲母片・ 纏跡	良好	10933/3 暗褐色	黒面式
3	SI - 4 1区3層	縄文 土器	深鉢	脚部	-	-	(2, 1)	残存部に円形竹管文を2ヶ所以上に施す。内面には模倣のナダを施す。	白色粒子・ 石英粒・ 纏跡	良好	7. 5386/8 褐色	黒面式
4	SI - 6 1区	縄文 土器	深鉢	脚部	-	-	(5, 5)	残存部全面に単頭繩文L,RとR,Lの結節繩文を模倣。	白色粒子・ 小窓・ 纏跡	良好	7. 5396/6 褐色	黒面式
5	SI - 5 3区2層	縄文 土器	深鉢	脚部	-	-	(4, 4)	残存部全面に単頭繩文L,Rを模倣して施す。内面に丁寧な模倣のナダを施す。	白色粒子・ 纏跡	良好	7. 5396/4 に赤い褐色	黒面式
6	SI - 2 3区1層	縄文 土器	深鉢	口縁部	-	-	(3, 3)	酒呑口式。口縁部は底面に突出する。口縁部に櫛の文を施す。その後に縫合。模倣のD字形の凹文を施す。内面は模倣の丁寧なナダを施す。	白色粒子・ 石英粒・ 白雲母片	良好	10936/4 に赤い黃褐色	浮島I式
7	表土	縄文 土器	深鉢	口縁部	-	-	(6, 6)	口縁部に模倣の平行繩文と模倣沈繩文を施す。地面上に模倣の焼成文を施す。内面には模倣のナダを施す。	白色粒子・ 小窓	良好	10936/6 明黄褐色	浮島I式
8	SD - 1	縄文 土器	深鉢	脚部	-	-	(3, 9)	模倣文Lの地面上に手轍竹管文による模倣。脚部の沈繩文を施す。内面には模倣のナダを施す。	白色粒子	良好	5395/8 明赤褐色	浮島I式
9	表土	縄文 土器	深鉢	脚部	-	-	(4, 5)	焼成文Lを斜に施した地面上に手轍竹管文による模倣。脚部の沈繩文を施す。内面には模倣のナダを施す。	石英粒・ 長石粒	良好	10934/3 に赤い黃褐色	浮島I式
10	SI - 6 2区2層	縄文 土器	深鉢	口縁部	-	-	(4, 4)	口縁部底下に手轍竹管状工鳥による4条の連続的突起を模倣。その下位に平行底面による弧文と円文を施す。	白色・赤 色粒子・ 長石粒	良好	7. 5396/6 褐色	浮島I式
11	SI - 1 前庭穴	縄文 土器	深鉢	脚部	-	-	(3, 9)	残存部で縫合2条。模倣4条の手轍竹管状工鳥による4条の連続的突起を模倣。その下位に平行底面による弧文と円文を施す。	白色粒子	良好	5390/8 褐色	浮島I式
12	SI - 6 1区	縄文 土器	深鉢	口縁部	-	-	(3, 7)	口縁部は外側が状を呈する。口縁部は模倣文Lの下に1条のD字形凹文と模倣の沈繩文を追加する。内面には模倣の丁寧なナダを施す。	白色粒子・ 長石粒・ 白雲母片	良好	5395/6 明赤褐色	浮島I式
13	SI - 6 1区1層	縄文 土器	深鉢	口縁部	-	-	(2, 6)	半轍竹管状工鳥による平行沈縫を模倣。沈縫面上に小豆大的押絞文。	白色粒子	良好	10936/4 に赤い黃褐色	浮島I式

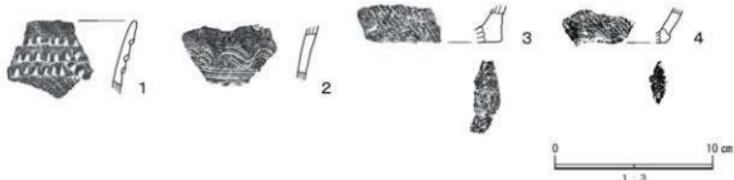
固有 番号	出土地点 遺構	種別	断面 形態	残存 部位	口径 (cm)	直径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
14	表土	繩文 土器	深鉢	口縁部	—	—	(4.4)	口縁部直下に斜位の刻突文を付し、以下にC字状の変形爪形文と楕円形の平行刻痕文を施す。内面には横位のナダを施す。	石英粒・ 白雲母片・ 小礫	良好	10B86/6 明黄褐色	浮島Ⅱ式
15	SI - 6 2区2層	繩文 土器	深鉢	口縁部～ 腹部	—	—	(6.7)	口縁部下位に波状の刻突文を多条に模走させ、並縦溝に連続刻突文。内面横方向彫刻。	白色・ 赤色粒子・ 長石粒	良好	5B6/6 褐色	浮島Ⅱ式
16	SI - 1 野窓穴	繩文 土器	深鉢	腹部	—	—	(7.6)	2条のC字状弦文を模走し、その間に透溝刻突文を模走。下位は楕および斜方彫刻文。	白色・ 黒色粒子・ 長石粒	良好	10B88/6 黄褐色	浮島Ⅱ式
17	表土	繩文 土器	深鉢	口縁部	—	—	(2.8)	口縁部に幅広の変形爪形文を複数に模走し、その間に透溝刻突文を施す。内面には横位のナダを施す。	白色粒子・ 石英粒	良好	10B86/6 明黄褐色	浮島Ⅱ式
18	SD - 1	繩文 土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.7)	口縁部は平坦に作成され、口縁部直下に透溝刻突文を施し、以下に2列の左から右に向ける刻突文を施す。内面には丁寧な横位のナダ施す。	石英粒・ 白雲母片	良好	10B86/6 浅黄褐色	浮島Ⅱ式
19	SI - 6 2区2層	繩文 土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.5)	口縁部は外削り状を呈し、上面に彫痕状の直角刻突文と透溝刻突文を施す。内面には幅広の変形爪形文を複数に模走。下位に斜方彫刻突文を施す。内面には横位のナダを施す。	白色粒子	良好	10B86/6 明黄褐色	浮島Ⅱ式
20	表土	繩文 土器	深鉢	口縁部	—	—	(2.0)	口縁部は外削り状を呈し、以下にC字状の変形爪形文を施す。内面は横位のナダを施す。	白色粒子・ 石英粒	良好	7.5B85/6 明黄褐色	浮島Ⅱ式
21	SI - 4 4区4層	繩文 土器	深鉢	口縁部	—	—	(6.1)	口縁部は外削り状を呈し、外端に斜位の刻込みが付す。口縁部にはナダを施す。其の上位には直角刻突文を多条に施す。内面には横位のナダを施す。	白色粒子・ 石英粒・ 白雲母片	良好	10B85/6 黄褐色	浮島Ⅱ式
22	表土	繩文 土器	深鉢	口縁部	—	—	(6.1)	口縁部は外反し、口縁部は平出しで作成される。口縁部には横位のナダを施す。内面には左から右への工鳥を施す。内面には横位のナダを施す。	白色板子・ 石英粒・ 長石粒	良好	7.5B85/3 に点々・褐色	浮島Ⅱ式
23	表土	繩文 土器	深鉢	口縁部	—	—	(5.6)	口縁部は無文で輪縁状を残し、輪縁部分位に左から右への工鳥を施す。内面には横位のナダを施す。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 白雲母片	良好	10B84/2 浅黄褐色	浮島Ⅱ式
24	SD - 1	繩文 土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.1)	無文で輪縁状を残し、その上に指捺印模を加える。内面に横位のナダを施す。	白色粒子・ 石英粒	不良	10B87/6 明黄褐色	浮島Ⅱ式
25	SI - 6 2区2層	繩文 土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.9)	横走する三尖文を多条に施す。	白色粒子・ 長石粒	良好	10B87/4 に点々・黃褐色	浮島Ⅱ式
26	SI - 1 3区1層	繩文 土器	深鉢	腹部	—	—	(4.6)	地文に溝文、多条の浮鶴文を内折や縱化。横位に筋り付ける。その浮鶴文上に斜方彫刻文。	白色・ 赤色粒子・ 長石粒	良好	10B88/6 黄褐色	諸磯b式
27	表土	繩文 土器	深鉢	腹部	—	—	(3.0)	半截骨管状工具による横位。斜位の彫痕内にC字状爪形文。D字状の底版文を2列施す。内面にはナダを施す。	白色・ 赤色粒子	良好	10B84/4 褐色	諸磯b式
28	SD - 1	繩文 土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.0)	口縁部は丸みをもつ。口縁部に斜位の刻込みを行し、直下に透溝刻突文。Rを側位回転で施す。以下にC字状の底版文を2列施す。内面に斜位の刻突文を加える。内面に横位の丁寧なナダを施す。	白色粒子・ 長石粒	良好	10B88/4 浅黄褐色	諸磯b式
29	SI - 6 2区2層	繩文 土器	深鉢	腹部	—	—	(6.1)	地文は燃え文を模走。口縁部直下より半截骨管状工具による引文を削走。	白色粒子・ 長石粒	良好	7.5B85/6 明黄褐色	上端・左端を 利用磁石として 利用。諸磯 b式

第4表 繩文時代出土石器属性一覧

図版番号	出土地点 遺構	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	特徴	備考
30	SI - 6 1区2層	石器	石鏃	2.2	1.26	0.42	8.0	チャート	平基有茎石鏃。全面に細かい調整を施す。	
31	SI - 7 3区	石器	石鏃	1.95	1.14	0.3	5.8	チャート	圓基無茎石鏃。全面に細かい調整を施している。	
32	SI - 4 1区1層	石器	石鏃	3.7	5.25	0.71	16.0	チャート	楕形石鏃。鋸刃の周縁部を交叉に押圧削離を施す。つまみ部の表面には調整はなげ施されていない。	

2 弥生時代の遺物

今回の調査地点から、当該期の遺構は検出されていない。遺物は壺形土器を中心に35点、421.0gであり、繩文時代や古墳時代と比べごく少數である。出土地点は表土中や搅乱土中、遺構に伴わない状況での出土で、調査区の中央部や西側を中心としている。このうち4点を図示することができた。以下、遺物の説明を加えていくこととする。1から4は壺形土器である。1は口縁部片で口唇部の押圧と3段の有段口縁、その下位の刺突が特徴である。2は、6から7条の多条の施文具による波状文が施されるが、十王台式とは様相が異なる。3・4は胴部から底部片である。胴部に撚糸文や付加条文1種が施される。以上は弥生時代後期の所産と考えられる。



第7図 弥生時代の遺構出土遺物

第5表 弥生時代出土土器属性一覧

図版番号	出土地点 遺構	種別	器種	残存 部位	口徑 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	表土	弥生 土器	壺形 土器	口縁部	-	-	(6.0)	口縁部に押圧を加えて、口縁部に3段の有段口縁を施す。その上に刺突を施す。 口縁部に波状文を施す。外表面は化粧土で仕上げる。 口縁部にR L Sの横旋削離を施す。 外表面は化粧土が付着する。内面は櫻皮ナガを施す。	白色粒子	良好	外面: 10Y5/3 黒褐色 内面: 7. 3Y5/6 明褐色	弥生時代後期
2	SI - 5 3区2層	弥生 土器	壺形 土器	口部	-	-	(3.4)	口部に櫻皮文と波状文を施す。 波状文の傍に撚糸文を施す。6から7条の多条の施文具によるよろじの十王台式とは異なる。 内面は櫻皮ナガを施す。	石英粒・ 長石粒・ 小礫	良好	7. 3Y5/8 明褐色	弥生時代後期
3	SI - 5 4区2層	弥生 土器	壺形 土器	底部	-	-	(2.3)	底部裏面上に撚糸文と斜削に施す。 底部外表面に一部目皿梳らしきものがみられる。 内面は櫻皮ナガを施す。	石英粒・ 小礫	良好	10Y6/1 にぶい黄褐色	弥生時代後期
4	SI - 4 3区3層	弥生 土器	壺形 土器	口部 底部	-	-	(2.3)	楕円外表面L + Rの付加条文1種を斜削す。	白色粒子	良好	10Y6/4 にぶい黄褐色	弥生時代後期

3 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査地点において、主体となる時代である。当該期の遺構は竪穴建物跡が8軒検出されている。遺物は壺や碗、高壺、培、甕、壺、鉢、瓶、土製筋錘車、砥石などを中心に2,937点で61,117.1gと、全体からみて点数で71.3%，重量で73.0%が出土している。以下、検出された遺構や遺物に対して説明を加える。

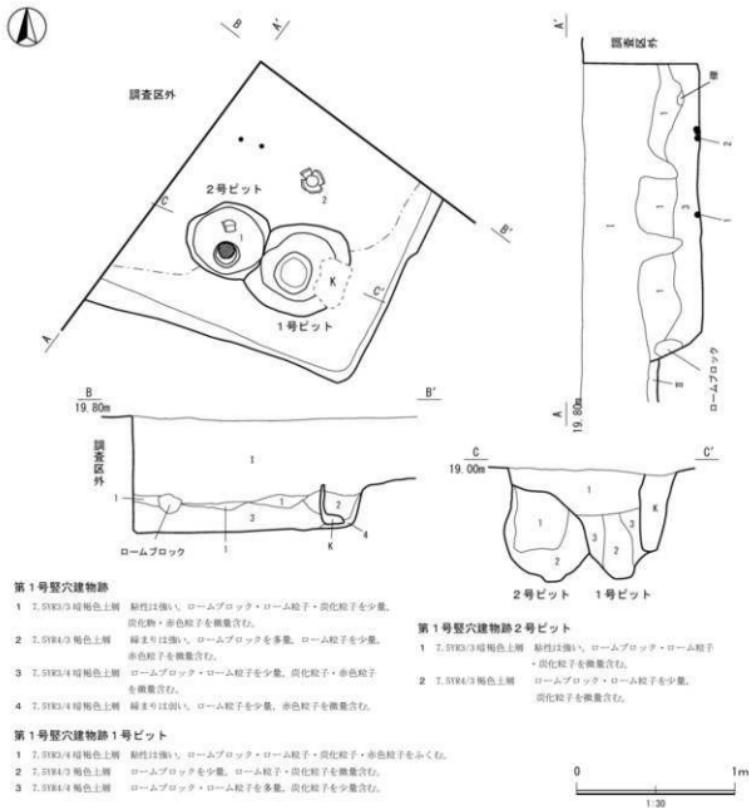
竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡

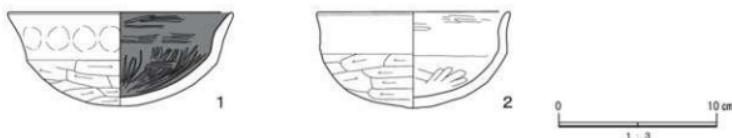
位 置	調査区北西側、標高19.28m地点に位置する。本跡の大半は調査区外に延びている。
規模と形状	長軸188cm以上、短軸174cm以上の方形と推定される。主軸方向は東壁および南壁を基準にN-21°-Eを示す。壁高の最大高は28cmを測り、緩やかに立ち上がる。
重複関係	単独で存在する。
土 層	4層に分かれ、自然な埋没状況を示す。4層は壁の崩落土である。
床 面	貼床は存在しない。概ね平坦で、本跡中央部で検出された部分はよく踏み固められているが、他は軟弱である。
壁 溝	検出されていない。
カマド・炉	検出されていない。
柱 穴	2基検出された。どちらも本跡の南東部に位置する主柱穴であろう。1号ピットは2号ピットに後続しており、柱の据え替えが行われた可能性が高い。また、2号ピット底面には柱のアタリ痕が確認できた。
貯 藏 穴	検出されていない。
掘 り 方	本跡壁際やピット周囲を中心に床面から3cmから5cmの深さまで掘り込まれている。
遺物出土状況	112点、1768.0gの遺物が出土している。内訳は繩文土器の深鉢が39点、土師器壺類が37点、甕・壺類が23点、器種不明が12点、砂岩の礫が1点である。このうち2点を図示することができた。1・2は丸底の土師器壺である。1は口縁部が大きく開き、2は口縁部が直立する土師器壺である。双方とも床面直上の出土である。
所 見	出土した遺物から6世紀前葉頃と考えられる。

第6表 第1号竪穴建物跡内部施設属性一覧

遺構番号	位置	平面形態	長径 (cm)	短径 (cm)	床面から の深さ (cm)	断面形態	切り合せ関係	備考
1号ピット	南東側	不整円形	19	12	69	窓状	本跡2号ピットに後続する。	
2号ピット	南東側	円形	11	-	64	窓状	本跡1号ピットに先行する。	南西側の一部を現直で破壊されている。柱抜き取り痕および圧痕あり。



第8図 第1号竖穴建物跡



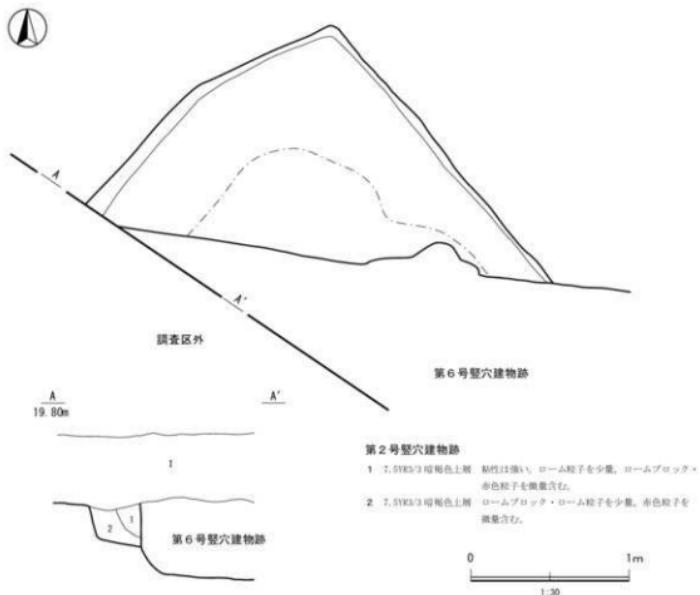
第9図 第1号竖穴建物跡出土遺物

第7表 第1号竪穴建物跡出土土器属性一覧

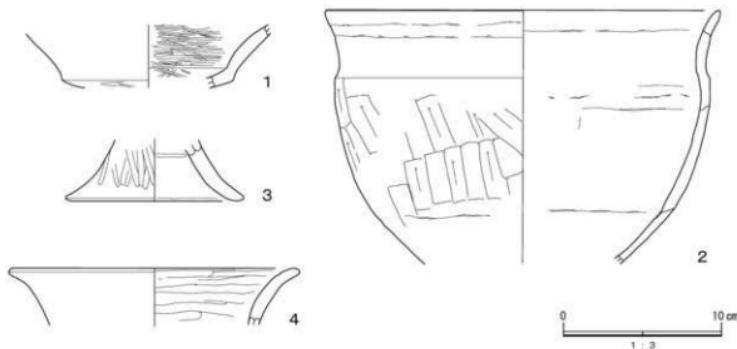
因数 番号	出土地名 遺構	種別	器種	残存 部位	残存 率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	No2	土師器	环	口縁部 ～底部	75	11.0	—	5.9	丸底で内面黒色処理された乳頭器窓跡 横腹片、口縁部は外反して体部との境 に不明瞭な折れ、口縁部外縁ヨコガタ2 以上開口。内面ヨコガタを施す力方に て手、体部外縁部分の内側ヨコガタを施す 力、内面丁寧なナギ後2条1単位の捺 射状の縞文。	白色・ 赤色粒子・ 石英粒・ 白雲母片	良好	外面:T.0386/4 にぶい褐色 内面:1082/1 黒色	
2	No1	土師器	环	口縁部 ～底部	80	12.2	—	6.2	丸底の痕跡横腹片、口縁部は直立し て、内側ヨコガタ外反、口縁部外縁ヨ コガタ2以上開口で窓跡が向かい合 り、体部外縁方向へハラケトリ施ナギ。 内面多方向へハラケトリ施丁寧なナギ。	赤色粒子・ 石英粒・ 長石粒	良好	1088/4 浅米褐色	

第2号竪穴建物跡

- 位 置** 調査区北西部、標高 19.4 m 地点に位置する。本跡の南側 2 / 3 が調査区外にあり、また、南部を第6号竪穴建物跡に掘り込まれており、その部分は検出することができなかつた。
- 規模と形状** 長軸 231 cm 以上、短軸 180 cm 以上の方形と推定される。主軸方向は N - 42° - W を示す。壁高の最大高は 21 cm を測り、急角度で立ち上がる。
- 重複関係** 第6号竪穴建物跡に先行する。
- 土 層** 2層に分かれるが、当初の範囲確定時において全面を掘削してしまったため、埋没状況は不明である。
- 床 面** 貼床は存在しない。概ね平坦で、本跡中央部で残存する部分はよく踏み固められているが、他は軟弱である。
- 壁 溝** 検出されていない。
- カマド・炉** 検出されていない。
- 柱 穴** 検出されていない。
- 貯 藏 穴** 検出されていない。
- 掘 り 方** 検出されていない。
- 遺物出土状況** 312 点、5294.6 g の遺物が出土している。内訳は繩文土器の深鉢が 173 点、土師器坏類が 24 点、碗が 1 点、高杯が 3 点、鉢が 1 点、甕・壺類が 95 点、器種不明が 6 点、砂岩の礫が 9 点である。このうち 4 点を図示することができた。1 は土師器の高杯の坏部である。2 は胴部が丸みを帯び、口縁部が長い土師器の鉢である。3 は外面にミガキが施される台付甕の脚部である。4 は口縁部に横方向のミガキが施される土師器甕である。
- 所 見** 本跡は、当初第6号竪穴建物跡の北西隅部分と判断して調査を行っていたため、土層断面は調査区壁である南側でごく一部のみ確認している。また、本跡の時期は、出土した遺物から 5 世紀前葉から中葉頃と考えられる。



第 10 図 第 2 号豎穴建物跡



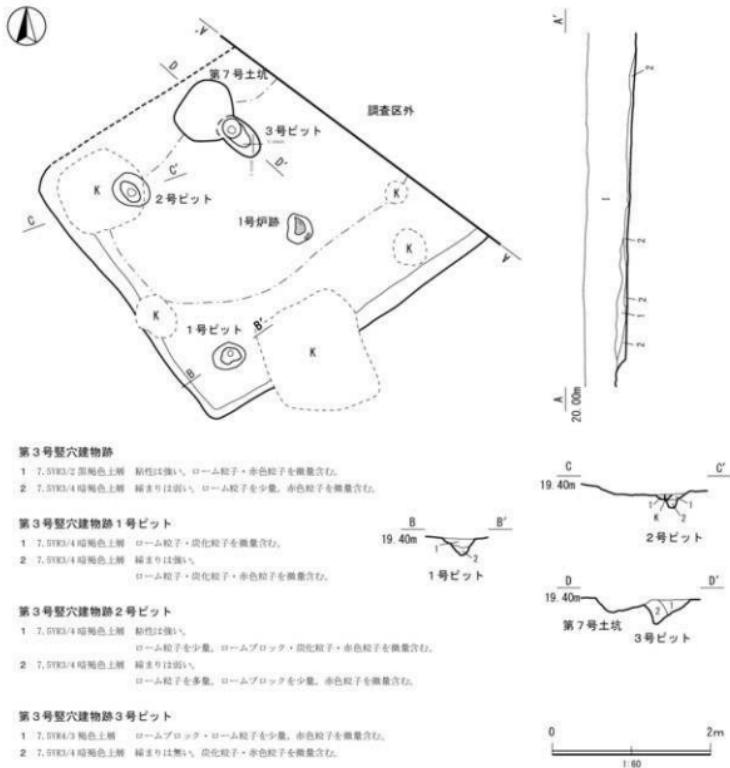
第 11 図 第 2 号豎穴建物跡出土遺物

第8表 第2号竪穴建物跡出土器属性一覧

因数 番号	出土地名 遺構	種別	器種	埋存 部位	残存 量 (kg)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	覆土	土師器	瓶	口縁部	5	—	—	(0.9)	体部正面丁寧なナガ後縁方向にガタ、内面丁寧なナガ後縁方向にガタ。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒	良好	2.5W5/8 明赤褐色	
2	No 1・2	土師器	瓶	口縁部 ～側部	15	(24.0)	—	(16.0)	下段丁寧な模形、口縁部は奥く機械化に外れる。口縁部内外面ヨコナダ、模様外表面方向へハケメリ後ナガ。内面ナガ。	白色・赤 色粒子・ 石英粒・ 長石粒	良好	2.5W6/6 褐色	
3	覆土	土師器	台付甕	脚部	13	—	10.2	(2.8)	脚部外面ナガ後縁方向にガタ。内面ナガ。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒	良好	外側: 3W6/2 に5W4褐色 内面: 2.5W6/6 褐色	
4	No 3	土師器	甕	口縁部	5	(18.0)	—	(2.7)	口縁部外面ヨコナダ、内面ヨコナダ後 縁方向にガタ。	白色・ 赤色粒子・ 石英粒・ 長石粒	良好	2.5W7/4 に5W4褐色	

第3号竪穴建物跡

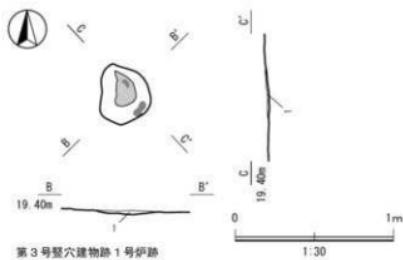
- 位 置** 調査区北西部、標高 19.32 m 地点に位置する。本跡の北東部が調査区外にあり、西壁や南壁の一部、北西側が搅乱を受けていたため、その部分は検出することができなかつた。
- 規模と形状** 長軸 421 cm 以上、短軸 387 cm の長方形と推定される。主軸方向は N - 40° - W を示す。壁高は上面を I 層により削平されているため、立ち上がりを明確に確認できなかつた。
- 重複関係** 第 7 号土坑に先行する。
- 土 層** 2 層に分けられるが、上面が削平され、遺存状態が浅いため、埋没状況は不明である。
- 床 面** 貼床は存在しない。概ね平坦で、本跡中央部で残存する部分はよく踏み固められているが、他は軟弱である。
- 壁 溝** 検出されていない。
- カマド・炉** 本跡中央部東寄りに地床炉が 1 基検出されている。平面形は不整橢円形で長軸 38 cm、短軸 34 cm、深さ 3 cm の皿状を呈する。火床面は全面がやや起伏を持ち、赤変しているものの、硬化は弱い。
- 柱 穴** 3 基検出された。各ビットの位置からどれも主柱穴であろう。このうち 3 号ビットの土層断面から柱抜き取り痕が確認されている。
- 貯 藏 穴** 検出されていない。
- 掘 り 方** 検出されていない。
- 遺物出土状況** 4 点、179.3 g の遺物が出土している。内訳は土師器甕・壺類が 4 点である。このうち 2 点を図示することができた。1・2 は共にビットから出土し、ハケ目が施される土師器甕胴部である。
- 所 見** 出土した遺物がきわめて少量のため判断が難しいが、4 世紀代と考えられる。



第12図 第3号竖穴建物跡

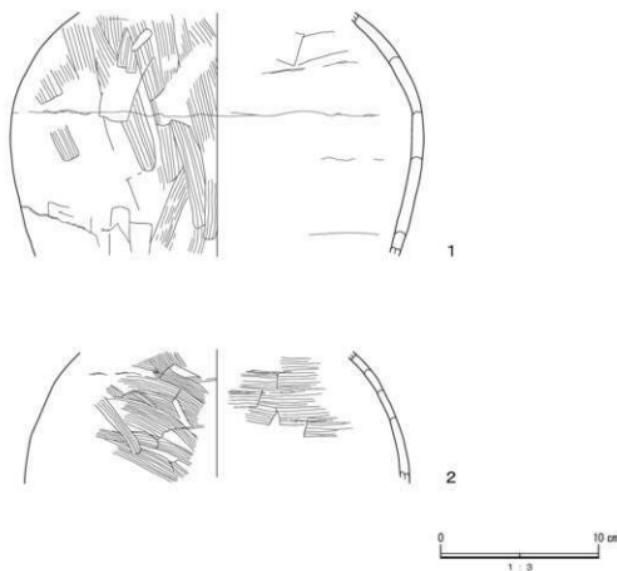
第9表 第3号竖穴建物跡内部施設属性一覧

遺構番号	位置	平面形状	長径 (cm)	短径 (cm)	床面から の深さ (cm)	断面形状	切り合ひ関係	備考
1号ビット	南東側	楕円形	62	32	23	有段階状	—	主柱穴
2号ビット	南西側	楕円形	66	39	22	中央部が複数 段状	—	主柱穴。上面を複数段削平され る
3号ビット	北西側	長楕円形	(60)	34	36	簡状	第7号土坑に先行する	主柱穴



第 13 図 第 3 号竪穴建物跡炉跡

1. 30%~40%赤色土層・粘性は無し・礫土ブロック・礫土粒子・炭化粒子を少量含む。



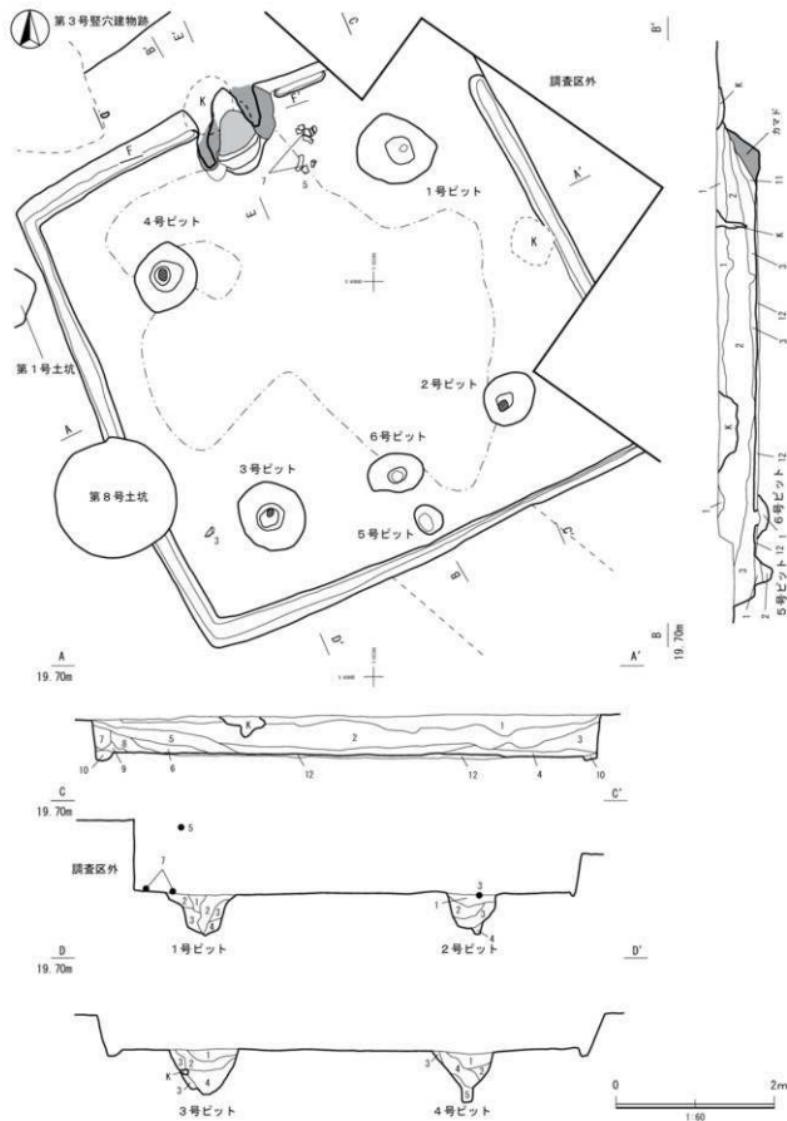
第 14 図 第 3 号竪穴建物跡出土遺物

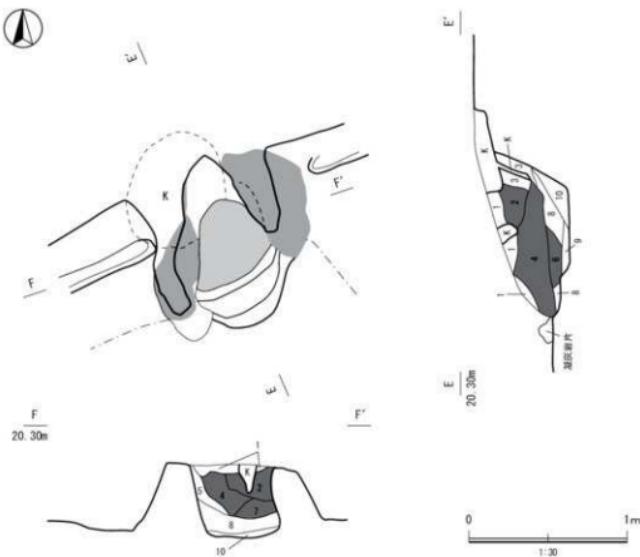
第10表 第3号竪穴建物跡出土土器属性一覧

因数 番号	出土地名 遺構	種別	基理	残存 部位	残存 率(%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	ピット 埋土中	土師器	甕	胴部	5	—	—	45.5	肩部やや膨らむ器形。胴部外表面および斜方部ハケ目施ナフ。内面横方向へラグナフナフ。	白色・赤色 粘子・石英 粉・長石粉・小礫	良好	51H2/6 褐色	
2	ピット 埋土中	土師器	甕	胴部	5	—	—	45.3	胴部外表面斜方部ハケ目施ナフ。内面横 方向ハケ目後ナフ。	白色・赤色 粘子・石英 粉・長石粉・ 長石粒	良好	51H6/6 褐色	

第4号竪穴建物跡

- 位 置** 調査中央部やや北西側、標高 19.15 m 地点に位置する。本跡の北東隅および南東隅は調査区外であり、また南西壁に8号土坑が存在しているため、その部分は検出することができなかった。
- 規模と形状** 長軸 646 cm、短軸 640 cm の方形を呈し、主軸方向は N - 22° - W を示す。壁高の最大高は 56 cm を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。
- 重複関係** 本跡南西壁際で第8号土坑に先行する。
- 土 層** 12 層に分けられ、レンズ状の自然埋没状況を示す。また、11 層には灰黄褐色粘土が含まれ、カマド崩落による流出土と思われる。
- 床 面** ロームブロックを含む褐色土で構築された緻密で堅固な貼床が厚さ 3 cm から 5 cm ほど貼られており、概ね平坦である。
- 壁 溝** 北東隅を除き検出された範囲で全周する。幅 12 cm から 34 cm、深さ 5 cm から 8 cm を測る。断面形は箱形状を呈する。
- カマド・炉** 北西壁中央部にカマドが位置し、にぶい黄橙色砂質粘土で構築されている。西袖部から煙道部にかけて搅乱が存在する。焚口部から煙道までは 110 cm を測る。天井部分は崩落しており、カマド土層断面図中の 2・4・6・7 層が崩落土と考えられる。また、東袖部は比較的良好に遺存しており、地山を残して造られる。また、内壁の一部が被熱により赤変していることが確認され、基部の最大幅は 60 cm を測る。火床部は床面から 21 cm ほど掘り窪めて造られており、赤変するが硬化は弱い。煙道は壁外へ突出せずに造られ、火床面から丸味を帯び、急角度に立ち上がる。また、焚口部の前面にカマド袖部と同材質の粘土塊が検出されている。
- 柱 穴** 6 基検出された。各ピットの位置から 1 号から 4 号ピットは主柱穴、5・6 号ピットは出入口ピットと考えられる。2 号から 4 号ピット底面には柱のアタリ痕、1 号および 4 号ピットの土層断面では柱の抜き取り痕が確認できた。
- 貯 藏 穴** 検出されていない。
- 掘 り 方** 本跡隅やピット周囲を中心にして床面から 5 cm から 8 cm の深さまで掘り込まれており、概ね平坦である。
- 遺物出土状況** 781 点、8337.0 g の遺物が出土している。内訳は縄文土器の深鉢が 190 点、石器が 1 点、弥生土器の甕・壺類が 11 点、土器類が 121 点、碗が 4 点、高杯が 1 点、鉢が 2 点、甕・壺類が 386 点、瓶が 13 点、器種不明が 48 点、石器は砥石が 1 点、陶器の碗が 1 点、炻器の甕が 1 点、石英の礫が 1 点である。このうち 8





第4号豎穴建物跡カマド

1. 7. 5780/4 暗褐色土層 黏膜は無い。ローム粒子を少數。ロームブロック・堆土粒子を微量含む。
2. 10786/3 にぶい黄褐色土層 堆土粒子を多數。堆土ブロック・砂粒を少數。堆土粒子・小礫を微量含む。
3. 10786/2 暗黃褐色土層 堆土ブロックを多數。堆土粒子・小礫を少數。堆土ブロック・堆土粒子を微量含む。
4. 10784/3 にぶい黄褐色土層 線まりは強い。堆土ブロックを多數。堆土粒子・小礫・砂粒を少數。堆土ブロック・堆土粒子を微量含む。
5. 10786/2 暗黃褐色土層 堆土ブロック・堆土粒子を多數。小礫・砂粒を少數。堆土ブロックを微量含む。
6. 10786/4 にぶい黄褐色土層 堆土は無い。堆土ブロックを多數。堆土粒子・小礫・砂粒を少數含む。堆土ブロックを微量含む。
7. 10784/2 にぶい黄褐色土層 線まりは無い。堆土ブロックを多數。堆土粒子・小礫・砂粒を少數含む。
8. 10786/2 暗黃褐色土層 堆土ブロック・堆土粒子を多數。砂粒を少量含む。
9. 5784/3 にぶい黄褐色土層 堆土ブロック・堆土粒子・砂粒を少數。堆土ブロック・炭化粒子を微量含む。
10. 5784/3 にぶい歩脚色土層 堆土ブロック・堆土粒子を多數。堆土粒子を少數。堆土ブロック・炭化粒子を微量含む。

第16図 第4号豎穴建物跡カマド

点を図示することができた。1から3は丸底の土師器壺である。1は口縁部が大きく開き、2・3は口縁部が内傾する器形である。また、3は内面に黒色処理及び放射状暗文が施される。4は土師器高壺部である。扁平で口縁部は短く直立する。内面に放射状の暗文が施される。5は土師器壺である。縁部中位に補強帯の様な粘土の貼り付けをもつ。6は土師器甕である。胴部は横方向へラケズリ後ナデを施される。7は土師器の瓶である。単孔で、甕タイプの器形である。8は砂岩製の砥石である。自然礫を利用しておらず、砥面は4面以上を数える。

所 見 出土した遺物から、6世紀中葉から後葉頃と考えられる。

第4号堅穴建物跡

1. T.30(3)/2 黒褐色土層 硬性は強いが、縫まりは弱い。ローム粒子・炭化粒子を少量。炭化物・赤色粒子を微量含む。

2. T.30(3)/3 墓褐色土層 硬性は弱い。ローム粒・炭化粒子を少し。炭化物・灰土粒子・赤色粒子を微量含む。

3. T.30(4)/4 墓褐色土層 硬性は強い。ロームブロックを多量。ローム粒子・小礫を少量。灰土ブロック・灰土粒子・砂粒を微量含む。

4. T.30(4)/5 墓褐色土層 硬性・縫まりは強い。ロームブロックを含む。

5. T.30(4)/4 墓褐色土層 硬性・縫まりは強い。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

6. T.30(4)/4 墓褐色土層 ロームブロックを多量。炭化物・炭化粒子・灰土ブロック・赤色粒子・小礫を微量含む。

7. T.30(4)/2 墓褐色土層 硬性は強い。ロームブロックを多量に含む。

8. T.30(4)/4 墓褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を多量。小礫を少微量含む。

9. T.30(4)/3 墓褐色土層 ロームブロックを多量。ローム粒子を少量。炭化物・小礫を微量含む。

10. T.30(4)/3 墓褐色土層 縫まりは弱い。ローム粒子を少微量含む。

11. 10Y3/2 墓褐色土層 灰質褐色粘土を多量。ロームブロック・灰土ブロック・砂粒少量。ローム粒子・小礫を微量含む。

12. 10Y3/2 黑褐色土層 硬性は強い。ローム粒・炭化粒子を少量。灰土粒子を微量含む。

第4号堅穴建物跡 1号ビット

1. T.30(3)/4 墓褐色土層 硬性は強い。縫まりは弱い。ローム粒子を少量。炭化粒子・灰土ブロックを微量含む。

2. T.30(3)/4 墓褐色土層 硬性は強い。縫まりは弱い。ローム粒子を少量。

3. T.30(4)/4 墓褐色土層 灰土粒子・灰土ブロックを微量含む。

4. T.30(4)/3 墓褐色土層 硬性は強い。ロームブロックを多量。ロームブロック・小礫を少微量含む。

5. T.30(4)/3 墓褐色土層 硬性は強い。ロームブロック・ローム粒子を少微量含む。

第4号堅穴建物跡 2号ビット

1. T.30(3)/4 墓褐色土層 硬性は強い。ロームブロック・炭化粒子を微量含む。

2. T.30(3)/3 墓褐色土層 炭化粒子を少量。ローム粒子を微量含む。

3. T.30(3)/4 墓褐色土層 炭化粒子を少量。炭化物・灰土ブロックを微量含む。

4. T.30(3)/5 墓褐色土層 硬性は強い。ロームブロック・ローム粒子を少微量含む。

第4号堅穴建物跡 3号ビット

1. T.30(3)/4 墓褐色土層 炭化粒子を少量。ローム粒子を微量含む。

2. T.30(3)/2 墓褐色土層 硬性は強い。ローム粒子・炭化粒子・灰土ブロック

を少量。炭化物・小礫を微量含む。

3. T.30(4)/3 墓褐色土層 ロームブロックを多量。ローム粒子を少微量含む。

4. T.30(4)/4 墓褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を少微量含む。

第4号堅穴建物跡 4号ビット

1. T.30(3)/1 墓褐色土層 ローム粒子を少微量含む。

2. T.30(3)/3 墓褐色土層 灰土ブロック・小礫を少量。ローム粒子を微量含む。

3. T.30(4)/1 墓褐色土層 ローム粒子を多量。ロームブロックを少量。灰土ブ

ロックを微量含む。

4. T.30(3)/1 墓褐色土層 小礫を少量。ローム粒子を微量含む。

5. T.30(3)/4 墓褐色土層 ロームブロック・炭化粒子を少量。ローム粒子・炭

化物を微量含む。

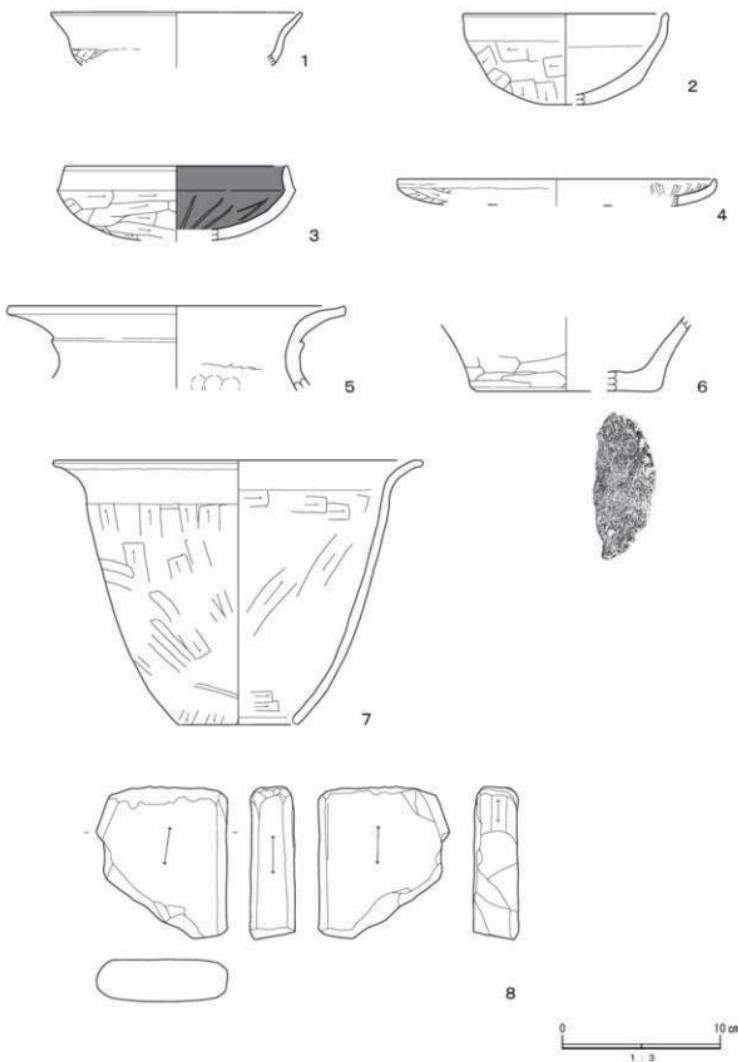
第4号堅穴建物跡 5号ビット

1. 10Y3/1 墓褐色土層 ローム粒子を少量。ロームブロック・炭化粒子を微量含む。

2. 10Y3/2 に近い墓褐色土層 硬性は弱い。ローム粒子を多量。ロームブロックを少量。小礫を微量含む。

第11表 第4号堅穴建物跡内部施設属性一覧

道標番号	位置	平面形状	長径 (cm)	短径 (cm)	床面から の深さ (cm)	断面形態	切り合せ関係	備考
1号ビット	北側	不整円形	102	85	51	有段逆台形状	—	正柱穴、柱抜き取り痕
2号ビット	東側	楕円形	73	62	49	堆みをもつ階状	—	正柱穴、压痕
3号ビット	南側	楕円形	89	82	56	有段階状	—	正柱穴、压痕
4号ビット	西側	楕円形	96	77	61	堆みをもつ階状	—	正柱穴、压痕、柱抜き取り痕
5号ビット	南東側	楕円形	36	29	21	逆台形状	—	出入口ビット
6号ビット	南東側	楕円形	69	69	21	直状	—	



第17図 第4号竪穴建物跡出土遺物

第12表 第4号竪穴建物跡出土土器属性一覧

因数 番号	出土地點 遺構	種別	器種	複存 部位	残存 率(%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1 2区 1組	土師器	环	口縁部 ～全体	5	(15.6)	—	(3.4)	口縁部外側微凹。口縁部と内側に隆起した凸部。全体との間に隙間がない。口縁部内外面コナダ。体部外表面多方向へラケグリ巻ナダ。内面丁寧ナダ。	白色粘土	良好	2,5935/8 明赤褐色		
2 1区	土師器	环	口縁部 ～底部	25	(12.7)	—	5.7	丸底で直。口縁部外側微凹。口縁部は今や開き、全体との間に隙間がない。口縁部内外面コナダ。体部外表面多方向へラケグリ巻ナダ。内面丁寧ナダ。	白色・赤 色粘土・ 有石粒・ 黄石粒	良好	10937/4 に5.5・黄褐色		
3 No.5	土師器	环	口縁部 ～全体	30	(13.7)	—	(4.6)	丸底で直。口縁部外側微凹。口縁部は今や開き、全体との間に隙間がない。口縁部内外面コナダ。体部外表面多方向へラケグリ巻ナダ。内面丁寧ナダ。内面下部に1条1單位の鉛錫環文。	白色・ 黑色粘土	良好	外面：10937/4 に5.5・黄褐色 内面：10932/1 黑色		
4 4区 4組	土師器	直环	口縁部 ～全体	5	(20.0)	—	(1.7)	扁平で口縁部外側微凹。口縁部内外面コナダ。体部外表面多方向へラケグリ巻ナダ。内面丁寧ナダ。1条1單位の鉛錫環文。	白色粘土	良好	10932/3 暗褐色		
5 No.3	土師器	直	口縁部 ～底部	5	(20.8)	—	(5.2)	口縁部上部大きく外反。中位に補強帯。口縁部内外面コナダ。脚部外表面指印ナダ。内面丁寧ナダ。1条1單位の鉛錫環文。	有石粒・ 黄石粒・ 小砾	良好	2,5935/8 明赤褐色	刮擦痕有	
6 4区 2組	土師器	直	口縁部 ～底部	5	—	(11.6)	(4.6)	楕円形方向へラケグリ巻ナダ。内面ナダ。底部外表面ナダ。	黄石粒・ 黄石粒	良好	7,5396/4 に5.5・褐色		
7 No. 1・2	土師器	瓶	口縁部 ～底部 ～口部	35	(20.0)	—	21.4	單孔。口縁部は大きく外反する。口縁部内外面コナダ。脚部外表面多方向へラケグリ巻ナダ。内面多方向へラケグリ巻ナダ。下端へラケグリで整然。	白色粘土・ 有石粒・ 黄石粒・ 小砾	良好	10937/2 に5.5・黄褐色		

第13表 第4号竪穴建物跡出土石器属性一覧

因数 番号	出土地點 遺構	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	特徴	備考
8	陶土	石器	磁石	(9.5)	8.1	2.8	(335.3)	砂岩	自然縫を利用。軸面は4面以上	

第5号竪穴建物跡

位置 調査区中央部、標高 19.24 m 地点に位置する。本跡北西部が調査区外に延びている。

規模と形状 長軸 496 cm、短軸 462 cm の方形を呈し、主軸方向は東西壁および南壁を基準に N - 10° - E を示す。壁高は最大高は 71 cm を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

重複関係 第5号土坑に先行する。

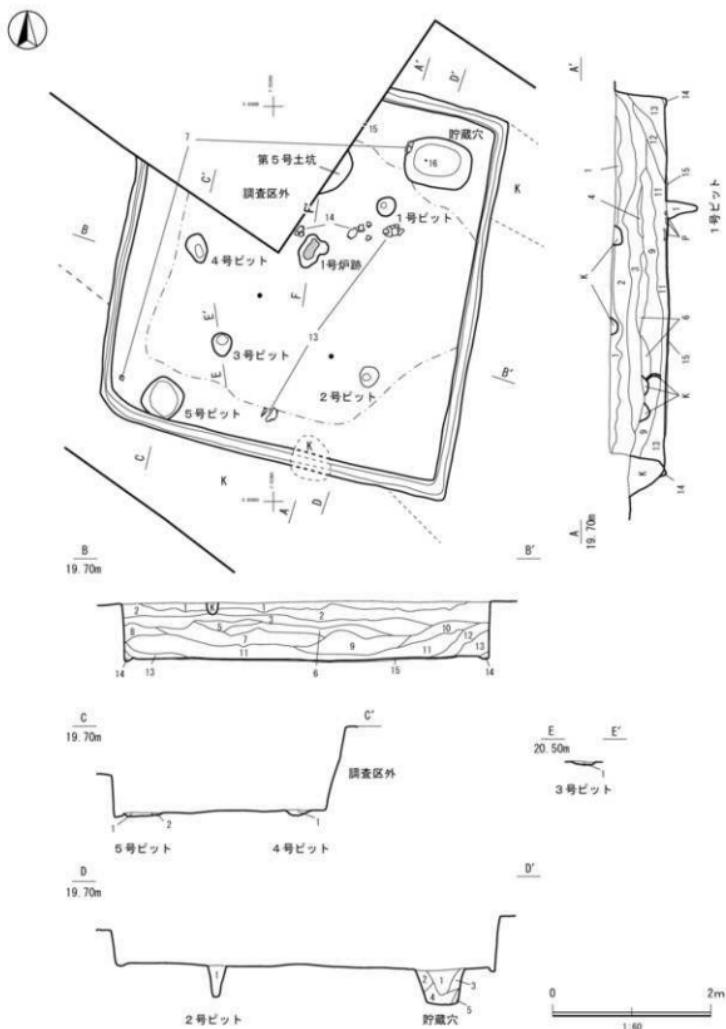
土層 15 層に分けられ、レンズ状の自然な埋没状況を示す。

床面 ロームブロックを含む褐色土により緻密で堅固な貼床が厚さ 2 cm から 4 cm ほど貼られている。概ね平坦である。

壁溝 検出された範囲で全周し、幅 8 cm から 20 cm、深さ 4 cm から 8 cm を測る。断面形は皿状を呈する。

カマド・炉 本跡中央部や北寄りに地床炉が 1 基検出されている。平面形は不整形で長軸 39 cm、短軸 32 cm、深さ 2 cm の皿状を呈する。火床面は全面が被熱により起伏に富み、赤変硬化が激しい。

柱穴 5 基検出された。各ビットの位置から 1 号から 3 号ビットは主柱穴、5 号ビットは出入入口ビットと考えられる。



第18図 第5号竪穴建物跡

第 5 号堅穴建物跡

1. T.STR3/1 墓褐色土層 硬性は強いが、礫までは弱い。炭化粒子を少量、ローム粒子・赤色粒子を微量含む。
2. T.STR3/4 墓褐色土層 ロームブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子を微量含む。
3. T.STR3/4 墓褐色土層 ローム粒子・炭化粒子を少量。ロームブロックを微量含む。
4. T.STR3/4 墓褐色土層 硬性は強い。粘土ブロックを少量、ロームブロック・炭化物・焼土ブロック・赤色粒子を微量含む。
5. T.STR3/4 墓褐色土層 ローム粒子を少量、ロームブロック・赤色粒子を微量含む。
6. T.STR3/4 墓褐色土層 ロームブロックを少量、ローム粒子・赤色粒子を微量含む。
7. T.STR3/4 墓褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を少量、炭化物・炭化粒子・小礫・砂粒を微量含む。
8. T.STR3/4 墓褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子・小礫を微量含む。
9. T.STR3/4 墓褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子・小礫を微量含む。
10. T.STR3/4 墓褐色土層 炭化粒子・焼土ブロック・赤色粒子・小礫を微量含む。
11. T.STR3/4 墓褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土ブロック・焼土粒子・赤色粒子・砂粒を微量含む。
12. T.STR3/4 墓褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を少量、砂粒を微量含む。
13. T.STR3/4 に引く 墓褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。
14. T.STR3/4 墓褐色土層 磕までは弱い。ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。
15. T.STR3/4 墓褐色土層 硬性は強い。ロームブロック・ローム粒子を多量、小礫を微量含む。

第 5 号堅穴建物跡鉗歛穴

1. T.STR3/4 墓褐色土層 磕までは弱い。炭化粒子を多量、ロームブロック・ローム粒子・炭化物・焼土粒子を微量含む。
2. T.STR3/4 墓褐色土層 磕までは弱い。ローム粒子・炭化物・焼土粒子を少量。
3. T.STR3/4 墓褐色土層 焼土粒子を微量含む。
4. T.STR3/4 墓褐色土層 ローム粒子を多量、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。
5. T.STR3/4 墓褐色土層 ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。

第 5 号堅穴建物跡 1 号ビット

1. T.STR3/3 墓褐色土層 ローム粒子を少量、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。

第 5 号堅穴建物跡 2 号ビット

1. T.STR3/3 墓褐色土層 ローム粒子を少量、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。

貯 藏 穴

本跡北東部壁際に検出された。底面は平坦であるが、硬化していない。

掘 り 方

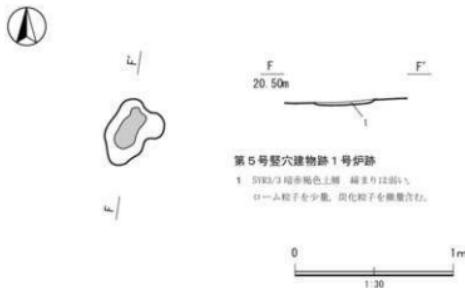
本跡隅を中心に床面から 5 cm から 12 cm の深さまで掘り込まれている。

遺 物 出 土 状 況

794 点、11379.8 g の遺物が出土している。内訳は繩文土器の深鉢が 58 点、弥生土器の甕・壺類が 13 点、須恵器蓋坏が 1 点、土師器坏類が 233 点、高坏が 2 点、鉢が 5 点、甕・壺類が 436 点、器種不明が 44 点、土製品は劔錐車が 2 点である。
1 は東海系と考えられる須恵器の蓋坏である。端部が僅かに広がる器形である。
2 から 10 は土師器坏である。2 は体部が直線的で平底の坏である。3 から 10 は丸底である。3 は口縁部が直立する器形で、4 は口縁部が内湾し、体部が丸みを帯びる器形である。5 から 7 は口縁部が長く大きく開く器形で、須恵器蓋坏模倣坏である。8 は須恵器の坏身模倣坏で、口縁部が長く直立する。9 は口縁部が内傾する須恵器坏身模倣坏である。10 は体部のみ残存するが、内面に黒色や赤色の付着物が認められる。11・12 は土師器高坏の坏部である。11 は体部の厚みなどから高坏と判断した。13・14 は土師器壺である。14 は球胴状を呈する。15・16 は土製劔錐車である。15 は断面形が逆台形状を呈し、16 は貯藏穴の底面出土で方形を呈する。

所 見

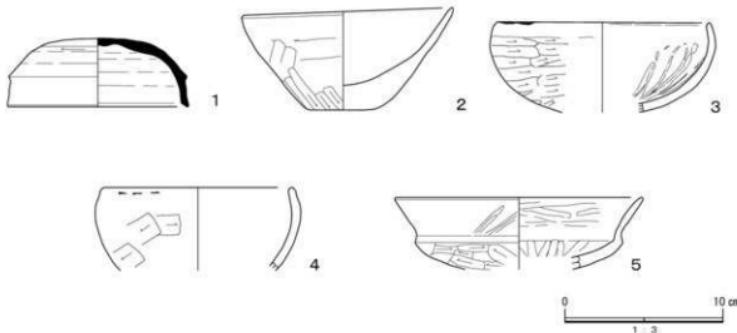
南東隅周溝面上に焼土粒子が集中する箇所が検出されたが、周溝埋没の過程で混入している様相が見て取れ、範囲が限定的で壁面に被熱部分などは確認されていないことなどから、本跡に伴わない時期のものと判断した。時期は、出土した遺物から 5 世紀後葉から 6 世紀前葉頃と考えられる。



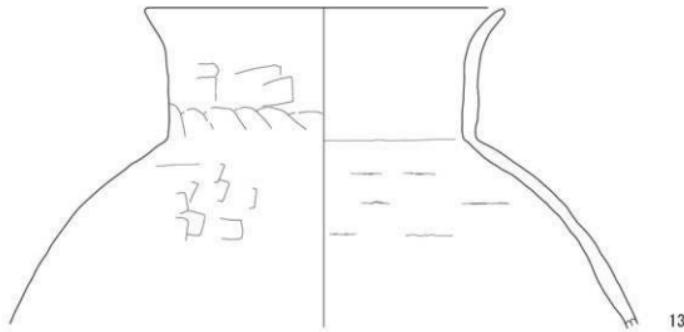
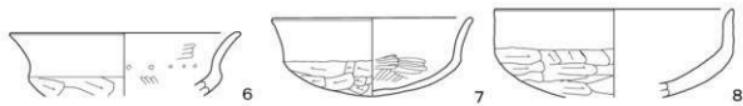
第 19 図 第 5 号竪穴建物跡炉跡

第 14 表 第 5 号竪穴建物跡内部施設属性一覧

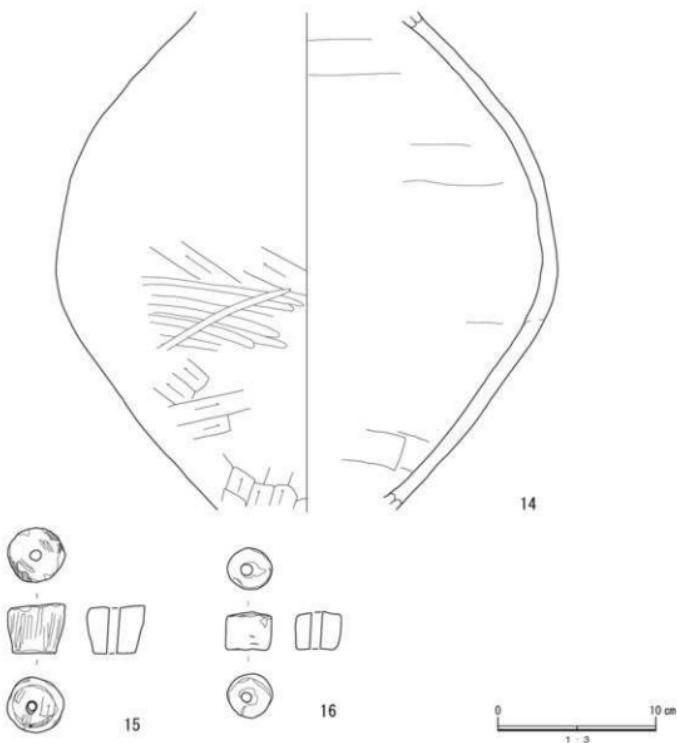
遺構番号	位置	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	床面から の深さ (m)	断面形状	切り合い關係	備考
炉竪穴	北東側隅	楕丸長方形	0.65	0.32	0.14	壁台形狀	—	主軸方向 N-E-T-E 方
1号ビット	北東側	楕円形	0.27	0.23	0.29	壁台形狀	—	主柱穴
2号ビット	南東側	円形	0.23	—	0.10	壁台形狀	—	主柱穴
3号ビット	南西側	円形	0.27	—	0.04	直状	—	主柱穴
4号ビット	北西側	不整規円形	0.20	0.25	0.09	直状	—	
5号ビット	南西側	楕丸正方形	0.09	—	0.09	有段間状	—	出入口ビット



第 20 図 第 5 号竪穴建物跡出土遺物 (1)



第21図 第5号竪穴建物跡出土遺物(2)



第22図 第5号竪穴建物跡出土遺物(3)

第15表 第5号竪穴建物跡出土土器属性一覧

回収 番号	出土地番 地名	種別	器種	残存 部位	残存 率(%)	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	特徴・手法	胎土	構成	色調	備考
1 4区	单孔器	器	罐	天井部 ～縁部	25	(11.3)	—	4.3	天井部外面上拉伸方向不明のへタケ ナギ、中径以下斜面ナギ、内面剥離ナ ギ。端部が僅かに広がる。	石英粒・ 長石粒・ 小礫	良好	N 4/0 灰色	東周系
2 1・4区 4層	土器器	器	口縁部 ～底部	75	13.2	4.3	6.5	体部外表面の口縁部に向かへて折り する器形、平底、口縁部内面ヨコナギ。 体部外表面に向かうケギリ後ナギ。内 面丁寧なナギ。底部外面ナギ。	白色・ 赤色粒子・ 石英粒	良好	白褐色 褐色		
3 4区2層	土器器	器	口縁部 ～底部	20	(33.4)	—	(5.8)	破壊化で丸底、口縁部折れ直立して、 体部の内面に模様がない。口縁部内 面ヨコナギ。体部外表面に向かうケ ギリ後ナギ。内面丁寧なナギ後2条1 段目の剥離状態。	白色粒子	良好	2.5BL/8 赤褐色	口縫間に 保有者	

固形 番号	出土地点 遺構	種別	器種	残存 部位	残存 率(%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	地土	焼成	色調	備考
4	4区4層 土頬部	灰	口縁部 ～全体	15	(11.8)	—	(5.3)	口縁部内側、全体外側を残る器形。 口縁部内外面ヨコナギ。全体外表面方 向へラケツリ後ナヂ。内面丁寧なナヂ。	黒色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 白雲母片	良好	5185/6 褐色		
5	2区3層 土頬部	灰	口縁部 ～全体	15	(15.5)	—	(4.6)	瓶形器身延長横断跡。口縁部は長く大き く外反。体部との間に不明瞭な縫。口縁 部内外面ヨコナギ。全体外表面方向へ ラケツリ後ナヂ。内面丁寧なナヂ。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒	良好	5185/6 赤色		
6	3・4区 2層	土頬部	灰	口縁部 ～全体	10	(14.4)	—	(4.0)	瓶形器身延長横断跡。口縁部は長く大き く外反。体部との間に明瞭な縫。口縁 部内外面ヨコナギ。全体外表面方向へ ラケツリ。内面丁寧なナヂ。	黑色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 白雲母片 小礫	良好	5185/6 褐色	
7	No 8・9	土頬部	灰	口縁部 ～底部	50	12.4	—	5.0	丸底の瓶形器身延長横断跡。口縁部長く 外反。体部との間に明瞭な縫。口縁 部内外面ヨコナギ。全体外表面方向へ ラケツリ。内面丁寧なナヂ後多方向ミ ガキ。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 白雲母片 小礫	良好	5185/6 明赤褐色	
8	1区4層 土頬部	灰	口縁部 ～全体	15	(15.0)	—	(5.6)	瓶形器身延長横断跡。口縁部は丸く直立。 体部との間に複数ないし、口縁部内外 面ヨコナギ。全体外表面方向へラケ ツリ後ナヂ。内面丁寧なナヂ。	白色・黑 色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 白雲母片	良好	5185/6 赤色		
9	3区	土頬部	灰	口縁部 ～全体	10	(13.2)	—	(3.3)	瓶形器身延長横断跡。口縁部内側して体 部との間に明瞭な縫。口縁部内外面ヨ コナギ。全体外表面方向へラケツリ後 ナヂ方向ミガキ。内面横方向ミガキ。	黑色粒子・ 石英粒・ 白雲母片	良好	2.5185/6 明赤褐色	
10	4区 4層	土頬部	灰	全体	10	—	—	(GL.2)	体部のみ残存。全体外表面多方向へラ ケツリ後ナヂ。内面全面に黒色および赤 色付着物。	白色粒子	良好	5185/6 明赤褐色	
11	1区3層 土頬部	灰	口縁部 ～全体	5	(19.8)	—	(6.1)	口縁部は長く大きく外反。体部との間に 明瞭な縫。口縁部内外面ヨコナギ。全体 外表面ヨコナギ。全体外表面横方向へラケ ツリ後ナヂ。内面丁寧なナヂ。	白色・ 黑色粒子・ 石英粒	良好	5185/6 褐色		
12	3区2層 土頬部	灰	口縁部 ～全体	10	(13.8)	—	(5.8)	口縁部内外面丁寧なナヂ後横方向へ ミガキ。	白色粒子・ 石英粒	良好	5185/6 明赤褐色		
13	No 1・5	土頬部	灰	口縁部 ～胴部	20	22.4	—	(26.2)	口縁部長く上端が外反。全体横方向へ ラケツリ後ヨコナヂ。胴部全体へラ ケツリ後ナヂ。	石英粒・ 長石粒・ 小礫	良好	5185/6 褐色	内外面表面 剥離観察
14	No 1・7	土頬部	灰	胴部	15	—	—	(GL.4)	綱網状を呈する。胴部外中央部上り 上斜斜方向へラケツリ後ナヂ。下斜 斜方向ミガキおよび多方向へラケツリ。 内面横方向へラケツリ後ナヂ。	黑色粒子・ 石英粒・ 長石粒	良好	5185/6 褐色	

第 16 表 第 5 号竪穴建物跡出土土製品属性一覧

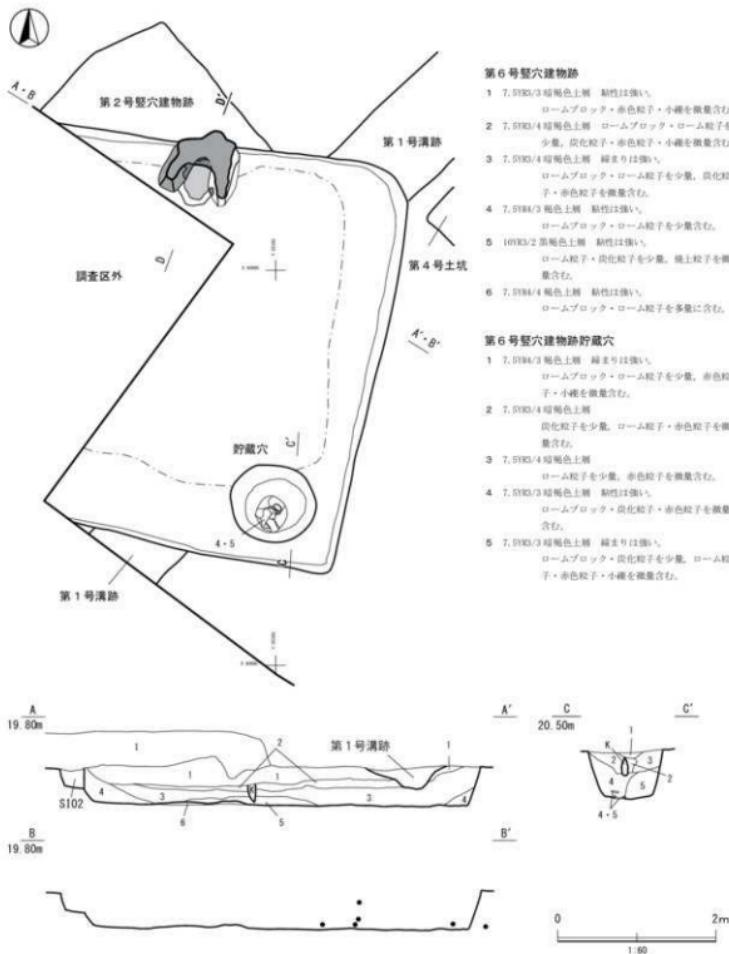
固形 番号	出土地点 遺構	種別	器種	残存 部位	残存 率(%)	径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	文様・調整	地土	焼成	色調	備考
15	No 10	土製品	粘土罐	100	3.6	3.1	0.7	48.4	焼成前背孔。断面滑び台形。全面を 丁寧なナヂ後ミガキ。	石英粒・長石 粒・小礫	良好	5185/6 明赤褐色		
16	No 6	土製品	粘土罐	100	2.8	2.3	0.7	23.1	焼成前背孔。断面台形。全面を丁 寧なナヂ。	白色・黑色粒 子・石英粒・ 長石粒	良好	10000/6 明黄褐色		

第6号竪穴建物跡

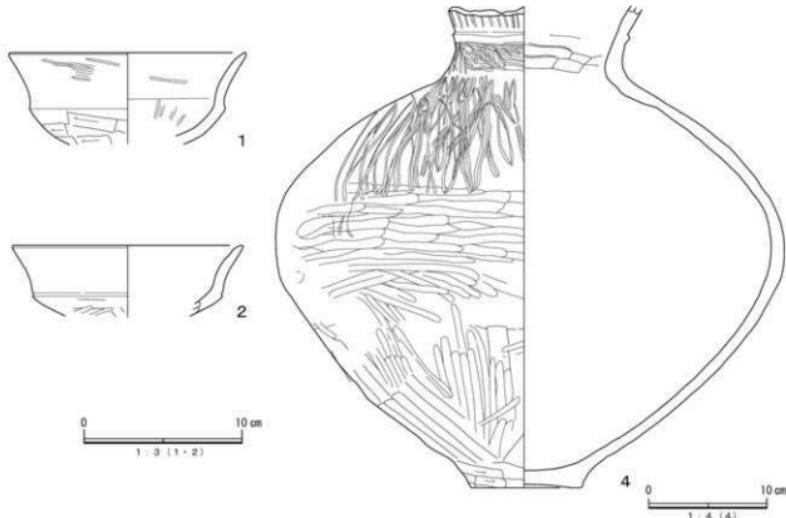
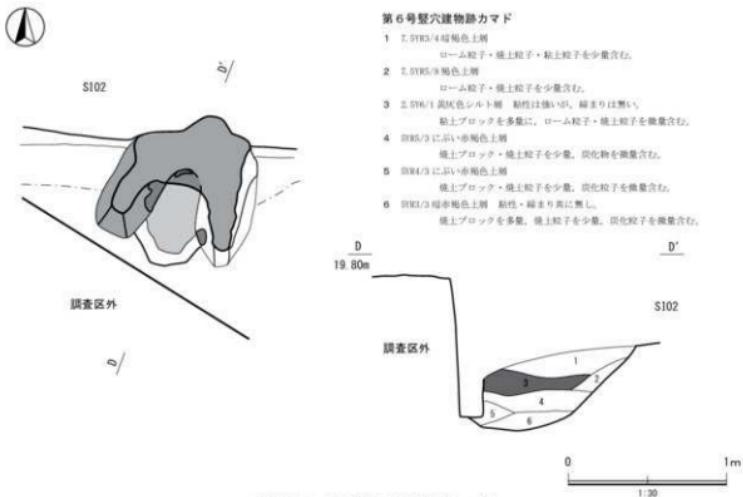
位 置	調査区北西部、標高 19.32 m 地点に位置する。本跡西部が調査区外にあり、上面に第1号溝跡が存在しており、その部分は検出することができなかつた。
規模と形状	長軸 514 cm、残存短軸 435 cm の方形を呈し、主軸方向は N-8° - E を示す。壁高の最大高は 50 cm を測り、急角度で立ち上がる。
重複関係	第1号溝跡に先行し、第2号竪穴建物跡に後続する。
土 層	6 層に分けられ、レンズ状の自然な埋没状況を示す。
床 面	緻密だが軟弱なロームブロックを含む褐色土で構築された貼床が厚さ 1 cm から 2 cm ほど貼られている。概ね平坦である。
壁 溝	検出されていない。
カマド・炉	北壁中央部にカマドが位置する。黄灰色シルトで構築されている。カマドの主軸方向は N-13° - E を示し、本跡の主軸方位とは 5° ほど東に傾く。焚口部から煙道部までは 101 cm を測る。天井部分は崩落しており、カマド土層断面図中の 3 層が天井部である。また、袖部は比較的良好に遺存しており、黄灰色砂質粘土で構築している。また、内壁の一部が被熱により赤変していることが確認され、基部の最大幅は 86 cm を測る。火床部は床面から 33 cm ほど掘り産めて造られており、赤変するが硬化は弱い。煙道は壁外に 20 cm ほど削り出して造られ、火床面から煙道は緩やかに立ち上がる。
柱 穴	検出されていない。
貯 藏 穴	本跡北東部壁際に検出された。底面は平坦であるが、硬化していない。遺物は土師器の甕・壺類を中心 152 点出土している。図示した 4 が底部で出土している。
掘 り 方	中央部の貼床部分を中心に床面から 1 cm から 3 cm の深さまで掘り込まれている。
遺物出土状況	779 点、15,901.6 g の遺物が出土している。内訳は繩文土器の深鉢が 327 点、石器が 3 点、弥生土器の甕・壺類が 8 点、土師器坏類が 84 点、高坏が 1 点、甕・壺類が 311 点、器種不明が 45 点である。このうち 5 点を図示することができた。1 から 3 は丸底で口縁部が長く外反する須恵器蓋坏模倣坏である。1・3 は内面に放射状の暗文が施されカマド出土である。4 は貯藏穴出土で扁平な算盤球状の土師器壺である。5 も貯藏穴出土で底部に木葉痕をもつ肥厚する土師器甕底部である。
所 見	時期は出土した遺物や切り合ひ関係により、6世紀前葉頃と考えられる。

第17表 第6号竪穴建物跡内部施設属性一覧

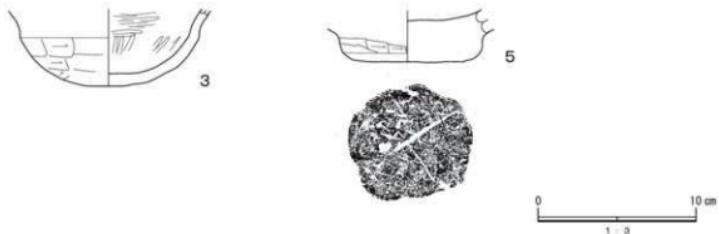
遺構番号	位置	平面形態	長径 (cm)	短径 (cm)	床面から の深さ (cm)	断面形態	切り合ひ關係	備考
貯藏穴	南東隅	椭円形	100	97	60	進台形狀	第1号溝跡に先行	主軸方向 N-8° - W



第23図 第6号竪穴建物跡



第25図 第6号竪穴建物跡出土遺物 (1)



第 26 図 第 6 号竪穴建物跡出土遺物 (2)

第 18 表 第 6 号竪穴建物跡出土器属性一覧

器形 番号	出土地点 遺構	種別	器種	残存 部位	残存 率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	構成	色調	備考
1 カマド 1 番	土間部	环	口縁部 ～体部	20	(14.6)	—	—	(5.8)	丸底の深底器蓋内横側斜め。口縁部外径 して底部との間に切妻的な縁。口縁部内 外面ヨコナガ後横方向にカギ。底部外 横横方向にカギナナゲ。内面丁寧 なナラ後斜放状の縁文。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 小礫	良好	2. 500E/6 明赤褐色	
2 4 区	土間部	环	口縁部 ～体部	5	(14.4)	—	—	(4.5)	丸底の深底器蓋内横側斜め。口縁部は長 く大さく外反、体部上部に切妻的な縁 で口縁部内外底ヨコナガ。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒	良好	2. 500E/6 褐色	器蓋の剥離 観察
3 カマド 1 番	土間部	环	口縁部 ～底部	20	—	—	—	(4.7)	丸底の深底器蓋内横側斜め。口縁部外縁 ヨコナガ、内面ヨコナナゲ後横方向にカギ ナナゲ。体部外横横方向ヘラカズリ。内面 丁寧ナナゲ後斜放状の縁文。	白色粒子・ 石英粒・ 白雲母片	良好	2. 500E/6 褐色	
4 蒙籠穴 No. 7	土間部	盖	縁部 ～底部	65	—	—	9.5	<40.7)	底平な器蓋底部を有する。底部突出。 口縁部下辺強度を留め。口縁部内 外面ヨコナガ後外縁横方向にカギ。瓶 底部外縁多方向にカギ。内面ヘラカズリ。 瓶底部外縁ナナゲ後横方向にカギ。内面 丁寧カズリナナゲ。下底横方向に カギナナゲカズリ。下底横方向ヘ カケヌリ。内面ナナゲ。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 白雲母片	良好	2. 500E/6 褐色	
5 蒙籠穴 No. 7	土間部	蓋	底部	5	—	—	7.1	(3.3)	肥厚する底部。外横横方向ヘラカズリ。 内面ナナゲ。底部外縁木製底。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 白雲母片	良好	2. 500E/4 紅茶色	

第 7 号竪穴建物跡

位 置

調査区中央部やや南東側、標高 19.12 m 地点に位置する。本跡の北西隅および東部が調査区外にあり、その部分は検出することができなかった。

規模と形状

長軸 838 cm、残存短軸 542 cm の方形を呈し、主軸方向は N - 17° - E を示す。壁高の最大高は 64 cm を測り、垂直に立ち上がる。

重複関係

単独で存在する。

土 層

20 層に分けられ、レンズ状の自然な埋没状況を示す。

床 面

緻密だが軟弱な貼床が厚さ 2 cm から 4 cm ほど貼られている。概ね平坦である。

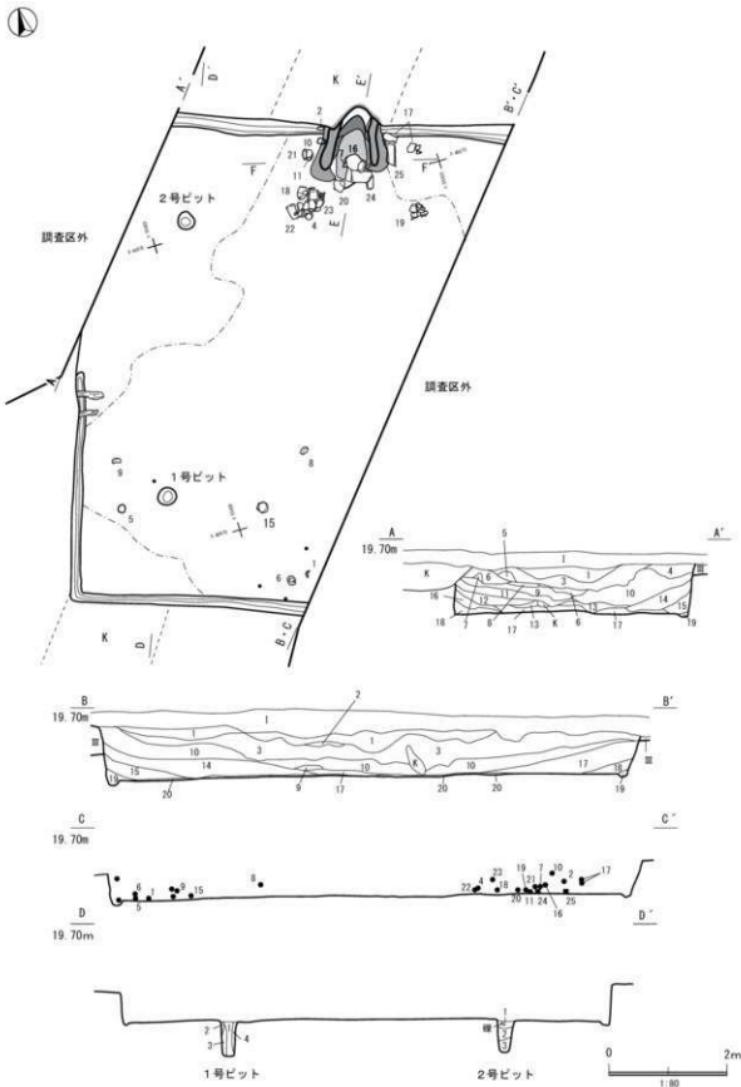
壁 溝

西側の一部を除いて、ほぼ検出された範囲で周回し、幅 10 cm から 27 cm、深さ 2 cm から 4 cm を測る。断面形は筒状である。

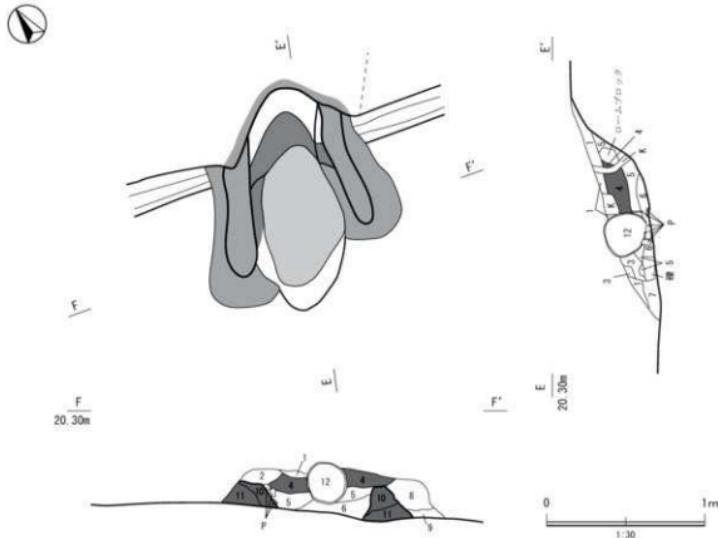
カマド・炉	本跡北壁中央部に位置し、黄灰色砂質粘土で構築されている。カマドの主軸方向はN-22°-Eを示し、本跡の主軸方位とは5°ほど東に傾く。焚口部から煙道部までは146cmを測る。天井部は崩落しており、カマド土層断面図中の4層が崩落土と考えられる。また、袖部は比較的良好に遺存しており、内壁が被熱により赤変化していることが確認された。基部の最大幅は57cmを測る。火床部は床面から3cmほど掘り広めて造られており、ゴツゴツと赤変化している。煙道は壁外に22cm程削り出して造られ、火床面から煙道は緩やかに立ち上がる。また、遺物が多量に出土しており、土師器の壺や袖部の芯材として利用されていたと思われる凝灰岩などが確認された。
柱 穴	2基検出された。各ビットの位置からどちらも主柱穴と考えられる。1号ビットの土層断面には柱痕跡が確認された。
貯 藏 穴	検出されていない。
掘 り 方	検出されていない。
遺物出土状況	658点、31,836.7gの遺物が出土している。内訳は縄文土器の深鉢が119点、石器が4点、土師器の坏類が59点、壺が14点、高坏が4点、鉢が5点、甕・壺類が383点、瓶が42点、器種不明が28点出土している。このうち25点を図示することができた。1から10は丸底の土師器坏である。1から3は器形が半球状である。4から10は須恵器模倣坏である。4・5は口縁部が内傾や内湾する。6から9は口縁部が外反あるいは外傾する。また、1・4・6・7・9の内面は放射状の暗文が施される。11は丸底で最大径は体部中位となる土師器の壺である。12から14は土師器の高坏である。12・13は高坏部で、口縁部は短く直立している。14は柱状中実の高坏脚部である。15は最大径が口縁部にある土師器鉢である。16から19は土師器壺である。16・17の最大径は胴部中位にあり、17は器形が球胸状となる。18は最大径は胴部にあり、19は最大径が胴部中位にある。20は土師器甕である。底部が突出しており、胴部外面は斜め方向の粗いミガキが施される。21から23は土師器瓶である。すべて単孔で、21は鉢型、22・23は甕型である。24・25はカマドの芯材として再利用されていた縄文時代の台石と回石である。24は向かって左側の袖部、25はカマドの前庭部で利用されていた。また、図示はできなかったが、本跡西壁際において、炭化物が2点壁に寄りかかる様に出土している。
所 見	出土した遺物から、6世紀前葉頃と考えられる。

第19表 第7号竪穴建物跡内部施設属性一覧

造様番号	位置	平面形状	高径 (cm)	短径 (cm)	床面から の深さ (cm)	断面形状	切り合い關係	備考
1号ビット	南西側	楕円形	32	29	69	逆円錐状	—	柱痕跡
2号ビット	北東側	楕円形	31	27	50	筒状	—	



第 27 図 第 7 号竪穴建物跡



第28図 第7号豊穴建物跡カマド

第7号豊穴建物跡

- 1 T.30K3/2 塗褐色土層 構造性は強い。ローム粒子、炭化粒子、赤色粒子を微量含む。
- 2 T.30K3/1 塗褐色土層 ローム粒子を少量含む。
- 3 T.30K3/0 塗褐色土層 細粒性やや弱い。ロームブロック・ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子・小織を微量含む。
- 4 T.30K4/4 塗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・赤色粒子を微量含む。
- 5 T.30K4/3 塗褐色土層 粘性は強い。ロームブロック・粘土ブロックを多量。ローム粒子を少額含む。
- 6 T.30K3/0 塗褐色土層 粘性は弱い。炭化粒子・炭化粒子を少額。ロームブロック・赤色粒子を微量含む。
- 7 T.30K3/1 塗褐色土層 粘性は強い。ロームブロック・粘土粒子を多量。ローム粒子を少額含む。
- 8 T.30K3/0 塗褐色土層 粘性は弱い。ロームブロック・炭化粒子を少額。ローム粒子・粘土粒子・赤色粒子を微量含む。
- 9 T.30K3/1 塗褐色土層 ロームブロック・炭化粒子を少額。ローム粒子・炭化物・粘土ブロック・粘土粒子・赤色粒子を微量含む。
- 10 T.30K3/2 塗褐色土層 粘性はやや強い。ロームブロックを多量。ローム粒子を少額。赤色粒子を微量含む。
- 11 T.30K3/3 塗褐色土層 炭化物・炭化粒子を少額。ロームブロック・赤色粒子を微量含む。
- 12 T.30K4/4 塗褐色土層 粘性は弱い。ロームブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・赤色粒子・小織を微量含む。
- 13 T.30K4/3 塗褐色土層 粘性は弱い。ロームブロックを多量。炭化物・炭化粒子・赤色粒子・小織を微量含む。
- 14 T.30K3/2 塗褐色土層 粘性は弱い。ロームブロック・粘土粒子を多量。炭化物・粘土粒子・赤色粒子を微量含む。
- 15 T.30K4/1 塗褐色土層 ロームブロックを多量。ローム粒子を少額。赤色粒子・小織を微量含む。
- 16 T.30K4/0 塗褐色土層 粘性は弱い。粘土粒子を多量。炭化物・粘土粒子・赤色粒子を微量含む。
- 17 T.30K3/0 塗褐色土層 粘性は弱い。炭化粒子を少額。ロームブロック・炭化物・粘土ブロック・小織を微量含む。
- 18 T.30K3/4 塗褐色土層 粘性は弱い。炭化物・炭化粒子・粘土粒子を少額。ロームブロック・赤色粒子・小織を微量含む。
- 19 T.30K1/1 塗褐色土層 粘性は弱い。ロームブロック・ローム粒子を多量。炭化粒子を微量含む。
- 20 T.30K1/4 塗褐色土層 粘性は弱い。ロームブロック・ローム粒子を多量。炭化粒子を微量含む。

第7号豊穴建物跡カマド

- 1 T.30K3/0 塗褐色土層 ローム粒子を少額。炭化粒子・粘土粒子を微量含む。
- 2 T.30K3/4 塗褐色土層 ローム粒子を少額。粘土ブロック・粘土粒子・砂粒を微量含む。
- 3 T.30K3/1 塗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を少額。粘土粒子・粘土ブロック・小織を微量含む。
- 4 T.30K1/1 黄褐色土層 粘性・締まりは共に強い。粘土ブロック・粘土粒子・砂粒を少額。粘土粒子を少額。腐泥状切片を微量含む。
- 5 T.30K4/1 塗褐色土層 粘性は弱い。ロームブロック・粘土ブロック・砂粒を少額含む。
- 6 T.30K6/0 塗褐色土層 粘性は弱い。砂粒を多量。ロームブロック・粘土粒子・炭化粒子・粘土ブロック・砂粒を少額含む。
- 7 T.30K6/6 塗褐色土層 粘性は弱い。粘土粒子を多量。ロームブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土ブロック・炭化粒子を少額。炭化物を微量含む。
- 8 T.30K3/4 塗褐色土層 ロームブロック・粘土粒子・砂粒を少額。ローム粒子・炭化粒子・粘土ブロック・炭・砂粒を少額。炭化物を微量含む。
- 9 T.30K3/4 塗褐色土層 ロームブロックを少額。ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子を微量含む。

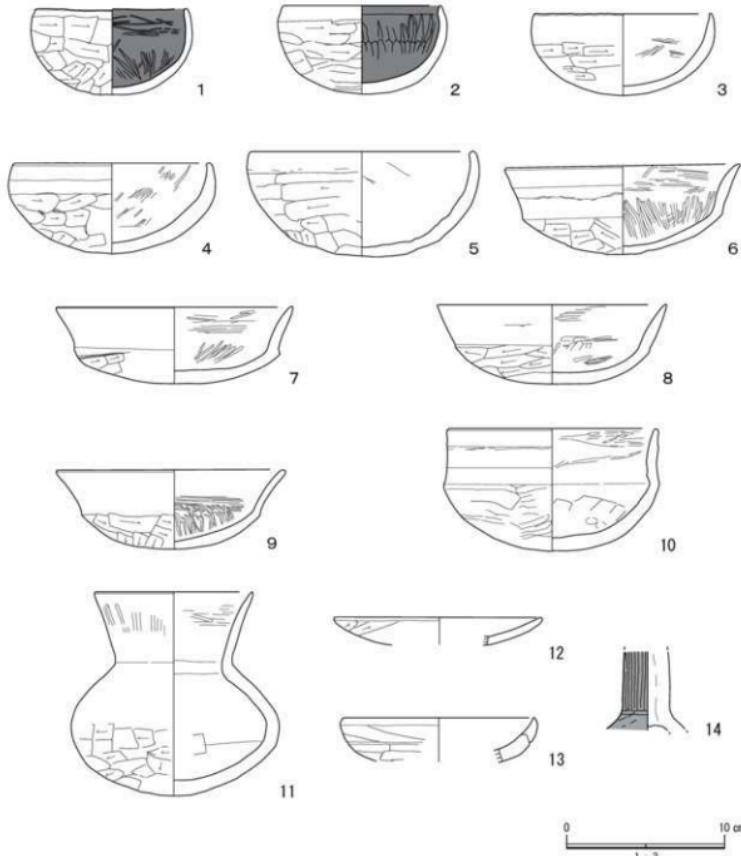
10. T.STR/1に近い黄色土層 稲毛・縫まりは共に無い。粘土ブロック・焼土粒子を多量。凝灰岩切石片を少量含む。
 11. T.STR/4褐色土層 ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・砂粒を少量。ローム粒子を微量含む。
 12. T.STR/5褐色土層 縫まりは弱い。ロームブロック・ローム板子を多量に含む。(土器器の中に入り込んだ土)

第7号竪穴建物跡1号ビット

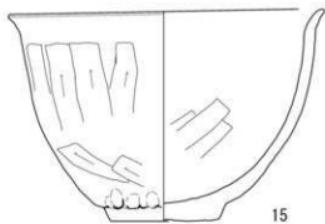
1. T.STR/3褐色土層 縫まりは弱い。炭化粒子を多量。ロームブロック・ローム粒子・小礫を少量含む。
 2. T.STR/4褐色土層 ロームブロック・ローム粒子・小礫を多量に含む。
 3. T.STR/4褐色土層 ロームブロック・ローム板子を多量。炭化粒子・小礫を少量化。
 4. T.STR/5褐色土層 ローム粒子・小礫を多量。ロームブロックを少量含む。

第7号竪穴建物跡2号ビット

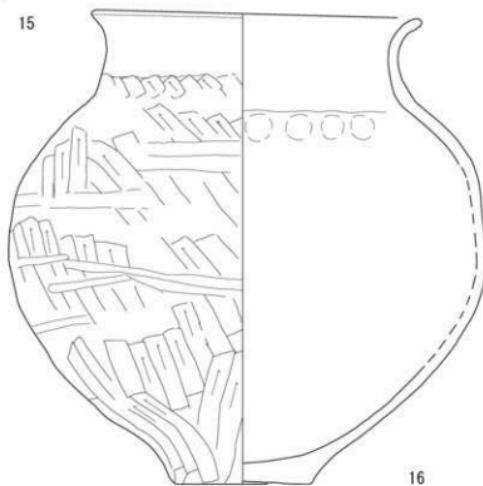
1. T.STR/2黒褐色土層 縫まりは弱い。炭化粒子を多量。ローム粒子を少量。燒土粒を微量含む。
 2. T.STR/3褐色土層 ローム粒子・炭化粒子・小礫を少量含む。
 3. T.STR/4褐色土層 小礫を多量。ローム粒子・炭化粒子を少量含む。



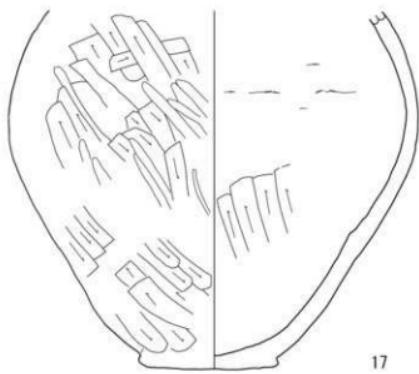
第29図 第7号竪穴建物跡出土遺物（1）



15



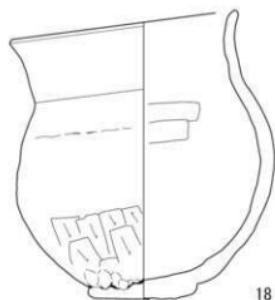
16



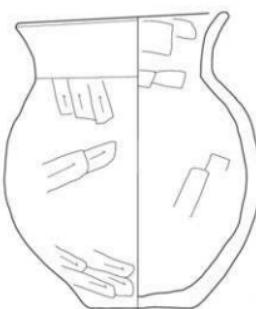
17



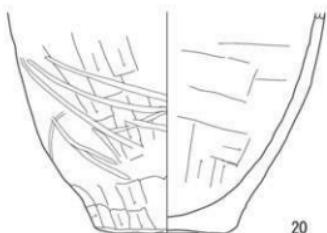
第30図 第7号竪穴建物跡出土遺物（2）



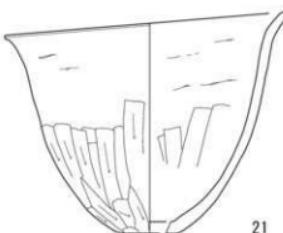
18



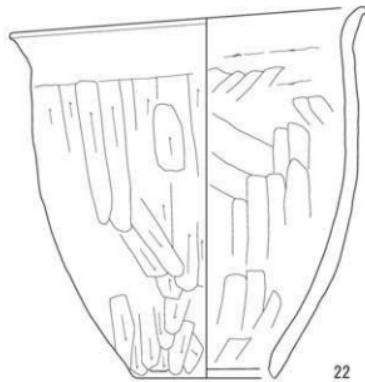
19



20



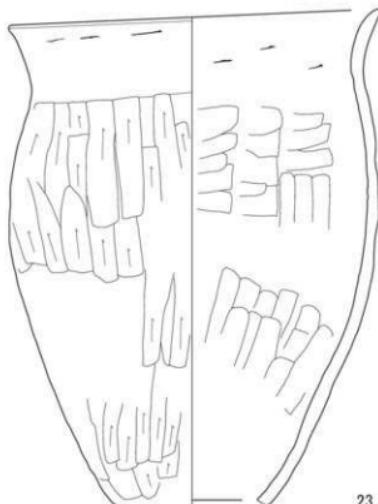
21



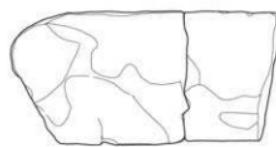
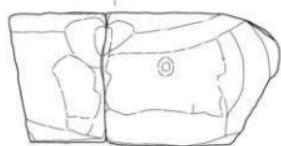
22



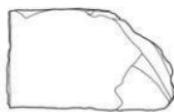
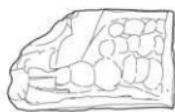
第31図 第7号竪穴建物跡出土遺物（3）



23



24

0 10 cm
1 3 (23)0 10 cm
1 6 (24 + 25)

25

第32図 第7号竪穴建物跡出土遺物(4)

第20表 第7号竪穴建物跡出土土器属性一覧

因版 番号	出土地番 遺構	種別	器種	残存 部位	残存 率(%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	No.8	土師器	环	口縁部 ～底部	100	9.5	—	5.5	丸底で手揉狀で内面が黒墨処理が施される。口縁部は僅に内傾。内面墨ヨコナガ。体部外表面多方向へラケズリ後ナガ。内面丁寧なナガ後1条1單位の放射状現文。	石英粒・ 長石粒・ 白雲母片・ 小端	良好	3100/4 褐色	
2	カマド No.23	土師器	环	口縁部 ～底部	95	9.9	—	5.6	丸底で手揉狀で内面が黒墨処理が施される。口縁部は僅に内傾。内面墨ヨコナガ。体部外表面多方向へラケズリ後ナガ。一部ミガキ。内面丁寧なナガ後縦方向へラケズリ。	石英粒・ 長石粒・ 白雲母片	良好	10100/3 に赤い黃褐色	
3	カマド	土師器	环	口縁部 ～底部	80	(11.2)	—	5.2	丸底で手揉狀で内面が黒墨処理が施される。口縁部は僅に内傾。内面墨ヨコナガ。一部ミガキ。内面丁寧なナガ後縦方向へラケズリ。	白色・ 黑色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 白雲母片	良好	2.5100/4 赤褐色	
4	カマド No.19	土師器	环	口縁部 ～底部	95	12.1	—	5.7	丸底で口縁部僅く内傾する。口縁部内外面ヨコナガ。体部外表面多方向へラケズリ後ナガ。内面丁寧なナガ後放射状現文。	石英粒・ 長石粒	良好	2.5100/6 明赤褐色	
5	No.3	土師器	环	口縁部 ～底部	95	11.0	—	6.6	丸底で口縁部は僅く内傾する。口縁部内外面ヨコナガ。体部外表面多方向へラケズリ後ナガ。内面底部の剥離のため調査不明。	石英粒・ 長石粒・ 小端	良好	2.5100/6 褐色	
6	No.6	土師器	环	口縁部 ～底部	95	14.6	—	5.7	丸底の強烈な渦巻き模様。口縁部長く外傾。体部との境に明顯な接合部。口縁部内外面ヨコナガ。内面ヨコナガ後縦方向へラケズリ。体部外表面多方向へラケズリ後ナガ。内面丁寧なナガ後2条1單位の放射状現文。	白色・ 黑色粒子・ 石英粒・ 長石粒	良好	2.5100/4 に赤い褐色	
7	カマド No.12	土師器	环	口縁部 ～底部	80	11.9	—	4.8	丸底の強烈な渦巻き模様。口縁部長く外傾。体部との境に明顯な接合部。口縁部内外面ヨコナガ。内面ヨコナガ後縦方向へラケズリ。体部外表面多方向へラケズリ後ナガ。内面丁寧なナガ後放射状現文。	石英粒・ 長石粒・ 小端	良好	3100/4 褐色	
8	No.10	土師器	环	口縁部 ～底部	50	11.4	—	5.9	丸底の強烈な渦巻き模様。口縁部長く外傾。体部との境に不明瞭な接合部。口縁部内外面ヨコナガ。内面ヨコナガ後縦方向へラケズリ。体部外表面多方向へラケズリ後ナガ。内面丁寧なナガ後方向へミガキ。	白色・ 黑色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 白雲母片・ 小端	良好	3100/4 褐色	
9	No.1	土師器	环	口縁部 ～底部	45	(13.6)	—	5.8	丸底の強烈な渦巻き模様。口縁部は大きめに反対して、体部との境に不明瞭な接合部。口縁部内外面ヨコナガ。内面ヨコナガ後縦方向へラケズリ。体部外表面多方向へラケズリ後ナガ。内面丁寧なナガ後1单位の現文。	白色・ 黑色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 白雲母片	良好	3100/6 明赤褐色	
10	カマド No.24	土師器	环	口縁部 ～底部	95	13.0	—	7.8	丸底の強烈な渦巻き模様。口縁部は直立し外傾。内面ヨコナガ。内面ヨコナガ後縦方向へミガキ。体部外表面多方向へラケズリ後ナガ。内面底部上位1ナガ。中位以下多方向へラケズリ後ナガ。内面ナガ。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 白雲母片	良好	2.5100/4 に赤い褐色	
11	カマド No.15	土師器	環	口縁部 ～底部	80	(9.8)	—	12.9	丸底で最大幅が体部中央になる腰折。口縁部は直立し外傾。内面ヨコナガ。内面ヨコナガ後縦方向へミガキ。内面横方向ミガキ。内面縦方向ミガキ。体部外表面上位1ナガ。中位以下多方向へラケズリ後ナガ。内面ナガ。	黑色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 白雲母片	良好	2.5100/4 に赤い褐色	
12	カマド	土師器	瓶	口縁部 ～全体	5	(11.0)	—	0.8	蓋平で口縁部僅少。口縁部内外面ヨコナガ。体部外表面多方向へラケズリ後ナガ。内面丁寧なナガ。	白色粒子・ 石英粒	良好	10100/4 に赤い黃褐色	

固形 番号	出土地点 遺構	種別	器種	残存 部位	残存 率(%)	口径 (cm)	底径 (cm)	基高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
13 カマド	土御器	瓶	口縁部 ～全体	S	(12.0)	—	—	(2.8)	口縁部削り直し。外面部ヨコナギ。底部外側削りと見られる小さな深み、横方向へカケリ後ナダ。内面丁寧なナダ。	白色粒子・ 長石粒	良好	905.6 明褐色	
14 1区	土御器	瓶	脚部～ 瓶部	S	—	—	(4.9)	柱状中実瓶状脚部下位。外面部丁寧なナダ。底部外側削り方向へナダ。内面削り後ナダ。外面部赤系。	白色粒子	良好	外面：10137.6 黄褐色 内面：3784.6 赤褐色		
15 N o 9	土御器	瓶	口縁部 ～底部	90	19.7	6.2	13.4	最大径は口縁部。口縁部上端が外斜。底部外側削り。口縁部内外面ヨコナギ。底部外側削り方向へカケリ後ナダ。内面削り後ナダ。内面削りヨコナギ後ナダ。底部外側削り。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 白雲母片	良好	10196.4 に赤い黄褐色		
16 カマド N o 11	土御器	瓶	口縁部 ～底部	95	20.3	6.7	36.0	最大径は脚部中位。口縁部削りヨコナギ。立ち上がりの上端が外斜。底部は突出する。口縁部内外面ヨコナギ。脚部外側削り方向へカケリ後ナダ。内面削り後ナダ。内面削りヨコナギ後ナダ。指痕。	石英粒・ 長石粒・ 小礫	良好	7.386.4 に赤い褐色		
17 カマド N o 21・22	土御器	瓶	脚部～ 底部	40	—	8.3	(22.6)	縫隙状を呈する。底面突出する。脚部外側削り方向へカケリ後ナダ。内面削りヨコナギ。内面削り方向へカケリ後ナダ。脚部外側削り。底部外側削り。近底部外面にナ�다で強ナダ。	石英粒・ 長石粒・ 白雲母片・ 小礫	良好	7.3305.6 明褐色		
18 カマド N o 16	土御器	瓶	口縁部 ～底部	80	11.1	6.8	18.2	最大径は脚部。口縁部直ぐ僅かに外斜。底部突出。口縁部内外面ヨコナギ。脚部外側削り中位にナダ。下位後方へカケリ後ナダ。下位削り後。内面削り後ナダ。内面削り後ナダ。	石英粒・ 長石粒・ 小礫	良好	2.516.4 に赤い赤褐色	差み大きい	
19 カマド N o 20	土御器	瓶	口縁部 ～底部	70	(13.3)	6.4	18.7	最大径は脚部下位。口縁部内外面ヨコナギ。脚部外側削り多く後ナダ。内面削り後ナダ。内面削り後ナダ。	石英粒・ 長石粒・ 白雲母片・ 小礫	良好	2.555.6 明赤褐色		
20 カマド N o 13	土御器	瓶	脚部～ 底部	20	—	9.0	(14.0)	底部突出。脚部外側削り方向へカケリ後ナダ。および弱い削りヨコナギ。内面削り後方へカケリ後ナダ。底部外側削り。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 白雲母片・ 小礫	良好	2.516.4 に赤い赤褐色		
21 カマド N o 14	土御器	瓶	口縁部 ～底部 開口部	100	17.6	—	14.0	単孔鉢型の瓶。開口部は丸みを帯び。口縁部外反する。内外面ヨコナギ。脚部外側削り方向へカケリ後ナダ。内面削り方向へナダ。底部外側削り。底部外側削り内面へカケリ後ナダ。孔は小さい。	石英粒・ 長石粒・ 小礫	良好	906.4 褐色		
22 カマド N o 17	土御器	瓶	口縁部 ～底部 開口部	90	22.3	—	23.6	単孔。最大径は口縁部。口縁部内外面ヨコナギ。脚部外側削り方向へカケリ後ナダ。内面削り後方へカケリ後ナダ。内面削り後ナダ。	石英粒・ 長石粒・ 白雲母片・ 小礫	良好	10180.6 明黄褐色		
23 カマド N o 18 カマド 蓋土	土御器	瓶	口縁部 ～底部 開口部	90	23.2	—	31.4	単孔。最大径は口縁部および脚部中位。口縁部内外面ヨコナギ。内面削りヨコナギ。脚部外側削りあり。脚部外側削り方向へカケリ後ナダ。内面削り後方。中位以下底部へカケリ後ナダ。開口部内面へカケリ後ナダ。整形成後ナダ。	石英粒・ 長石粒・ 白雲母片・ 小礫	良好	10186.6 に赤い黄褐色		

第 21 表 第 7 号竪穴建物跡出土石器属性一覧

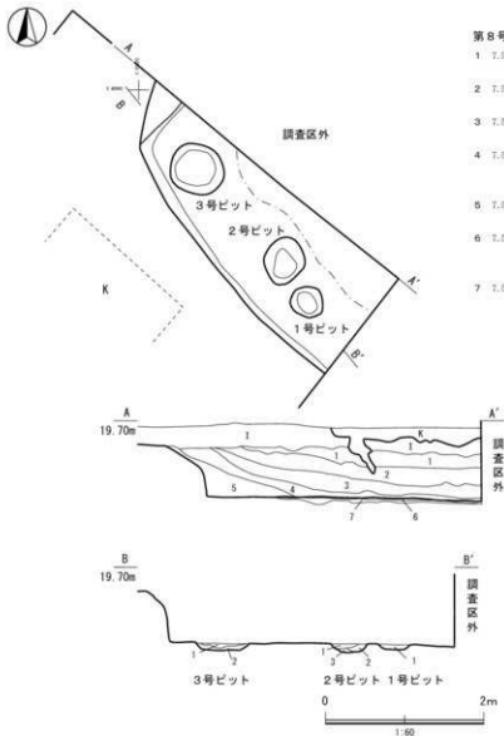
固形 番号	出土地点 遺構	種別	器種	大きさ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	特徴	備考
24 カマド N o 1・2	石器	圓石	口縁部 ～内部 開口部	(45.6)	22.6	8.3	3251.2	軽灰岩	上面および側面を粗く成形する。上面中央部に凹みを有つ。	縄文時代の固 められたカマド構 築材として再利 用
25 カマド N o 3	石器	青石	17.5	(28.3)	9.5	2821.1	軽灰岩	上面および側面を粗く成形する。	縄文時代の固 められたカマド構 築材として再利 用	

第 8 号竪穴建物跡

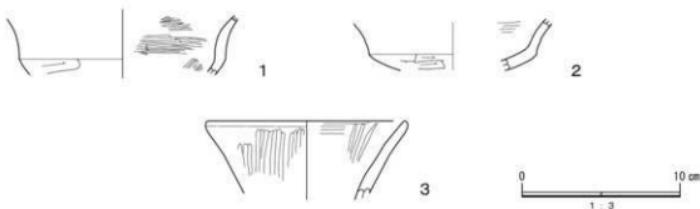
位 置	調査区北東部, 標高 19.32 m 地点に位置する。本跡の大半は調査区外にあり, その部分は検出することができなかつた。
規模と形状	長軸 376 cm 以上, 短軸 139 cm 以上の方形と推定される。主軸方向は西壁および南壁を基準に N - 48° - W を示す。壁高の最大高は 64 cm を測り, 垂直に立ち上がつた後大きく開く。
重複関係	単独で存在する。
土 層	7 層に分けられ, レンズ状の自然な埋没状況を示す。
床 面	ロームブロックを含む褐色土により緻密で軟弱な貼床が厚さ 1 cm から 2 cm ほど貼られている。概ね平坦である。
壁 溝	検出されていない。
カマド・炉	検出されていない。
柱 穴	3 基検出されたが, 本跡の検出範囲は限定的であり, 主柱穴や出入口ピットは不明である。
貯 藏 穴	検出されていない。
掘 り 方	中央部の貼床部分を中心に床面から 1 cm から 5 cm の深さまで掘り込まれている。
遺物出土状況	67 点, 724.2 g の遺物が出土している。内訳は縄文土器の深鉢が 9 点, 土師器の壺類が 13 点, 坩が 1 点, 壺・壺類が 44 点である。このうち 3 点を図示することができたが, 出土遺物はどれも遺存度が悪く, 時期を決定できる資料はごく少数であった。1・2 号口縁部が長く大きく開く丸底の須恵器蓋壺模倣壺である。3 号は土師器の壺口縁部である。
所 見	時期は遺物の遺存度が悪く判断は難しいが, 6 世紀代であろう。

第 22 表 第 8 号竪穴建物跡内部施設属性一覧

施設番号	位置	平面形態	長径 (cm)	短径 (cm)	床面から の深さ (cm)	断面形態	積り合い關係	備考
1 号ピット	南側	楕円形	45	40	6	直状	—	
2 号ピット	南側	楕円形	62	50	12	直状	—	
3 号ピット	南西側	楕円形	70	65	9	逆台形状	—	



第33図 第8号竪穴建物跡



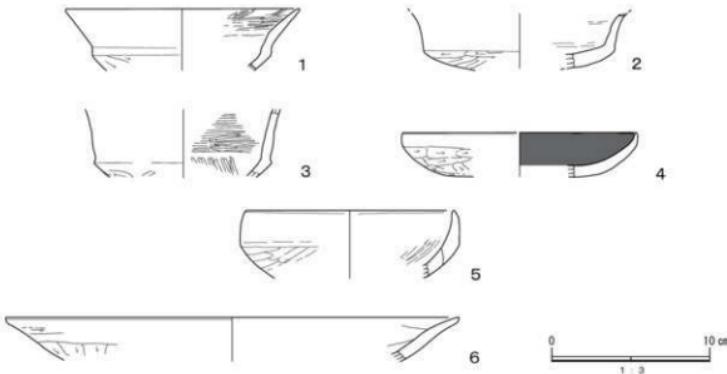
第34図 第8号竪穴建物跡出土遺物

第23表 第8号竪穴建物跡出土遺物属性一覧

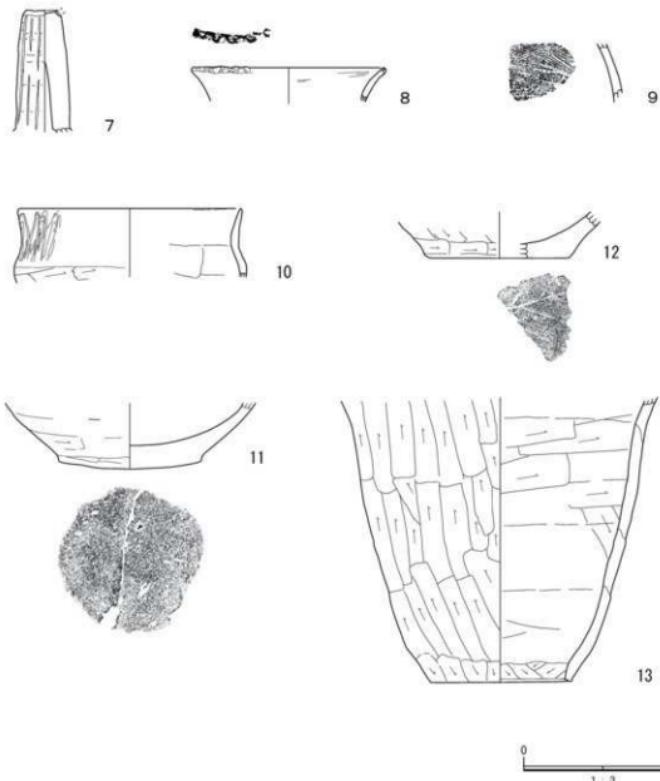
因版 番号	出土地名 遺構	種別	器種	残存 部位	残存 率(%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	覆土	土師器	环	口縁部 ～全体	5	—	—	(3.5)	須恵器蓋坏模破壊。口縁部が大きく開き、体部との境に接觸な所。口縁部外面に内面と同様の放射状暗文が施され、体部外面縦方向へタグマナダ。内面丁寧なナダ後放射状の埋文。	白色粒子・ 若葉粒子・ 長石粒	良好	明赤褐色	
2	覆土	土師器	环	口縁部 ～全体	5	—	—	(3.2)	須恵器蓋坏模破壊。口縁部が大きく開き、体部との境に不明顯な所。口縁部外面に内面ヨコナダ、内面ヨコナダ後横方向へタグマナダ。体部外面縦方向へタグマナダ。内面丁寧なナダ。	白色・ 黑色粒子	良好	7.5H5/4 に赤い褐色	
3	覆土	土師器	环	口縁部	8	(12.0)	—	(3.9)	口縁部底面的に開き、内外面ヨコナダ後横方向へタグマナダ。	赤色粒子・ 若葉粒子・ 長石粒	良好	7.5H6/4 に赤い褐色	

古墳時代の遺構外出土遺物

古墳時代の遺構外出土遺物は壺類や甌類、高杯、瓶などを中心に244点、3,692.1gが出土している。このうち13点を図示することができた。以下、出土した遺物について簡単な説明を加える。1から5は丸底の土師器壺である。1から3は口縁部が長く大きく開く器形の須恵器蓋坏模破壊である。3には内面に放射状暗文が施される。4は内面が黒色処理が施され、扁平で口縁部が短く直立する器形、5は口縁部が直立し、上端が内傾する器形の須恵器模倣壺である。6・7は土師器高杯である。6は大型で体部に稜を持たない高杯の壺部である。7は中空の柱状高杯脚部の基部である。8から11は土師器の甌である。8は口唇部に内外から押圧を加えて波状をなしている。9は多方向の細いハケ目が施されている。10は口縁部外面に波状のミガキが加えられている。11は突出する底部片である。12は土師器の甌で、底部に木葉痕が確認できる。13は土師器の單孔瓶である。時期は、8・9の土師器甌が4世紀代と考えられるが、他の遺物は5世紀後葉から6世紀中葉の範疇に収まる遺物であろう。



第35図 古墳時代の遺構外出土遺物 (1)



第36図 古墳時代の遺構出土遺物(2)

第24表 古墳時代遺構出土遺物属性一覧

固形 番号	出土地点 遺構	種別	基理	残存 部位	残存 率(%)	口径 (cm)	底径 (cm)	厚高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	表土	土頭器	环	口縁部 ～体部	15	(34.6)	—	<(3.9)	直筒部着底横切跡。口縁部最もくたまぐ く膨らむ。体部と下端に明瞭な縫合。口 縁部内外面ヨコナギ。体部外曲斜方角 ヘラカゼリ付ナギ。内面丁寧なナギ。	白色粒子	良好	2.5W4.8 赤褐色	体部内面器面 剥離観察
2	SK-5 2区	土頭器	环	口縁部 ～体部	19	—	—	<(4.5)	直筒部着底横切跡。口縁部最もく上端が 外反。体部との縫合跡を持たない。口 縁部内外面ヨコナギ。体部外曲斜方角 ヘラカゼリ付ナギ。内面丁寧なナギ。	白色粒子	良好	2.5W5.4 に白・赤褐色	
3	SD-1 上層	土頭器	环	口縁部 ～体部	5	—	—	<(4.2)	直筒部着底横切跡。口縁部最もく直線的 の外折。体部との縫合跡に明瞭な縫合。口縁 部内外面ヨコナギ。内面ヨコナギ後側方 角ヘラカゼリ付ナギ。内面丁寧なナギ後2束1単位 の放射状現象。	白色・ 黑色粒子・ 石英粒	良好	2.5W6.6 褐色	

固形 番号	出土地点 遺構	種別	基理	残存 部位	残存 率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	基高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
4	表土	土師器	环	口縁部 ～全体	29	(14.6)	—	(2.8)	内面黑色地。口縁部黒度高。口縁部内面ヨリゲザ。体部外側上段前方へ向ヶケズリ後側ハナダ。下位横方向へラケズリ。内面丁寧なナヂ。	白色粒子・ 石英粒	良好	外面: 10786/4 に55: 黄褐色 内面: 2. 573/1 黒色	
5	SK- 5 1区	土師器	环	口縁部 ～底部	10	(13.0)	—	(1.3)	先述の刷毛跡模様。口縁部直立て上端に横筋2本付たる。口縁部と底部の間に横筋付たない。口縁部内面ヨリコナザ。体部外側上段前方へラケズリ後側ハナダ。内面丁寧なナヂ。	白色粒子	良好	2. 504/8 赤褐色	
6	表土	土師器	瓶	口縁部 ～全体	10	(28.2)	—	(2.8)	口縁部長く大きく聞く器形。底部との境に横筋付たない。口縁部内外面ヨリコナザ。体部外側上段前方へラケズリ後側ハナダ。内面丁寧なナヂ。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒	良好	10786/6 明黄褐色	
7	表土	土師器	瓶	基部	5	—	—	(7.6)	柱状中空部。外表面方向強ハナダ後継方向ミガタ。内面ナヂ。	白色・黑 色粒子・ 石英粒・ 小礫	良好	3105/9 明赤褐色	
8	SI- 5 4区2層	土師器	瓶	口縁部	5	(12.0)	—	—	口縁部を内外から交互に押印。口縁部内外面ヨリコナザ。	白色粒子・ 石英粒	良好	2. 5785/8 明赤褐色	
9	SD- 1 上層	土師器	瓶	瓶部	5	—	—	—	瓶部外側多方向のハケ目。	白色粒子	良好	2. 5306/1 に55: 棕色	
10	SK- 5 2区	土師器	瓶	口縁部 ～瓶部	5	(14.0)	—	(0.4)	口縁部僅少内凹。外面ヨリナヂ後2条1単位の軽打付ミガタを有模。内面ナヂ。開口部横方向へラケズリ後側ハナダ。内面横方向へラケズリ後ナヂ。	白色粒子	良好	外面: 10787/8 黄褐色 内面: 2. 5785/8 明赤褐色	
11	表土	土師器	瓶	瓶部～ 底部	10	—	9.2	(4.1)	丸底を有し、突出する正底。開口部外側横方向強ハナダ。下縁部外側横方向へラケズリ後ナヂ。内面ナヂ。底部外側丁寧なナヂ。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒	良好	10786/4 に55: 黄褐色	
12	表土	土師器	瓶	瓶部～ 底部	5	—	(6.6)	(2.9)	瓶部外側面方向へラケズリ後ナヂ。下縁部外側横方向へラケズリ後ナヂ。内面横方向ハナダ。底部外側丁寧なナヂ。下縫跡方向ラケズリで瓶口部を成形。	白色粒子・ 石英粒・ 小礫	良好	10783/4 暗褐色	
13	表土	土師器	瓶	瓶部～ 開口部	20	—	(8.8)	(17.9)	半丸底型態。開口部外側面方向へラケズリ後ナヂ。内面横方向ハナダ後丁寧なナヂ。下縫跡方向ラケズリで瓶口部を成形。	白色粒子・ 石英粒・ 長石粒・ 小礫	良好	10787/6 明黄褐色	

4 中世以降の遺構

ここでは中世以降の遺構と遺物を取り上げる。遺構は、第1・3～6・8号土坑が中世以降、第1・2号溝跡、第2・7号土坑が近世以降である。これらは調査地点の北西部を中心に検出されている。遺物は、第2号土坑から出土した陶器の碗の他に、第4号竪穴建物跡に混入していた磁器の鉢、拓器の甕、縁が出土している。これらはいずれも小片のため、図示することはできなかった。以下、検出した遺構に対し簡単な説明を加えこととする。

溝跡

第1号溝跡

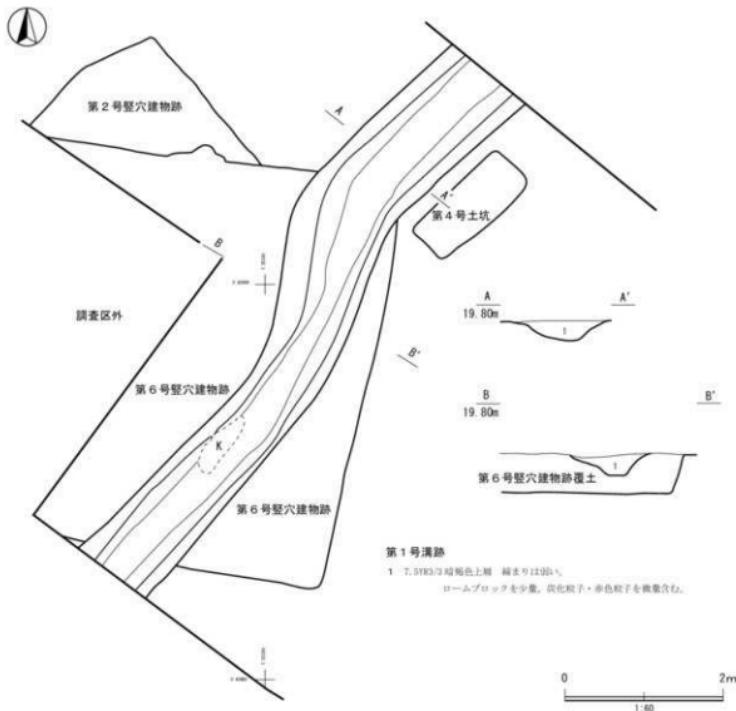
位置

調査区北西側、標高 19.2m 地点に位置する。

規模と形状

全長 782 cm、上幅 85 cm から 97 cm、下幅 20 cm から 46 cm を測る。確認面からの深

- 方 向 N - 34° - E の方向へやや蛇行しながら延び、両端が調査区外へと延びている。
- 重複関係 第6号竪穴建物跡に後続する。
- 土 層 単一層であり、人為的な埋没状況を示す。
- 付帯施設 検出されていない。
- 遺物出土状況 127点、1635.0gの遺物が出土している。内訳は縄文土器の深鉢が59点、弥生土器の甕・壺類が2点、土師器壺類が9点、鉢が1点、甕類が56点である。遺物は第6号竪穴建物跡などからの流れ込みと考えられる。
- 所 見 流水の痕跡は確認されていない。根切り溝もしくは区画溝と推測される。時期は、締まりの弱い覆土の状況から、近世以降の所産と推測される。



第37図 第1号溝跡

第2号溝跡

位 置	調査区南東側、標高 19.1m 地点に位置する。
規模と形状	本跡中央部やや北寄りの部分で一度途切れるが、全長 17.4 cm、上幅 25 cm から 98 cm、下幅 8 cm から 79 cm を測る。確認面からの深さは 5 cm から 21 cm を測り、断面形は皿状を呈する。壁面や底面は起伏に富み、大きく開き立ち上がる。
方 向	N - 53° - W の方向へ直線的に延び、南端は調査区外へと延びる。
重複関係	単独で存在する。
土 層	單一層であるが、遺存深度が浅いため埋没状況は不明である。
付帯施設	検出されていない。
遺物出土状況	遺物は出土していない。
所 見	流水の痕跡は確認されていない。根切り溝もしくは区画溝と推測される。時期は、縄まりの弱い覆土の状況から、近世以降の所産と推測される。

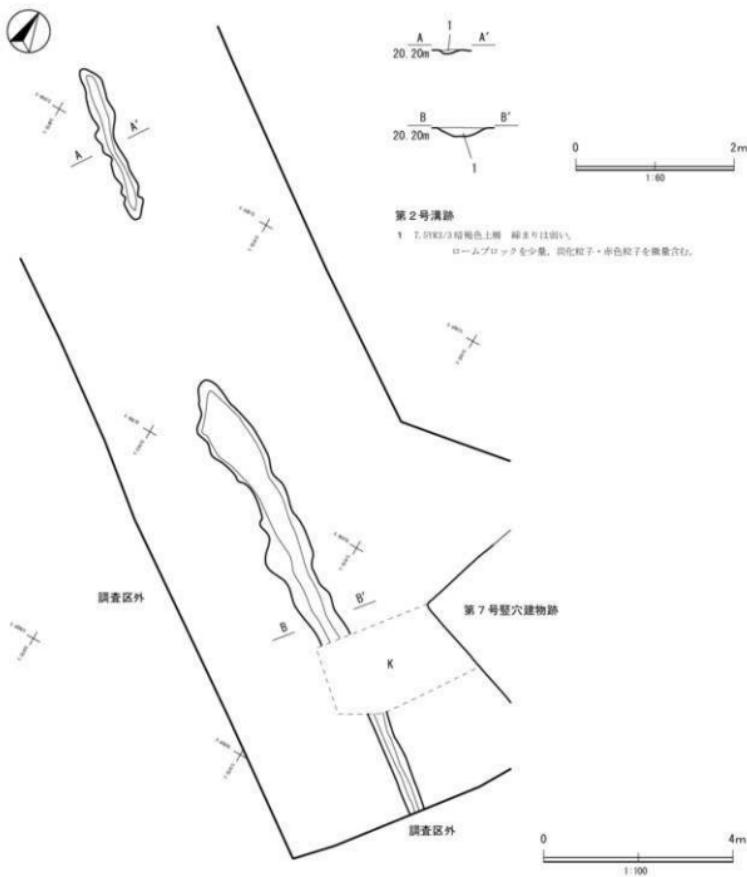
土坑

第1号土坑

位 置	調査区北西部、標高 19.20m 地点に位置する。
規模と形状	平面形は長軸 91 cm、短軸 66 cm の不整長方形で、確認面からの深さは 3 cm を測り、断面形は箱状を呈する。主軸方向は N - 51° - W を示す。底面はやや起伏を持ち、壁面は急角度に立ち上がる。
重複関係	単独で存在する。
土 层	單一層であるが、覆土が浅いため埋没状況は不明である。
遺物出土状況	5 点、21.8g の遺物が出土している。内訳は縄文土器の深鉢が 2 点、土師器の甕類が 3 点である。すべて細片のため図示することはできなかった。
所 見	性格は不明である。時期は、縄まりの弱い覆土の状況から、中世以降の所産であろう。

第2号土坑

位 置	調査区北西部、標高 19.20m 地点に位置する。
規模と形状	平面形は長軸 56 cm、短軸 56 cm の正方形で、確認面からの深さは 4 cm を測り、断面形は逆台形状を呈する。主軸方向は N - 25° - E を示す。底面は起伏を持ち、壁面は急角度に立ち上がる。
重複関係	単独で存在する。
土 层	單一層であるが、覆土が浅いため埋没状況は不明である。
遺物出土状況	2 点、36.5g の遺物が出土している。内訳は縄文土器の深鉢が 1 点、近世以降の磁器の碗が 1 点である。すべて細片のため図示することはできなかった。
所 見	性格は不明である。時期は、出土遺物や縄まりの弱い覆土の状況から、近世以降の所産と推測される。



第38図 第2号溝跡

第3号土坑

位 置	調査区中央部や北西側、標高 19.0m 地点に位置する。
規模と形状	平面形は長軸 77 cm、短軸 61 cm の楕円形で、確認面からの深さは 22 cm を測り、断面形は筒状を呈する。主軸方向は N - 16° - W を示す。底面は丸味を帯び、概ね平坦であり、壁面は緩やかに立ち上がる。
重複関係	単独で存在する。
土 層	2 層に分けられ、人為的な埋没状況を示す。
遺物出土状況	5 点、34.6g の遺物が出土している。すべて縄文土器の深鉢が 5 点であるが、いずれも細片のため図示することはできなかった。
所 見	性格は不明である。時期は、やや縮まりを持つ覆土の状況から、中世以降の所産と推測される。

第4号土坑

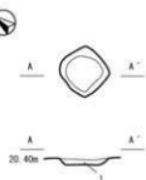
位 置	調査区北西部、標高 19.2m 地点に位置する。
規模と形状	平面形は長軸 149 cm、短軸 61 cm の方形で、確認面からの深さは 49 cm を測り、断面形は逆台形状を呈する。主軸方向は N - 45° - E を示す。底面は平坦であり、壁面は急角度に立ち上がる。
重複関係	単独で存在する。
土 层	單一層であり、人為的な埋没状況を示す。
遺物出土状況	10 点、126.4g の遺物が出土している。内訳は縄文土器の深鉢が 4 点、土師器の甕類が 6 点である。すべて細片のため図示することはできなかった。
所 見	土坑の形状や縮まりが弱い覆土の状況から、中世以降の芋穴と考えられる。

第5号土坑

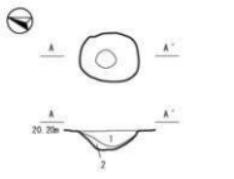
位 置	調査区中央部、標高 18.52m 地点に位置する。
規模と形状	平面形は残存長軸 63 cm、残存短軸 17 cm の推定円形で、確認面からの深さは 20 cm を測り、断面形は筒状を呈する。主軸方向は N - 30° - E を示す。底面は丸味を帯び、概ね平坦であり、壁面は緩やかに立ち上がる。西部が調査区外にありその部分は調査ができなかった。
重複関係	第5号竪穴建物跡に後続する。
土 层	レンズ状の自然な埋没状況を示す。
遺物出土状況	88 点、1040.7g の遺物が出土している。内訳は縄文土器の深鉢が 9 点、土師器の甕類が 16 点、高坏が 2 点、鉢が 1 点、甕類が 59 点、小型壺が 1 点である。このうち 3 点を図示することができたが、遺物は第5号竪穴建物跡からの流れ込みであるため、古墳時代遺構外出土遺物において掲載することとする。
所 見	性格は不明である。遺構の切り合い関係から、中世以降の所産と推測される。



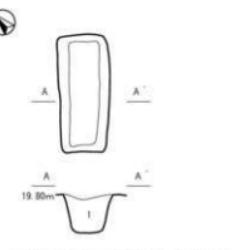
第1号土坑



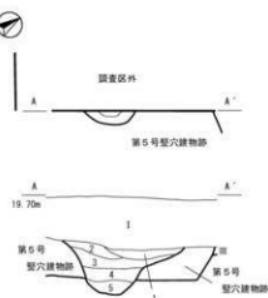
第2号土坑



第3号土坑



第4号土坑



第5号土坑



第39図 第1号から第5号土坑

第6号土坑

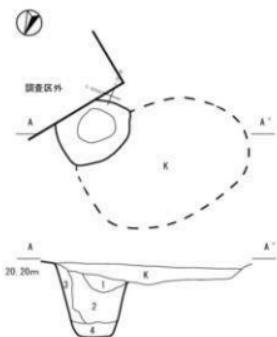
位 置	調査区中央部、標高 19.29m 地点に位置する。
規模と形状	平面形は長軸 101 cm、短軸 88 cm の推定楕円形で、確認面からの深さは 73 cm を測り、断面形は筒状を呈する。主軸方向は N - 38° - E を示す。底面は丸味を帯び、平坦であり、壁面は急角度で立ち上がる。南東側は調査区外で、上面や西側が搅乱で破壊されており、その部分は調査はできなかった。
重複関係	単独で存在する。
土 層	4 層に分けられ、人為的な埋没状況を示す。
遺物出土状況	遺物は出土していない。
所 見	性格は不明である。時期は、覆土の状況から、中世以降の所産と推測される。

第7号土坑

位 置	調査区北西部、標高 19.17m 地点に位置する。
規模と形状	平面形は長軸 81 cm、短軸 71 cm の楕円形で、確認面からの深さは 13 cm を測り、断面形は筒状を呈する。主軸方向は N - 22° - E を示す。底面は丸味を帯び、概ね平坦であり、壁面はゆるやかに立ち上がる。
重複関係	第3号竖穴建物跡に後続する。
土 层	單一層であり、人為的な埋没状況を示す。
遺物出土状況	遺物は出土していない。
所 見	土坑の形状や切り合い関係、縒まりを持たない覆土の状況から、近世以降の所産と推測される。

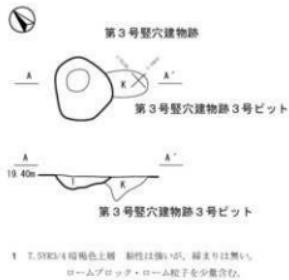
第8号土坑

位 置	調査区北西部、標高 19.18m 地点に位置する。
規模と形状	平面形は径 152 cm の円形で、確認面からの深さは 36 cm を測り、断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦であり、壁面は急角度に立ち上がる。
重複関係	第4号竖穴建物跡に後続する。
土 层	單一層であり、人為的な埋没状況を示す。
遺物出土状況	遺物は出土していない。
所 見	性格は不明である。時期は、縒まりの弱い覆土の状況から、中世以降の所産と推測される。



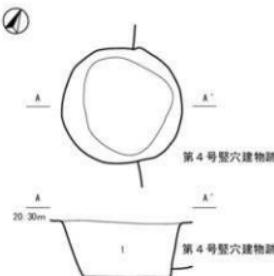
第6号土坑

1. T. SII3/3 暗褐色土層 粘性は強い。
ローム粒子・炭化粒子を少數。赤色粒子を微量含む。
2. T. SII4/3 黄褐色土層
ロームブロック・ローム粒子を少數。炭化粒子・赤色粒子・小礫を微量含む。
3. T. SII3/4 暗褐色土層 粘性は強い。
炭化粒子を少量。ロームブロック・ローム粒子・赤色粒子・小礫を微量含む。
4. T. SII4/4 黄褐色土層
ロームブロックを多量。ローム粒子を少數。炭化粒子を微量含む。



第7号土坑

1. T. SII3/4 暗褐色土層 粘性は強いが、緑まりは黒い。
ロームブロック・ローム粒子を少量含む。



第8号土坑

1. T. SII3/1 暗褐色土層 粘性は強い。
ローム粒子・炭化粒子を多量。小礫を少量含む。



第40図 第6号から第8号土坑

第25表 出土遺物計量表

出土地點		第1号櫛穴遺物地		第2号櫛穴遺物地		第3号櫛穴遺物地		第4号櫛穴遺物地		第5号櫛穴遺物地	
出土地點	地點	地點	重量(克)	地點	重量(克)	地點	重量(克)	地點	重量(克)	地點	重量(克)
牛頭山386	三戶		1	75.5							
	麻灰	2	138.3	105	170.2			54	606.2	20	260.0
	浮島	23	261.7	35	506.0			54	613.6	9	125.6
新南縣	路邊	1	272.2	2	7.0			5	71.3		139
	不明(鐵鏈)			13	95.7			17	41.0	5	27.9
	小計	21	507.2	154	270.4	0	3.0	130	146.1	52	513.5
中南縣	阿玉屯	2	23.5	1	18.1					1	10.2
	加羅村莊	3	113.2					1	11.1		2
	小計	7	136.7	1	18.1	0	0.0	1	34.1	0	0.0
不詳				5.6	18	327.7		59	208.6	6	53.3
	小計	1	5.6	19	327.7	0	0.0	59	208.6	6	53.3
楊文浩代	石盤									2	11.7
	石枕									1	1.7
	砂石										
	石圓										
	劍片										
	合石										
	小計	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	10.6	0	0.0
	鐵文浩代小計	20	606.2	172	210.2	0	0.0	101	2106.6	30	126.6
李半清代	鐵劍	麥、麥劍						11	116.7	13	150.7
	小計	0	0.0	0	0.0	0	0.0	11	116.7	13	150.7
	李半清代小計	0	0.0	0	0.0	0	0.0	11	116.7	13	150.7
										0	11.7

出土单位		第7号竖穴葬地		第9号竖穴葬地		第1号墓地		第2号墓地		第3号墓地	
出土物		点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
新石器时代	穿孔蚌壳	三户									
	麻布	3	69.8	1	21.6	1	36.0	1	9.0	1	18.6
	贝壳	2	25.7			22	676.1			1	22.7
	残器					3	46.7				
青铜时代	不明(铜质)	37	66.9	1	29.7			1		1	7.9
	小针	42	142.4	3	51.3	39	700.6	2	13.5	1	32.7
	阿玉岱									2	26.6
	中型玉带										
汉文帝时代	小针	9	9.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	不明器物	77	139.0	4	11.2					3	8.1
	小针	77	139.9	4	11.2	0	0.0	0	0.0	3	8.1
	石器	1	5.8								
东汉时代	石片										
	石器										
	石器										
	石器										
晋文帝时代	小针	4	607.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	铁灰陶管(小针)	123	860.8	9	43.5	39	701.8	2	13.3	1	32.7
	漆器	1	2621.1			2	27.0				24.6
	小针	0	0.0	0	0.0	2	17.0	0	0.0	0	0.0
晋武帝时代	漆器	0	0.0	0	0.0	2	17.0	0	0.0	0	0.0
	漆灰陶管(小针)	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0

出土地点		第4号土坑		第5号土坑		第6号土坑		表层		总计	
出土物	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	
原始社会	三件										
石斧	1	1.3	4	0.8	5	0.8	69	0.6	209	0.9	
石矛	2	35.2	5	75.5	6	81.0	35	606.1	261	5214.4	
石器							8	44.9	25	317.6	
不明(细石器)					2	1.3	18	60.3	144	511.6	
小针	3	44.5	9	125.3	13	180.3	105	1347.9	890	11251.9	
中石器时代	两件								4	11.8	
加粗骨针							1	10.7	9	191.4	
小针	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	10.7	13	213.2	
不明石器	1	2.6			2	10.5	7	105.3	220	1795.9	
小针	1	2.8	0	0.0	2	10.6	7	105.3	220	1795.9	
石器									3	17.5	
石剪									1	10.8	
石器									1	1.7	
砂石									2	555.2	
小针	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	2651.1	
新石器时代小针	4	41.3	9	125.3	13	206.8	113	1321.9	111	21306.4	
漆器	1	1.6					1	16.4	35	421.0	
漆器带、漆器											
小针	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	36.4	36	421.0	
新石器时代小针	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	36.4	36	421.0	

出土地點		第1号竪穴式住居			第2号竪穴式住居			第3号竪穴式住居			第4号竪穴式住居			第5号竪穴式住居			第6号竪穴式住居			第7号竪穴式住居			第8号竪穴式住居				
出土物種		点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
測量器 小計		0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	60.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
土壤器	石鋤	37	164.9	21	291.5	121	936.0	233	2652.7	81	614.2	70	2018.5	13	92.6	9	86.2										
	圓			1	19.3			4	132.1																		
	刃																										
	斧																										
土器器	蒸灰			3	144.2			1	32.1	2	77.0	1	26.1	4	94.9												
	鉢			1	32.7			2	76.9	5	165.6			5	913.2									1	26.4		
	盤	23	153.6	95	1692.8	0	178.3	396	3622.5	636	1296.9	111	10172.3	363	1823.5	44	5163.3	36	730.6								
	小盤																										
鐵	劍																										
	不明	12	32.2	6	3.6	130	1090.1	4	178.3	675	6213.1	48	205.0	65	129.1	28	66.2										
	小針	72	105.0	130	1090.1	4	178.3	675	6213.1	720	10569.2	491	11491.7	535	23196.3	38	664.7	66	857.2								
	土製品																										
石製品	小針			0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	71.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	硯石							1	235.3																		
	研磨盤							1	235.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	研磨棒																										
陶器	瓦																										
	盆																										
	罐																										
	瓶																										
滑石	滑石																										
	滑石圓盤																										
	滑石圓盤小針																										
	滑石圓盤小針小計																										
滑石器	滑石器																										
	滑石器																										
	滑石器																										
	滑石器																										
滑石器以降	滑石器																										
	滑石器																										
	滑石器																										
	滑石器																										
時代不明	小針			123.5	9	779.3	0	0.0	1	23.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	小針			123.5	9	779.3	0	0.0	1	23.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	滑石器小針			123.5	9	779.3	0	0.0	1	23.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	滑石器	112	138.0	312	3294.8	4	178.3	391	6311.0	194	11220.8	779	13011.8	638	31386.7	67	724.2	127	1035.0								

第4章 考察

御茶園遺跡は、北に千波湖や偕楽園を望む台地の縁辺部分に位置し、西に流れる桜川による開拓谷の西岸、標高 19.5 m～22.3 m に分布する遺跡である。御茶園という遺跡名（地名）は、水戸藩第9代藩主徳川齊昭が天保6（1835）年に宇治の茶師・小川佐助を招き、この地に茶園を開いたことが由来となっている。御茶園遺跡は、過去3ヶ所の調査において少量の遺物は出土しているものの、遺構は検出されておらず、今回の第4地点の発掘調査において、はじめて遺構が検出された。検出された遺構は、古墳時代の堅穴建物跡8軒、中世以降の構跡2条、土坑8基である。遺物は、縄文時代早期中葉の三戸式土器から、近世以降の陶器や磁器まで、計4,117点、約83.7 kg が出土している。これらの遺構や遺物の詳細については第3章で述べたが、本章では、検出・出土した遺構や遺物をもとに、御茶園遺跡における土地利用の移り変わりを中心に考えていただきたい。

縄文時代の遺構は検出されていないが、遺物が1,331点、21,392.4 gと、全出土遺物点数の27%強、全遺物出土重量の25%強を占める。時期は、縄文時代前期中葉の黒浜式期や後葉の浮島式期を中心で67%を占め、889点の土器が出土している。その他の時期としては、早期中葉の三戸式、中期中葉の阿玉台式期、後葉の加曾利E式期の土器が、14点出土している。石器は、チャート製の石鏃や石匙、凹石、台石などが出土しているが、計8点であり、土器に比べて少数にとどまっている。このうち第7号堅穴建物跡のカマドで再利用されていた凹石と台石は、その使用石材に疑問があるため、後述したい。なお、遺物の出土地点は表土中や搅乱土中の他、第2・4～6号堅穴建物跡内の出土が目立つ。これらの遺構は、調査区の北西部に集中しており、この付近の調査区外に縄文時代の遺構が存在する可能性が高い。調査区東側の千波湖畔には縄文時代前期の貝塚と考えられている柳崎貝塚が位置しているが、縄文時代前期の集落は近隣では確認されていない。

弥生時代については遺構が検出されず、遺物も35点の出土と少数にとどまった。桜川の対岸の植松遺跡や見川塚畠遺跡では、当該期の遺物が確認されているが、当遺跡には集落が存在していたとしても規模は小さかったと考えられる。遺物はすべて弥生時代後期と判断され、弥生時代前期から中期の様相は不明である。

古墳時代は、今回の発掘調査で中心となる時代である。遺構は今回検出された8軒の堅穴建物跡がすべてこの時代に収まり、遺物も土器が2,934点、61 kg弱と全出土遺物点数の71%強、全遺物出土重量72%強を占める。その他、土製紡錘車が第5号堅穴建物跡から2点、砥石が第4号堅穴建物跡から1点、それぞれ出土している。

堅穴建物跡の時期は、出土遺物や重複関係などから概ね4期に分けられる。しかし、調査範囲が狭く、耕作や他の遺構で破壊されており、不明確な点が多いということを留意した上で、各期における堅穴建物跡を見ていきたい。

1期は、本地点で検出された一番古い遺構で、4世紀代に比定される第3号堅穴建物跡である。この堅穴建物跡は、中央部やや東寄りに地床炉をもち、40°西に振れる軸方向をもつ。上面が耕作などにより削平されていたうえ、出土遺物も土師器片が4点と少なかったため、これ以上の時期までは追えなかった。

2期は、5世紀前葉から中葉に比定される第2号堅穴建物跡である。当遺構は、第6号堅穴建物跡や第1号構跡に大半を破壊されている状況であった。内部施設は検出されていない。主軸方向は42°西に振れている。

3期は、6世紀前葉に比定される第1・5～7号の堅穴建物跡4軒である。このうち第7号堅穴建物跡は一辺が8m以上と大型であることは特筆される。第1号堅穴建物跡は大半が調査区外にあり、カマドの有無は確認できなかったが、第6・7号堅穴建物跡にはカマドを伴い、第5号堅穴建物跡には炉跡が伴う。また、各堅穴建物跡の主軸方向は第1号建物跡が20°、第5号が10°、第6号が8°、第7号が17°と、どれも東側に振れている。これら堅穴建物跡が概ね8°から20°の近接した主軸方向を示していることから、ほぼ同時期に各建物跡が存在していたと考えられ、出土した遺物もそれを裏付けている。

4期は、6世紀中葉から後葉に比定される第4号堅穴建物跡が該当する。主軸方向は22°西に振れていて、カマドを伴う。

以上検出された堅穴建物跡の中で、特に3期においては、遺物から判断した時期と主軸方向が近似値を示すことが確認できた。また、これら4期にわたる堅穴建物跡は調査区の北部を中心に点在して分布していることから、集落が調査区の北側を中心に展開していることは容易に推測できるが、第5号および第7号堅穴建物跡から南側では、堅穴建物跡が検出されていない。この理由が本調査地点が集落の南端であるからなのか、中央広場のような集落が途切れる位置であるからなのか、今回の発掘調査では確認できなかった。

次に、カマドが検出された第4・6・7堅穴建物跡については、いずれも北壁にカマドが位置しており、絶対数が少ないものの、基本的には堅穴建物跡の北壁に設置される傾向を持っている。また、カマドが設置されている堅穴建物跡はいずれも確認面から50cm以上であり、カマドが設置されていない堅穴建物跡と比べ、深く掘り込まれている傾向がある。これらが検出された堅穴建物跡を含む集落全体の傾向なのか、本調査地点付近のみに、立地条件などが原因で見られる傾向なのか、明確にすることはできなかった。今後の近隣の発掘調査で検出されるであろう堅穴建物跡を丁寧に確認していくことは、これらの問題は自然に解決するであろう。

遺物は、前述したとおり本調査地点出土遺物の7割超が古墳時代の産物である。主に堅穴建物跡内出土遺物が大半を占めるが、第3号堅穴建物跡のように出土遺物が4点にとどまる堅穴建物跡もあれば、500点を超える遺物が出土している第5・7号堅穴建物跡も存在する。土師器が大半を占め、須恵器は第5号堅穴建物跡出土の蓋坏1点のみである。器種は土師器の壺や甕・壺類、高壺、瓶など日常的に使われていたと想定できる器種のみ出土しており、今回確認された建物跡は、一般的な集落の様相を呈する。このうち土師器壺は、須恵器蓋坏模倣壺を中心し、多様なバリエーションがみられる。また、土製品は第5号堅穴建物跡から、土製紡錘車が2点出土している。石器は第4号堅穴建物跡から、砥石が1点出土しているのみである。縄文時代の項目で言及している、第7号堅穴建物跡のカマドで利用されていた凹石や台石は凝灰岩製で、上面に円錐形の窪みや加工が施され、意図的に平坦面が造られていたため、縄文時代の石器の再利用と判断した。しかし、石材は凝灰岩と凹石や台石に適さない石材であり、その加工が施されている状況から、古墳の石室構築材として利用されていた石材の可能性もある。本遺跡の北東側には、前方後円墳1基、円墳2基確認されている千波山古墳群が立地しており、同古墳群との関係性について、留意しておく必要がある。

また、古代の遺構や遺物は検出・出土していないことから、古代における水戸市域中心地は、台渡里廃寺跡や台渡里宮衙遺跡周辺、吉田台地近辺などに移動しているものと考えられ、本遺跡内における古代の土地利用は低調であったと推測される。

中・近世の遺構は溝跡2条、土坑8基が検出されている。この2条の溝跡は、その規模や底面の状

況から、どちらも近世の区画溝もしくは根切り溝である可能性が高い。8基の土坑は、その平面形などから芋穴などの用途が想定できる土坑もあるが、大部分は性格不明の土坑である。遺物は非常に少なく、陶器碗、磁器鉢、炻器甕が各1点ずつ確認された。伴う遺物が出土していないため、基本的には切り合い関係と覆土の縮まりや覆土の包含物で時期を判断したが、これ以上に時期を特定することはできなかった。時期別でみると、中世以降は第1・3～6・8号土坑、近世以降は第1・2号溝跡、第2・7号土坑のみである。中・近世もまた古墳時代に比して遺構・遺物は少なく、古代同様、集落の移動あるいは縮小傾向が続いていると推測される。さらに、調査地点付近では11世紀ごろに桜川を挟んだ地点に、馬場大掾氏一族の箕川長幹により見川城が築城されている。想像の範疇を出ないものの、その対岸である本遺跡周辺では防御上の関係から、建物等が建ち並ぶ状況にはなったことも想定される。なお、見川城は、慶長7(1602)年の徳川氏水戸城入城に伴い廃城となっているが、水戸城から見ても、本遺跡は自然の堀である桜川の対岸直上に位置するため、中世期と同じように見晴らしの良い状態を保つ必要があったことが想定される。また、徳川斉昭が本遺跡周辺に茶園を開設したことが本遺跡名の由来となっているよう、近世以降も畠地が多い地域であったようで、明治期や大正期には旧陸前浜街道が南北に走るが、本遺跡近辺は畠地が広がる風景が第2次大戦前まで続いたとのことである。

今回の発掘調査において、本地点では、縄文時代前期中葉ごろから土地利用の痕跡が確認されたが、縄文時代中期以降その痕跡は消えてしまう。次に確認できるのは弥生時代後期だが、その出土遺物量からみて、きわめて小規模な集落であったと推測される。その後、古墳時代には4世紀ごろから集落が営まれ、6世紀前葉において本地点において最盛期を迎えた。6世紀の中葉になると集落の痕跡は確認できず、移動あるいは衰退してしまったようである。その後、中世以降は土坑などを掘り込む状況はあっても、主体的な生活の痕跡は見られず近世を迎えるが、近世以降もさほどの変化は見られず、畠地が拡がった農村地域であったことが予想され、明治以降も第二次世界大戦前までこの状況は続いたようである。

引用・参考文献

- 井上義安・夢沼香未由ほか 1998 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成10年度版』水戸市教育委員会
- 茨城県教育庁文化課編 2001 『茨城県遺跡地図 地図編』茨城県教育委員会
- 茨城県立歴史館編 1995 『茨城県史料 考古資料編4 奈良・平安時代』茨城県
- 齋藤弘道 2006 『茨城の縄文土器 茨城県立歴史館史料叢書9』茨城県立歴史館
- 樋村宣行・浅井哲也 1992 「常陸地域の鬼高式土器－久慈川・那珂川流域を中心として－」『月刊考古学ジャーナル』342 ニューサイエンス社
- 樋村宣行 1993 「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』2 茨城県教育財団
- 1996 「和泉式土器編年考－茨城県を中心として－」『研究ノート』5 茨城県教育財団
- 樋村宣行・土生朗治・白石真理 1999 「茨城県における5世紀の動向」『東国土器研究』第5号上巻 東国土器研究会

- 川口武彦・色川順子・闇口慶久・新垣清貴 2009 『平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 川口武彦・色川順子・闇口慶久・渥美景吾ほか 2010 『平成19年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 川口武彦・闇口慶久・新垣清貴ほか 2007 『平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 後藤俊一・宮田和男・萩原宏春・高野信一・西脇志津 2014 『北原遺跡I 道の駅整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
常陸大宮市教育委員会
- 中山信名著・栗田寛輔 1969 『新編常陸国誌』宮崎報恩会
- 堀口友一 1981 『今昔 水戸の地名』曉印書館
- 水戸市史編さん委員会編 1991 『水戸市史 上巻』水戸市役所

写 真 図 版

図版 1



調査区完掘全景 北西より



調査区完掘全景（中央部～西部）南東より



調査区完掘全景（東部）南西より

図版 2



第1号竪穴建物跡完掘状況 南東より



第1号竪穴建物跡遺物出土状況 南より



第2号竪穴建物跡遺物出土状況 南東より



第2号竪穴建物跡遺物出土状況 北東より



第2号・6号竪穴建物跡完掘状況 東より



第2号竪穴建物跡遺物出土状況 東より



第2号竪穴建物跡土層 北東より



第3号竪穴建物跡完掘状況 北西より

図版 3



第3号竪穴建物跡土層 南西より



第3号竪穴建物跡炉跡土層 南より



第4号竪穴建物跡完掘状況 南東より



第4号竪穴建物跡土層 南東より



第4号竪穴建物跡カマド完掘状況 南東より



第4号竪穴建物跡カマド土層 南東より



第4号竪穴建物跡遺物出土状況 南東より



第4号竪穴建物跡掘り方完掘状況 南東より

図版4



第4号竪穴建物跡カマド掘り方完掘状況 東より



第5号竪穴建物跡完掘状況 南より



第5号竪穴建物跡土層 南より



第5号竪穴建物跡炉跡完掘状況 南より



第5号竪穴建物跡貯蔵穴完掘状況 東より



第5号竪穴建物跡貯蔵土層 東より



第5号竪穴建物跡2号ピット土層 南東より



第5号竪穴建物跡遺物出土状況 南より

図版 5



第5号竪穴建物跡遺物出土状況 東より



第5号竪穴建物跡掘り方完掘状況 南より



第6号竪穴建物跡カマド完掘状況 南より



第6号竪穴建物跡貯蔵穴遺物出土状況 東より



第6号竪穴建物跡貯蔵穴土層 東より



第6号竪穴建物跡カマド袖部断ち割り状況 南より



第7号竪穴建物跡完掘状況 南西より



第7号竪穴建物跡土層 南東より

図版 6



第7号竪穴建物跡カマド完掘状況 南東より



第7号竪穴建物跡カマド土層 西より



第7号竪穴建物跡1号ピット土層 東より



第7号竪穴建物跡遺物出土状況 南より



第7号竪穴建物跡遺物出土状況 北より



第7号竪穴建物跡遺物出土状況 南より



第7号竪穴建物跡遺物出土状況 南西より



第7号竪穴建物跡カマド遺物出土状況 南より

図版 7



第 7 号竪穴建物跡カマド遺物出土状況 南より



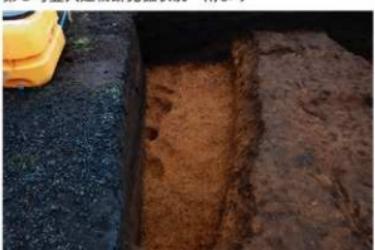
第 7 号竪穴建物跡掘り方完掘状況 南より



第 8 号竪穴建物跡完掘状況 南より



第 8 号竪穴建物跡土層 南西より



第 8 号竪穴建物跡掘り方完掘状況 北西より



第 1 号土坑土層 南東より



第 2 号土坑土層 南西より



第 3 号土坑完掘状況 北西より

図版 8



第4・7号土坑完掘状況 北東より



第5号土坑完掘状況 南東より



第6号土坑完掘状況 南西より



第8号土坑完掘状況 南東より



第1号溝跡・第4号土坑完掘状況 北より



第2号溝跡完掘状況 南東より



基本層序 北東より

図版 9



第 1 号竪穴建物跡遺物 1



第 1 号竪穴建物跡遺物 2



第 2 号竪穴建物跡遺物 1



第 2 号竪穴建物跡遺物 2



第 2 号竪穴建物跡遺物 3



第 2 号竪穴建物跡遺物 4



第 3 号竪穴建物跡遺物 1



第 3 号竪穴建物跡遺物 2

図版 10



第 4 号竪穴建物跡遺物 1



第 4 号竪穴建物跡遺物 2



第 4 号竪穴建物跡遺物 3



第 4 号竪穴建物跡遺物 4



第 4 号竪穴建物跡遺物 5



第 4 号竪穴建物跡遺物 6

第 4 号竪穴建物跡遺物 7

図版 11



第 4 号竪穴建物跡遺物 8 (表)



第 4 号竪穴建物跡遺物 8 (裏)



第 5 号竪穴建物跡遺物 1



第 5 号竪穴建物跡遺物 2



第 5 号竪穴建物跡遺物 3



第 5 号竪穴建物跡遺物 4



第 5 号竪穴建物跡遺物 5



第 5 号竪穴建物跡遺物 6

图版 12



第 5 号竖穴建物跡遺物 7



第 5 号竖穴建物跡遺物 8



第 5 号竖穴建物跡遺物 9



第 5 号竖穴建物跡遺物 10



第 5 号竖穴建物跡遺物 11



第 5 号竖穴建物跡遺物 12



第 5 号竖穴建物跡遺物 13



第 5 号竖穴建物跡遺物 15

図版 13



第 5 号竪穴建物跡遺物 14



第 5 号竪穴建物跡遺物 16



第 6 号竪穴建物跡遺物 1



第 6 号竪穴建物跡遺物 2



第 6 号竪穴建物跡遺物 3



第 6 号竪穴建物跡遺物 4

図版 14



第 6 号竪穴建物跡遺物 5



第 7 号竪穴建物跡遺物 1



第 7 号竪穴建物跡遺物 2



第 7 号竪穴建物跡遺物 3



第 7 号竪穴建物跡遺物 4



第 7 号竪穴建物跡遺物 5



第 7 号竪穴建物跡遺物 6



第 7 号竪穴建物跡遺物 7

図版 15



第 7 号竪穴建物跡遺物 8



第 7 号竪穴建物跡遺物 9



第 7 号竪穴建物跡遺物 10



第 7 号竪穴建物跡遺物 12



第 7 号竪穴建物跡遺物 13



第 7 号竪穴建物跡遺物 11



第 7 号竪穴建物跡遺物 14

図版 16



第 7 号竪穴建物跡遺物 15



第 7 号竪穴建物跡遺物 16



第 7 号竪穴建物跡遺物 18



第 7 号竪穴建物跡遺物 19

図版 17



第 7 号竪穴建物跡遺物 20



第 7 号竪穴建物跡遺物 21



第 7 号竪穴建物跡遺物 22



第 7 号竪穴建物跡遺物 23



第 7 号竪穴建物跡遺物 24 (表)



第 7 号竪穴建物跡遺物 24 (裏)



第 7 号竪穴建物跡遺物 25 (表)



第 7 号竪穴建物跡遺物 25 (裏)

図版 18



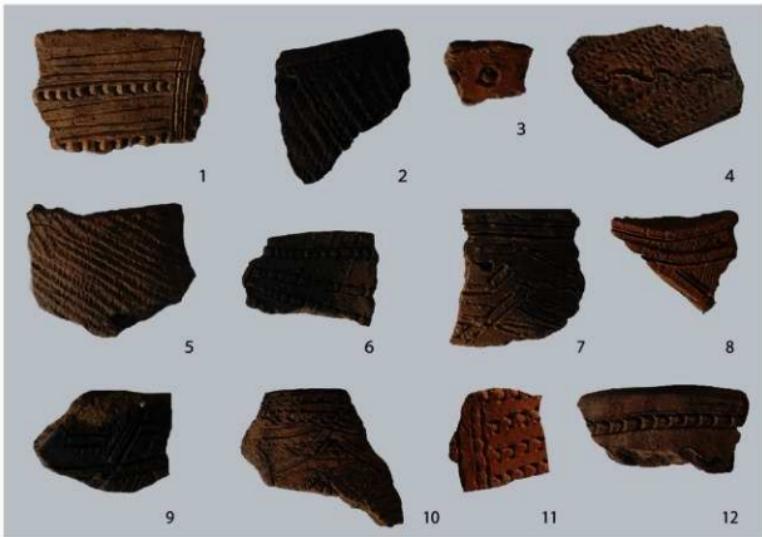
第 8 号竪穴建物跡遺物 1



第 8 号竪穴建物跡遺物 2



第 8 号竪穴建物跡遺物 3



縄文時代の遺構外出土遺物（1）

図版 19

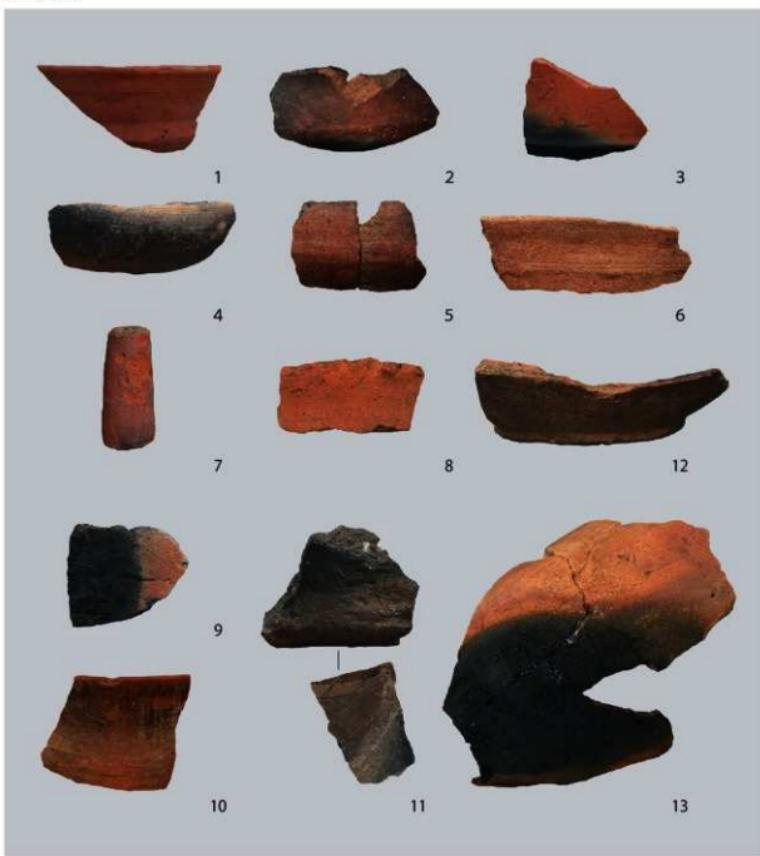


縄文時代の遺構外出土遺物（2）



弥生時代の遺構外出土遺物

図版 20



古墳時代の遺構外出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	おさえんいせき (だいよんちてんだいにじ)							
書名	御茶園遺跡（第4地点第2次）							
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第69集							
編集者名	米川暢敏・宮田和男・林邦雄							
著者名	米川暢敏・宮田和男・林邦雄							
編集機関	水戸市教育委員会							
所在地	〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 ☎ 029-224-1111							
発行年月日	2016(平成28)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 番号	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積	調査原因	
おさえんいせき 御茶園遺跡	みとしのんばとうあそせは 水戸市千波町字千波 山259番1ほか	201	325	36° 21'56" 56"	140° 26' 52"	2015.3.7 ～ 2015.4.10	562 m ²	宅地造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
御茶園遺跡	集落跡	縄文時代	なし		縄文土器 石器	今回の調査において縄文時代早期から近世までの遺構と遺物が確認された。特に、縄文時代前期の遺物が多く出土し、黒浜期から浮島期における集落が当該地付近に展開している可能性が高い。また、古墳時代前葉から中葉までを中心には堅穴建物跡8軒が検出されている。このうちカマドが確認された堅穴建物跡は3軒である。その他、少量ではあるが弥生後期の土器が出土し、中・近世以降の遺跡が2条、土坑が8基検出されている。今回の発掘調査で初めて遺跡において遺構が検出され、当該地における古墳時代における集落の一端が確認できたことは大きな成果となった。		
		弥生時代	なし		弥生土器			
		古墳時代	堅穴建物跡8軒		須恵器 土師器 石器 土製品			
		中世以降	溝跡2条、土坑8基		陶器 磁器			

項目	遺物の取り扱い
水洗い	・すべて行った。
注記	・手書きによる。例) 201325-004 SD1 のように注記した。
接合	・接合は必要に応じて最小限行った。
実測	・遺物実測図は報告書掲載分についてのみ作成した。
台帳	・遺物台帳、図面台帳、写真台帳があり、検索が可能なように作成している。
遺物保管方法	・出土遺物は、報告書使用と未使用に分け、収納箱に納めた。各箱には収納内容を明記している。

水戸市埋蔵文化財調査報告第 69 集

御茶園遺跡（第 4 地点第 2 次）

—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—

発行日 平成 28 年 3 月 31 日

発 行 水戸市教育委員会
〒 310-8610 茨城県水戸市中央 1 丁目 4 番 1 号
TEL 029-224-1111

編 集 関東文化財振興会株式会社
〒 308-0846 茨城県筑西市布川 1012
TEL 0296-28-7737

印 刷 山三印刷株式会社
〒 311-4153 茨城県水戸市河和田町 4433-33
TEL 029-252-8481